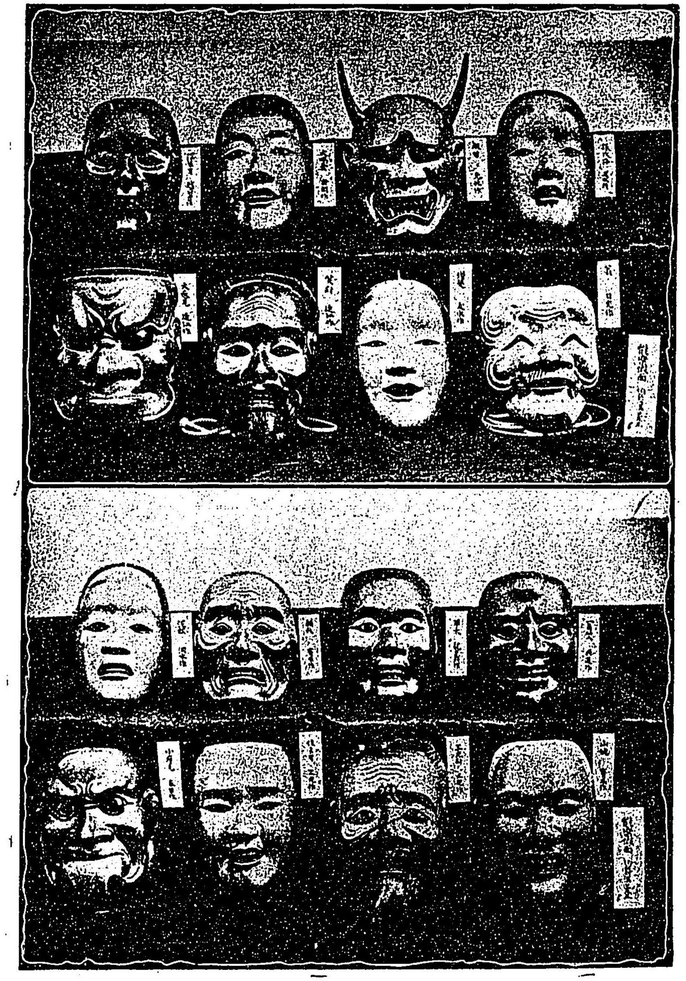
謡と能

日用百科
第四十五
博文館

複本
帝國圖書館藏

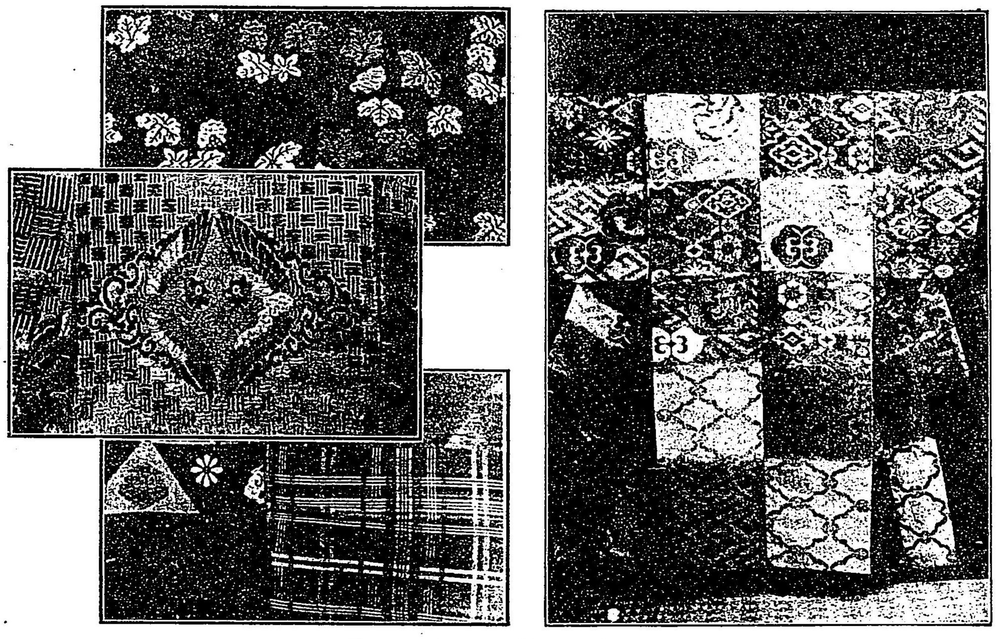
能樂假面



猶興舍印行

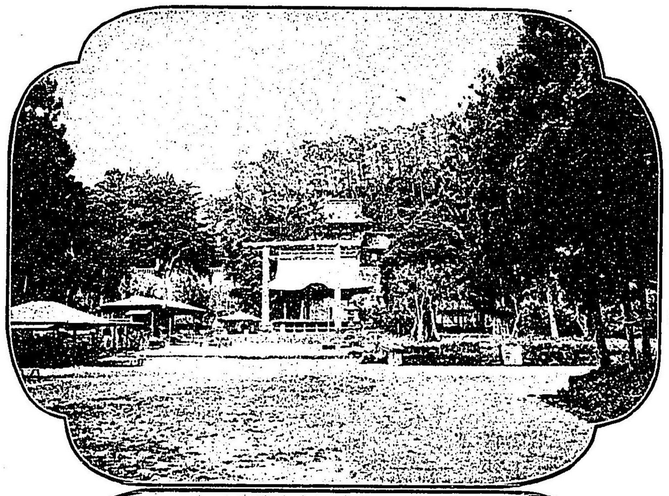
能樂假面

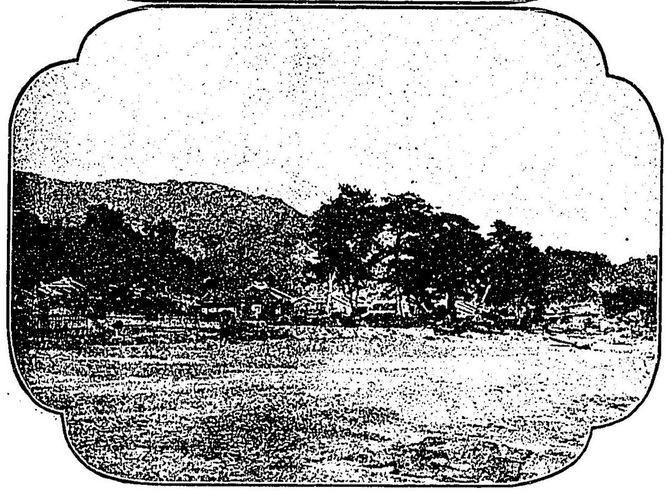
猶興舍印行



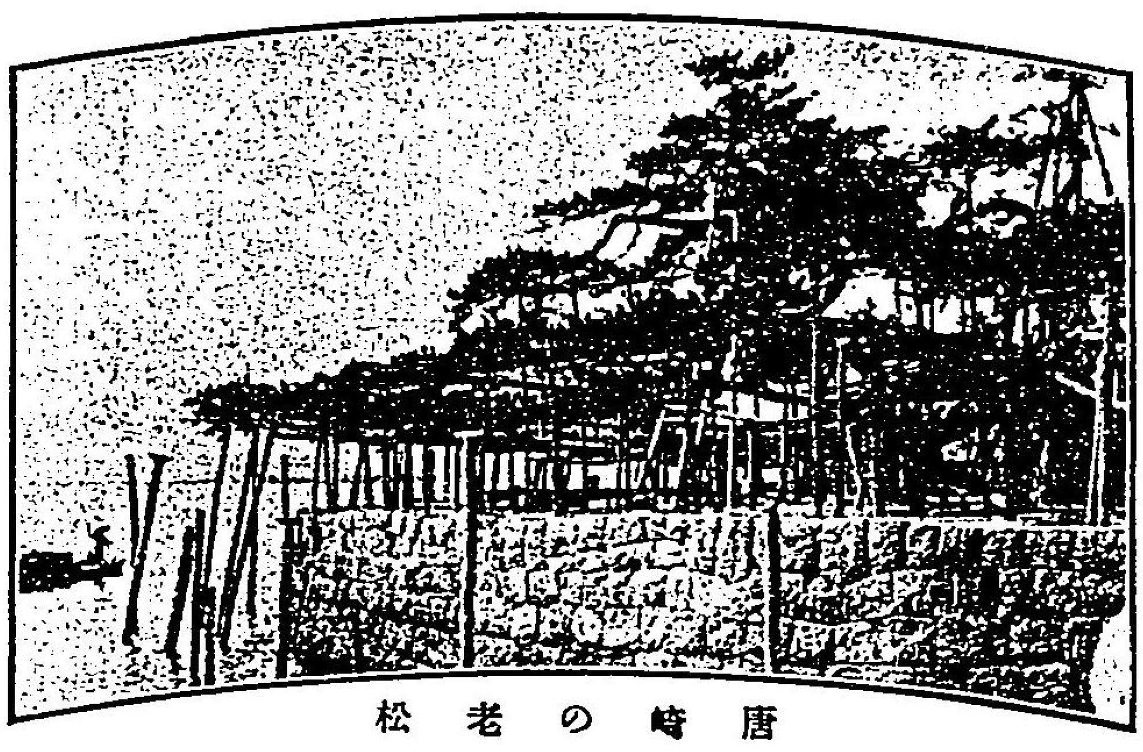
裝　衣　用　樂　能

鎌倉八幡宮

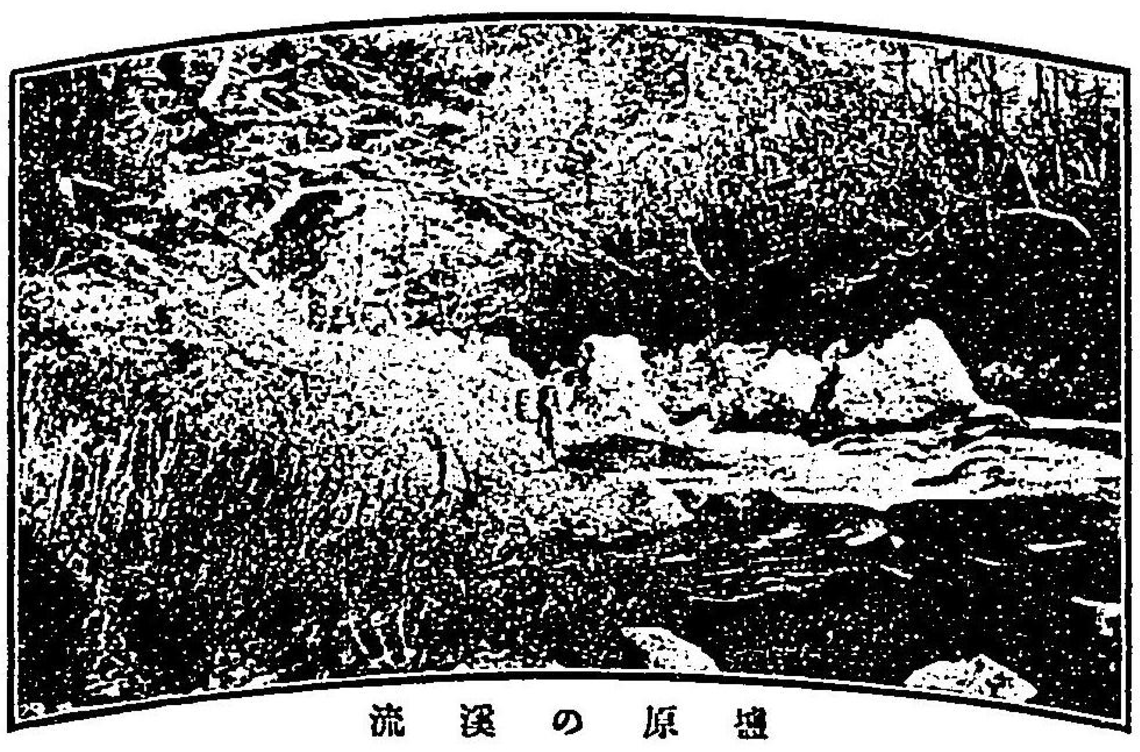




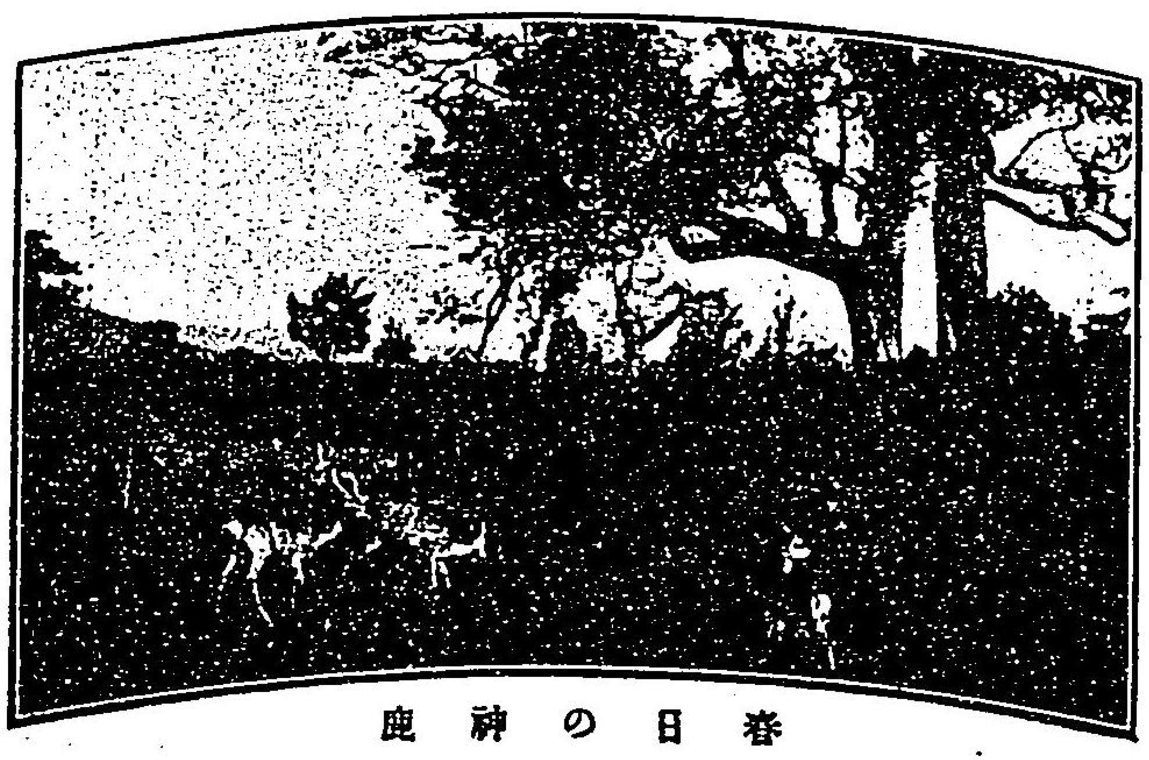
與津海岸の富嶽



唐崎の老松



塩原の渓流



春日の神鹿

宮島の晴潮

緒言

一、世に謡と能との事を述べたる書なきにしもあらずといへども、或は繁に過ぎ、或は簡に失して適度なるものを見ず。此書は謡ならば初學の人、能ならば好みて見物する人を讀者と假定して編述せり。

一、謡にても能にても流儀々々にて名稱符號を始とし總べて其趣を異にする事おほけれども此書はなるべく諸流を參酌して偏せざらん事を目的とせり。

一、されども文句は多く觀世流の謡本を引用せり。是れ世に最も廣く行はるゝは此流なるを信ずればなり。

明治三十三年六月

編者しるす

日用百科全書 第四十五編 謡と能目次

總說

其一　能と謡の名稱……一
其二　起原沿革……三
其三　猿樂と德川氏……一三
其四　流儀と家元……一九
其五　明和の改正……二二
其六　内外二百番……二五
其七　二百番の外……四一
其八　異名と古名……五二
其九　作曲者……五四
其十　番組……六四
其十一　習事……六八

謡

其一　番謡小謡素謡……七四
其二　閲曲……九三
其三　謡の心得……一〇一
其四　謡の修行……一一〇
其五　去嫌……一一三
其六　かざし文句……一一六
其七　節博士……一一八
其八　曲節……一二〇
其九　强吟弱吟……一四八
其十　緩急……一五一
其十一　位……一五四
其十二　調子……一五五
其十三　謡方……一五六
其十四　主眼の文字……一六一
其十五　文句の輕重……一六二

拍子

其一　八拍子……一六三
其二　太鼓……一六四
其三　小鼓……一六八
其四　太鼓……一七二
其五　笛……一七六
其六　一調一管……一七九

能

其一　舞臺……一八〇
其二　役者……一八二
其三　囃子方……一九四
其四　作物……一九四
其五　小道具……一九七
其六　面……二〇二
其七　裝束……二〇六
其八　次第……二一一
其九　一聲……二一五
其十　出端……二一七
其十一　早笛……二一九
其十二　大べし……二二〇
其十三　下端……二二一
其十四　來序……二二二
其十五　序の舞……二二四
其十六　眞の序……二二六
其十七　中の舞……二二七
其十八　天女の舞……二二八
其十九　破の舞……二二九
其二十　早舞……二三〇
其二十一　急の舞……二三〇
其二十二　男舞……二三一
其二十三　神舞……二三二

其二十四　神樂……二三三
其二十五　樂……二三三
其二十六　鞨鼓……二三五
其二十七　翁の舞……二三五
其二十八　千歳の舞……二三六
其二十九　亂……二三六
其三十　獅子……二三六
其三十一　亂拍子……二三七
其三十二　舞働……二三七
其三十三　イロエ……二四〇
其三十四　翔……二四一
其三十五　祈……二四二
其三十六　替の形……二四三
其三十七　舞囃子……二四七
其三十八　仕舞……二六六

鼇頭目次

謠曲解題　頁
高砂……一
田村……一
東北……二
道成寺……二
鵺……三
實盛……三
熊野……四
卒都婆小町……五
羽衣……五
竹生島……六
景清……六
班女……七
小鍋曾我……七
右近……八
邯鄲……九
千手……一〇
遊行柳……一〇
室君……一〇
張良……一一
朝長……一一
野宮……一二
滿仲……一三
土蜘蛛……一四
小鍛……一五
大原御幸……一六
百萬……一六
船弁慶……一七
岩船……一八
老松……一九
八島……一九
江口……二〇
望月……二一
紅葉狩……二一
葛城……二二
知章……二二
玉葛……二三
鞍馬天狗……二四
海士……二五
大鉢……二五
夜討曾我……二六
三山……二六
熊坂……二七
墨塚……二八
感陽宮……二九
忠度……三〇
隅田川……三〇
鉢木……三一
藤榮……三二
吳服……三三
花月……三三
花筐……三三
羽衣……三四
七騎落……三五
金札……三六
白樂天……三六
箙……三七
楊貴妃……三七
俊寛……四一
援風……四一
雛波……四二
放下僧……四三

松風……四三
安宅……四四
振袖……四五
雨月……四五
經政……四七
非塚……四七
天皷……四八
羅生門……四八
氷室……四九
正尊……四九
富士太皷……五〇
鐵輪……五一
唐船……五二
四王母……五三
巴……五四
杜若……五四
藤戸……五五
山姥……五六
嵐山……五七
養老……五七
敦盛……五九
井筒……五九
關寺小町……六一
石橋……六二
加茂……六二
木曾……六三
螢丸……六三
蘆刈……六四
殺生石……六五
夢界……六六
松虫……六六
三井寺……六七
水汲……六八
融……六八
鵜飼……七〇
賴政……七〇
夕顔……七〇
島巡船……七一
雷電……七二
志賀……七二
清經……七三
砧……七三
阿漕……七五
大江山……七五
春日龍神……七六
四行櫻……七七
大瓶猛々……七八
三輪……七九
鵜……八〇
芭蕉……八一
草紙洗小野……八二
烏帽子折……八四
自髭……八五
三笑……八五
竹雪……八六
娥捨……八六
弓八幡……八八
項羽……八八
源氏供養……八九
錦木……八九
大會……九四
皇帝……九六
春榮……九七
能太皷……九七
一角仙人……九八
自然居士……九八
放生川……九九
生田敦盛……一〇〇
胡蝶……一〇〇
柏崎……一〇〇
通小町……一〇一
當麻……一〇二
調伏曾我……一〇四
元服曾我……一〇五
合浦……一〇五
龍田……一〇六
錄平……一〇七
誓願寺……一〇七
葵上……一〇八
禪師曾我……一〇八
佐保山……一〇九
通盛……一〇九
祇王……一一〇
富野物狂……一一一
須磨源氏……一一二
卷絹……一一三
關原興市……一一三
藤……一一四
鶴鶴小町……一一四
松山鏡……一一六
枕慈童……一一六
忠信……一一九
吉野靜……一二〇
二人靜……一二〇
歌占……一二一

第六天……二一
船橋……二四
真延……二五
現在七面……二七
蟹……二七
東方朔……二八
俊成忠度……二八
梅枝……二九
加茂物狂……二九
車僧……三〇
御裝束……三〇
碇泊……三〇
浮船……三一
千引……三二
小鍛冶……三二
玉井……三三
橘雅慶……三三
檜垣……三三
東屋居士……三四
國栖……三七
江島……三七
鱗形……三八
佛原……三九
観祇王……四〇
葛城天狗……四〇
和布刈……四〇
土車……四二
櫻川……四二
飛鳥川……四三
令和……四三
道明寺……四五
湛海……四七
住吉詣……四七
谷行……四八
龍虎……四九
殿號……四九
空蟬……五〇
六浦……五〇
水無月祓……五〇
昭君……五一
大祓……五一
淡路……五二
雲雀山……五二
懸重荷……五三
花車……五三
水無瀬……五四
吉野天人……五五
錦戸……五五
野守……五六
蟻通……五六
大佛供養……五七
女郎花……五七
定家……五八
鐘馗……五八
給島……五九
泰山府君……六〇
半部……六一
墨染櫻……六二
飛雲……六三
伏見……六三
雪……六三
草知島……六四
愛宕空也……六四
九世戸……六四
松尾……六五
落葉……六五
藍染川……六六
松山天狗……六七
鵜祭……六七
源太夫……六八
雲林院……六八
綾鼓……六九
輪蔵……六九
代主……六九
盛久……七〇
梅……七〇
草薙……七一
逆矛……七一
切兜曾我……七二
采女……七二
舞車……七四
常陸帶……七四
浦島……七五
猛々……七六

閑曲集

淡路……七七
上宮太子……七八
隠岐物狂……七九
歌占……八〇
嶋廻……八二
卒都婆ながし……八四
由良物狂……八五
鳴物狂……八八
香椎……八九
石橋……九〇

白髭……九一
高雄……九三
二人御子……九四
吉野琴……九五
須磨源氏……九六
松浦物狂……九七
徳山寺……九八
兵揃……九九
舞車……二〇〇
同……二〇一
花がたみ……二〇二
檀山……二〇四
玉さり……二〇五
湯衣……二〇六
蛙……二〇七
高野物狂……二〇八
敗路物狂……二〇九
鬼の論……二一〇
定家一字瓶……二一一
されかた……二一一
八尺……二一二
同……二一三
鼓の浦……二一四
博多物狂……二一五
初瀬六代……二一六
光帝……二一九
飛鳥川……二二二
俊成忠度……二二三
阿古屋松……二二四
碁……二二五
反魂香……二二六
真延……二二七
水骨頌書……二二八
正登起請文……二二九
安宅勧進帳……二三〇
笠取……二三一
粉川寺……二三二
太刀掘……二三三
那須……二三五
吉野……二三六
俊國……二三七
更級……二三八
五輪碎……二三八
東國下……二四〇
四國下……二四四
舟立合……二四八
弓矢立合……二四八
思婆……二四九
驚法……二五〇
祇王……二五一
人丸……二五二
富士山……二五三
さんそう……二五四
高安……二五五
内府……二五六
脈論……二五七
擬染櫻……二五八
一枚起請……二五九
元服曾我……二六〇
りう……二六一
室君……二六一
星……二六二
餅酒……二六三
鷹鷹金……二六三
若松……二六四
掛川……二六四
小山伏……二六四
末松山……二六四
宇治のさらし……二六五
七つに成る子……二六五
京土産……二六六
十七八……二六六

狂言謡

日用百科全書
第四十五編

謡と能目次

終

日用百科全書
第四十五編

謡と能

大和田建樹編

謡曲解題

高砂

前シテ　翁
ツレ　姫

後シテ　住吉明神
ワキ　阿蘇の神主

播磨

處は古今集の序に依りて高砂住吉の松のいはれを說き。其松を歌道の譬に取りて君が代を祝ひ奉るを主とせり。されば此曲を以てすべての能の始に置き。德川氏の謡初の式にも先づ四海波の章を謡はしぬ。其外祝言はに必ずこれを用ふるが古實なり。

田村

前シテ　童子
後シテ　坂上田村丸

總說

其一　能と謡の名稱

能は一名を猿樂といふ。能とは藝能の能の字にして。一番の能をするといふは。一番の藝をするといふが如し。猿樂の名の起りには古來諸說ありて。或は猿樂田樂もと同類なるが故に。田の字の上下の枠を引き延ばして申樂と書きたるに始まるとも云ひ。又は神樂より出でたるものなれば。神の字のツクリを取りて申樂と名づけしとも云ふ。

然れども是等は何れも牽強附會の俗說にして取るに足らず。散樂の文字を音の近きによりて。猿樂と書きたりといふを正しとすべし。散樂は支那にて俗樂を稱ふる名にて。我國にても。音樂種々の散樂を奏すなどいふ明文の。古書に彼是見えたればなり。

されば始は田樂の能と區別して。猿樂の能と稱へしを。田樂すたれ

ワキ　僧
處ハ　京都
清水寺にて田村丸の幽靈旅僧にあひて觀音の佛德をのべ。わが軍功の樣を物語る事を作れり。田村と八島と箙との三曲は勝軍の物語なれば。勝修羅とて祝言の能に用ふ。修羅とは合戰の意なり。

前シテ　女
後シテ　和泉式部
ワキ　僧
處ハ　京都
東北院の名木につきて和泉式部の古へを語る事を作れり。梅の故事なれば。初春の謠初式にも德川氏は之を用ひたり。

道成寺
前シテ　白拍子
後シテ　蛇躰
ワキ　道成の僧
ツレ　同
狂言　能力
處は　紀伊
道成寺の鐘に恨をのこしたる女。ちかきあたりの白拍子とあらはれて供養に詣で。舞をまうて見せんとて。番僧の眠れる間に鐘樓にのぼりて鐘を引きおとしけるが。つひに法力によりて蛇躰と變じ失せける事を作れり。實事を影にして亡靈の熱心を殘せる事にしたるが此能の眞味なり。

鶴亀
シテ　皇帝
ワキ　大臣
處は　唐土
これは鶴亀を長壽の動物として祝儀の材料に用ふる習慣あるにより。例を唐土に假りて作れるなり。言の眞味は專ら佛法くさきものに在れば。祝言などには目出度からずとて。かくの如き作も起れるなるべし。

賀盛
前シテ　老翁

て猿樂ひとり榮えしかば。或は猿樂ともいふ。或は能とばかりもいふ事となりたるなり。

されど能とばかりにては物足らずとてや。近頃は能樂と樂の字を加へていふ人の多きは。とかく物事淡語めかさんとての嗜好より出でたるならん。德川時代には幕府の式樂となりゐたるが爲め。皆人これを尊びて御能と稱へしこと。誰も知るところなり。御能組。御能役者。御能舞臺などゝこそ云へ。御能樂組。御能樂役者。御能樂舞臺などゝは稱へざりしにあらずや。

近來は外國語に能樂の文字を譯してノー、ダンス（能の舞踏）といふこれにつき可笑しかりしは。先年横濱にて明治女學校の校資義捐募集の能樂會を催したるが。番組のノー、ダンスとありたるを見て。或る亞米利加人。何くをダンスなりやと樂屋に問ひに來りし事なりき。その時は能は羽衣なりしが。いかにも亞米利加人の目にて舞踏めきたる處はあらざりしならん。余は曰ふ。能樂は寧ろノー、アクト（能の所作）と譯せんこそ稍や穩當ならめと。

能は用ふる歌詞を謠といふ。これも近頃は謠曲と稱ふること流行になりたり。ウタヒはもと歌ふといふ動詞を名詞にしたる言葉にて。他の詠歌や小唄などの類に混ぜざらしめんが爲め。ウタといはずして特にウタヒと呼び來りしものと見ゆ。文字も今は謠の字のみを書けども。古くは謠。謡などの字をも書きたり。

其二　起原沿革

猿樂の始は神樂より出づ。中古王朝時代の頃は。神樂。東遊。大和舞などいふ高尚優雅の音樂ありて。朝廷の御神事に用ひられ。國々の社々に行はれたりしが。王室衰へ幕府さかんなる世となりては。古式漸う一變して新樣の歌舞おこる事となりぬ。他なし中古以來のものは。神さびて有りがたき感情こそあれ。あまり人間遠くして神慮をすゝしむるに適せずとや。當時の人は思ひけらし。

當時諸國に散在して神社に奉仕し。祭典に歌舞を奏するを以て役目とせしものを數ふれば。

和屋
勝田
主門
山階
下坂
ナシ
……の三座は……伊勢大神宮。
……の三座は……近江日吉社。

後シテ　實盛
ワキ　僧
ツレ　同
處ハ　越前

佛法を說かんとて實盛の幽靈を現じ。それをして軍功を語らしむる作者の趣向なり。時宗緣起に。他阿彌上人巡國して實盛の舊跡を過ぎしに。魂魄來つて上人に見えしかば。七日逗留して別時の大念佛を施行せし事見ゆ。これを本として作れるなるべし。

熊野

シテ　熊野
ツレ　朝顏
ワキ　平宗盛
トモ　太刀持
處ハ　京都

平宗盛に熊野と云へる愛妾あり。老母の病氣とて熊野は暇を願へど中々ゆるさるゝけしきもなく。强ひて花見に伴はれ行きしが。落花の和歌より主人の心にはかに解けて東に歸さるゝ事を作れり。心ならずも花見の供する途中。みる物事につけて無常を感じ母を氣づかふさま。讀む人をして覺えず落涙せしむ。

卒都婆小町　小野小町

シテ　僧
ワキ　同
ツレ　掘津
處ハ　小野の小町の年老い零落せる樣を玉造と云ふ書によりて作れり。先づ卒都婆に腰かけたるより僧と問答を起して歌よむに至り。忽ち少將の靈につかれ物狂となり。終に佛果を得るを以て結びたり。能にては老女ものとて重々しき習事とす。文もその心して見るべし。

羽衣

シテ　天人
ワキ　漁夫
ツレ　同
處ハ　駿河

本座（丹波）
新座（河內）
法成寺（掘津）
……の三座は……加茂住吉兩社。
圓滿井（今の金春）
結崎（今の觀世）
外山（今の寶生）
坂戶（今の金剛）
……の四座は……奈良春日社。

に屬して。おの〳〵其業に從事し。多少の進步改良を圖りつゝありしものゝ如し。これを能役者の起原とす。

今も其能役者の家々にて秘事となし。之を勤むる前には必ず別火潔齋してするといふ翁を能の劈頭に置き。翁は大神宮を表し。千歲は戶隱大明神。三番叟は住吉大明神を表すと言ひ傳へ。之に次いでは神能として高砂。弓八幡。養老。淡路。竹生島。白髭の類。すなはち神社の緣起や神德の來由などを作りたる能を重んじて。其家々の傳授事となしたるは。取りも直さず能の神樂より出でゝ。神職の手に發育生長せし時代の遺風を知るべきなり。

傳へ曰ふ。後嵯峨天皇の御宇に。むかし村上天皇の御文庫に納め置き給ひし十六章の謠物の次第。かねて啟聞に入りたるを思召し出だされ。謠ひ舞ふべきものなりとて。上代の樂人の頭取たりし大和圓滿井が家に賜ひぬ。故に音曲の鳴物を添へて今の能を仕始めたりとこの說こと〳〵くは信ずべからざれども。能の家柄として圓滿井の最も古き事と。芭蕉。東北。源氏供養。錦木をはじめ。（以下の名題は傳はらず）十六番の謠物が古作として（後嵯峨の御時までは古からずとも）其家々に尊ばるゝ事とは。事實なり。

此十六番の謠物は。今の能の一番の如く首尾完全せるものにらあらず。謂はゆる曲舞（久世舞とも書く）と稱へて。短篇のものなりしなり。即ち今の一番中のクセと記せるところの文句にて。芭蕉にては。

水に近き樓臺は。まづ月を得るなり。陽に向へる花木はまた。春に逢ふことやすきなる。その理りも樣々の。げに目の前に而白やな。春すぎ夏たけ。秋くる風の音づれは。庭の荻原まづそよぎ。暮れかゝる秋と知らすなり。身は古寺の軒の草。忍ぶとすれど古へも。花は嵐の音にのみ。芭蕉葉の。もろくも落つる露の身は。おきどころなき虫の音の。蓬がもとの心の。秋とてもなどかかはらん。よしや思へば定めなき。世は芭蕉葉の夢の內に。男鹿の鳴く音は聞きながら。驚きあへぬ人心。思ひ入る

昔物語を種として三保の松原に天人の降りし事を作れり。衣を松の木に掛けおきたるを漁夫に拾はれて天にも歸る事かなはず悲しむところ。尤一篇の眼目なり。その悲しむさまいかにも優美にて。謂はゆる哀しんで傷らざるもの。謠の内にも此の作の如く精神高尚にて餘情遠大なるは外に比類おほからざるべし。

竹生島

前シテ　漁翁
ツレ　嫗
後シテ　龍神
ツレ　天女
ワキ　臣下
處ハ　近江
竹生島明神の神徳を述ぶるを主とせり。

景清

シテ　景清
ツレ（ヒメ）　人丸
トモ　從者
ワキ　里人

さの山はあれど。たゝ月ひとり伴なひ。馴れぬる秋の風の音。起き臥し茂き小笹原。しのに物思ひ。立ち舞ふ袖。しばしいざや返さん。

東北にては。

ところは九重の。東北の靈地にて。王城の鬼門を守りつゝ。悪魔を拂ふ雲水の。水上は山陰の鴨川や。末白河の波風も。いさぎよき響は。常樂の緣をなすとかや。庭には池水をたゝへつゝ。鳥は宿す池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かず〳〵の。袖を連ね裳裾を染めて。いろめく有樣は。げに〳〵花の都なり。見佛聞法のかず〳〵。順逆の緣はいやましに。日夜朝暮に怠らず。九夏三伏の夏たけて。秋きにけりと驚かず。澗底の松の風。一聲の秋を催して。上求菩提の機を見せ。池水にうつる月かげは。下化衆生の相を得たり。東北陰陽の。時節もげにと知られたり。

源氏供養にては。

そも〳〵桐壺の。夕べの煙すみやかに。法性の空に至り。箒木の夜の言の葉は。つひに憂樹の花散りぬ。空蟬の。むなしき此世を厭ひては。夕顔の。露の命を觀じ。若紫の雲の迎へ。末摘花の臺に座せば。紅葉の賀。秋の落葉もよしやたい。たま〳〵佛意にあひながら。柳葉の。さして往生を願ふべし。花散る里に住むとても。愛別離苦のことわり。まぬかれがたき道とかや唯すべからくは。生死流浪の須磨の浦を出でゝ。四智圓明の明石の浦に。みをづくしいつまでもありなん。たゝ遂生の宿ながら。菩提の道を願ふべし。松風の吹くとても。紫障の海雲は。晴るゝこと更に無し。秋の風消えずして。紫磨忍辱の藤ばかま上品蓮臺に。心をかけて誠ある。七寶莊嚴の。槇柱のもとに行かん。梅が枝の。匂にうつる我心。藤の裏葉におく露の。その玉葛かけしばし。朝顔の光たのまれず。朝には桐壺の。陰に宿木名も高き。官位を。東屋の内にこめて。樂しみ榮えを。浮舟に螢ふべしとかや。是も蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋を打ち渡り。身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來。狂言綺語を振りすてゝ。紫式部が後の世を。助け給へと諸共に。鐘うちならして。回向も既に終りぬ。

錦木にては。

夫は錦木を運べば。女は内に細布の。機織る虫の音に立てゝ。問ふまでこそなけれども。互に内外にあるぞとは。知られ知ら

處ハ　日向

さしも平家には忠勤なりし悪七兵衛景清も。おちぶれて後は日向の勾當とて乞食のさまなりしを。人丸と云ふ娘の遙々尋ね來て面會する事を作れり。前は自の身に耻ぢて娘をもあざむき歸す武士の魂を主とし。後は軍がたりに及びて懷舊やるかたなき未路の情を寫す。字々涙とも云ふべき作なり。

班女

シテ　花子
ワキ　吉田少將
トモ　同人從者
狂言　宿の長　前ハ美濃　後ハ京都
處ハ

吉田の少將の契りし女。形見の扇を身に離さで戀ひわぶる餘り狂女となりたるが。つひにめぐり逢へる事を作れるなり。すべて扇をもて物語の種とす。

小袖曽我

シテ　曽我十郎祐成

ツレ　同　五郎時致
同　従者團三郎
同　鬼王丸
同　十郎母
狂言　春日の局
處ハ　伊豆

曾我十郎はこのたびの富士の巻狩を機會として親の敵を討たんとする下心なれば。勘當せられし弟の五郎を母のもとに同道して。それとなしに暇乞する事を作れり。さて本文中に其事なきに小袖とも名づけたるは。十郎兄弟かねて期しつる事なれば形見にせんとて。母より小袖を借りて出づること曾我物語にあり。人の常に知る物語なれば此こゝろを用ひて本文に拘はらぬはかへりて面白し。後のものならば勘當曾我とか離別曾我とか名づけもやせんと思ふに。

右近

前シテ　女
ツレ　同

る丶中垣の。草の戸ざしは其まゝにて。夜は既に明けゝれば。すご〳〵と立ち歸りぬ。さる程に。思ひの數も積りきて。錦木は色くちて。さながら苦に埋木の。人知れぬ身ならば。かくて思ひもとまるべきに。錦木は朽つれども。名は立ちそひて逢ふ事は。涙も色に出でけるかや。戀の染木とも。此錦木をよみしなり。思ひきや。楯の端書かきつめて。百夜も同じ丸寐せんとよみしだにあるものを。せめては一年まつのみか。二年あまり有り〳〵て。はや陸奥の今日までも。年紅の錦木は。千度になればいたづらに。我も門邊に立ち居り。錦木と共に朽ちぬべき。袖の涙のたまさかにも。などや見々え給はぬぞ。さていつか三年は滿ちぬ。あらつれなつれなや。

後には原文よりは增補し修正もしたるべけれど。まづかやうのものを謠ひて舞ひたるが其始なりと想像せば。大差なきに近かるべし。そも〳〵當時曲舞と稱へたる一種の歌曲は。白拍子が今樣を歌ひて舞ひたる類のものにして。女の職業とせし事は。足利時代の風俗を寫せる職人盡歌合の繪を見ても。知らるべし。それも始は。

月にはつらき小倉山。その名はかくれざりけり。

などいふ今樣めきたる歌をうたふ事なりしが。つひに能役者の家に

後シテ　北野の神
ワキ　鹿島の神主
處ハ　京都

神德を美しく述べん爲に春のけしきもて裝はせたる作なり。

邯鄲

シテ　盧生
子方　舞人
ワキ　敕使
ツレ　大臣
狂言　枕の主
處ハ　唐土

もろこし蜀の國のかたほとりに盧生と云へる少年あり。粟飯一炊の間に常と爲り仙と爲り有らゆる榮花を受け盡すと見つるが。忽に夢さめて茫然と起き上り。こゝに始めて名譽心も利達心も失せて悟を開きしと云ふ事を。唐土の物語によりて巧に面白く作りなしたり。前は歌舞音樂の響き宮殿に滿ち。後は一聲の松風茅屋に落ちて心耳を洗ふ。讀者の魂一たびは移りて男の藝とは爲りにけり。今も能のクセを舞ふ時。扇を横に顏を隠すやうにして上端を謠ふは。曲舞の遺風なりとも言ひ傳ふ。

室町將軍足利義滿の時に至り。かの結崎の家に三郎清次といふものあり。此藝を善くせしが爲め。義滿に抱へられて童坊の役を勤め。名を改めて觀阿彌といへり。其子世阿彌元清も父に繼いで將軍の寵を受けしかば。大いに能樂擴張の機會を得。殊に父子とも學問あるものなりしが故に。曲舞の前後にサシとキリとを加へ。また次第。道行。一聲。下歌。上歌。ロンギ。中入。待謠などさま〳〵に工夫して。古作を增補し新作を組立てつゝ。專ら其進歩を圖りしかば。節定まり舞整ひて。世に行はるゝ事も著るしく。遂に將軍家の音樂となりて。儀式典禮に用ひらるゝこと。恰も神樂の朝廷に用ひられしが如き勢をなしたり。いでや之を作り。之を廣め。之を繼ぎ。之を興したる人々を聊か紹介とん。

既にいへる結崎清次は伊賀の國杉内の住人。服部治郎左衛門信清の三男にして。五十二歳の時。應永十三年沒せしかば。其子元清業を繼いで從五位下に昇し。左衛門太夫となり。八十一歳にして棄正元年沒せり。清次の二男音阿彌元重。繼いで三代となり。觀世音の御夢想に感じたりとて。始めて結崎を改め觀世と名のる。是より代々

盧生と共に躍り。一度は盧生と共に茫然たるべし。

シテ　千手
ツレ　千手の前
ワキ　重衡卿
　　狩野介宗茂
　　鎌倉
　　藤
處ハ

三位中將重衡は生田の森の副將軍なりしが。一の谷にて生捕られ壽永三年鎌倉に下り。狩野介宗茂にあづけられたり。其時の事を作れり。千手の前との掛合の内かぎりなき悔恨の情あり。

遊行柳

前シテ　老人
後シテ　柳の精
ワキ　遊行上人
處ハ　陸奥

遊行上人の法力に依りて心なき柳の精までも成佛する事を作れり。

シテ　室君
　　室の明神（但し一句も謠はず）
ツレ　室君
ワキ　神職
狂言　下人
處ハ　播磨

室の遊女と明神との事を作れり。

張良

前シテ　老人
後シテ　黄石公
ワキ　張良
處ハ　唐土

前漢の張良が圯上の老人より兵法を授かる一段の物語を作れり。

朝長

前シテ　女
トモ　從者
後シテ　太夫進朝長
ワキ　僧
ツレ　同
處ハ　美濃

義朝の二男に中宮少進朝長とてありける

この道の繼續者となりて將軍家に仕へしが。德川幕府に至りては。殊に能役者中の首席を占め。その威望ならびなきに至りぬ。是れ今の觀世清廉の家なり。

結崎に繼いで能の家を興したるもの三つあり。圓滿井。外山。坂戸これなり。他の大神宮に日吉社に加茂住吉に奉仕せしものは。もはや寥々聞ゆるなきに。此三家のみは能の隆盛に赴くと共に。いよ〳〵其技を研き其道を究め。圓滿井は今春となり。外山は賓生となり。坂戸は金剛となり。結崎の觀世とならびて能の四座と稱せらるゝに至れり。

今春（後金春の文字に改む）は大和の人にして竹田氏を名のりしが。義滿將軍の頃。式部太夫氏信といひし人あり。結崎元清の聟となりて能を能くし。その作に巧なりしかば。聲名一時にあらはれ。遂に家を興せり。此人より今春と稱し。落髮の後は禪竹（善竹と書きたるもあり）と號す。その子宗印より傳へて孫の八郎元安に至る禪風と號し。又能作に名ある人ありき。是れ今の今春八郎の家なり

賓生（保生とも書く）はもと觀世が一族。これも服部氏にして。元清の次男を其養子としたるより。一時に家を興せり。故に觀世賓生は分れて二家をなすといへども。もと兄弟同士にして謠方の大差なきは。今日も實地に聞きて味ふ人の解するところならん。これ今の賓生九郎の家なり。

金剛は最初の圓滿井が六代目の分れにして。大和の坂戸郷四百五十石を領せし故に坂戸と名のりしが。今春に引き續き家を興せり。其子孫に鼻金剛と呼ばれし名人出でゝ。德川氏初代の頃最も世に知られしは。此流儀の隆盛を來すに與つて力ありしといふ。これ今の金剛鈴之助の家なり。

鼻金剛の弟子に喜多七太夫といへるものあり。父は泉州堺の者なりしが。七太夫廿七歳の頃。大坂夏の陣に今春大太夫と共に大坂に籠城し。大太夫は騎馬にて。七太夫は步行にて東軍に切り入り。武名を擧げゝるが。大坂落城の後。七太夫は大和の方へ落ち行きたるを能の上手なりとを以て秀忠に召し出だされ。遂に一家を成して。喜多流と呼ばるゝに至りぬ。これ今の喜多六平太の家なり。

其三　猿樂と德川氏

德川の天下大いに定まるに及び。觀世以下の太夫は重く用ひられて幕府の式樂を掌るに至りしは人の知るところ。毎年正月三日には謠初の式ありて。頗る大切なる嘉例となりしよし。諸侯の家々にても

が。平治の合戰に打敗れて父と共に青墓の宿まで落ち行き。こゝにて重傷に堪へかね自刃して失せし事を。半は女に語らせ半は幽靈に語らせて陰と日向とに作れり。まづ墓譜したる女に旅僧の行き合ひて朝長の跡吊ふ事に及び。夢幻の間に幽靈を現ぜしむる作者の手際は。彼源氏物語にて名高き夕顔の卷にも劣らじと云ふべし。

野宮

前シテ　女
後シテ　六條御息所
ワキ　僧
處ハ　京都

六條の御息所は一人の御むすめを持ちて後家ずみし給ふ處に。光源氏の君しのびて通ひおはしぬ。然るに源氏の御寵愛上と申すは左大臣の女にて威勢も強かりしかば。或年賀茂の祭見に出でたる御息所の車を。其下人ども押しやりなどして散々に耻見せたる事あり。かねての嫉妬心の上に此恨みまで添ひて御息所の生靈は葵上を惱まし。つひに取り殺しけるを。源氏はあまりの事に覺えて疎んじ給ひ。これより御中かれ〳〵になりて頼み少なく見えしかば。其頃おん娘の齋宮にたちて伊勢の國に下らんとし給ふに。御身もつきそひ行かんとて先づ野宮に籠りおはすを。源氏の訪ひ給ひし時の事を。幽靈の物語にして僧を相手に作りたり。これは源氏物語に依りて立てたる趣向なれば。此類の謡を源氏ものと云ふ。なほ他の夕顔玉葛浮舟を始として。いづれも優美にたをやかなる姿の作と知るべし。

シテ　藤原仲光
ツレ　多田滿仲
子方　美女丸
同　幸藤
ワキ　惠心僧都
處ハ　堀津

多田滿仲に美女丸とて一子ありけるが。之に習ひて。おの〳〵適度の式を行ひ。是が濟まぬ内は。何くにても小謡をうたふ事さへならぬなどの。習慣までも立てられたり。

そも〳〵謡初の式は。足利氏の時。正月四日御厩にて觀世一曲を謡ひ。時服を賜ひしといふに其端をおこし。豐臣氏の頃は正月二日に之を行ひしが。德川氏に至りては三日を以て永世不變の定日と定められぬ。當日酉の上刻將軍本丸の大廣間に出座し。三家。溜詰。國主。外樣の大名。諸代の面々。萬石以上以下。布衣以上の役人。皆襲斗目上下にて出仕し。將軍より御盃を賜ふところに。觀。寶。今喜(觀今二流は每年。寶喜二流は隔年)の太夫を初め。脇師。狂言師囃子方。地謡の諸役者。おの〳〵素袍。侍烏帽子にて三の間の椽側に伺候し。將軍の御盃に三献つゞを相圖に。觀世太夫平伏のまゝに番あり。畢りて白綾紅裏の時服を三人の太夫に賜ひ。他の役者には折紙を賜ふ。こゝに於て太夫は御前にて賜はりたる時服を素袍の上に着し。三人相舞に弓矢の立合を舞ふなり。

その文句は。

シテ「釋尊は〳〵。地「大悲の弓に。智惠の矢をつまよりて。三どくの眼をおどろかし。愛染明王は弓矢をもつて。陰陽の姿をあらはせり。されば五大明王の文殊は。袈由と現じて。枳首蛇を取つて弓を作り。眼睛を化せしめて矢となせり。又我朝の神功皇后は。西都の逆臣を退け。民堯舜の榮えなり。應神天皇八幡大菩薩。水上清き。石清水。ながれの末こそ久しけれ。

此弓矢立合の曲は。幕府の謡初式と奈良春日の薪能とに限る事なるが。春日にては「釋尊は」の前に。なほ謡本半枚あまりの文句あり。さて右舞ひ終りて。將軍みづから肩衣を脱ぎ。之を座首なる觀世太夫に投げ與ふるを。側役受けて老中に渡し。老中又受けて椽側に至り太夫に渡す。是より三家以下の諸大名。みな一同に肩衣を脱ぎて太夫に賜ふを例とす。是にて謡初の式は終るなり。この諸大名より受けたる肩衣は。太夫翌日これを持參しておの〳〵其屋敷に至り。之と引替に目錄を受くる事なれば。太夫一年の富は。ほとんど正月三日にて定まる程なりしといふ。

德川家にて能を典禮に用ひしは。先づ御大禮に五日の定めなり。すなはち將軍宣下。官位昇進。代替。婚禮。徒移。誕生等の祝として催さるゝもの是なり。之に次ぎては勅使東下の時。公卿御馳走と稱して一日。德川氏代々の大法事すみたる後。御法事濟と稱して四日おこなはるゝ事なり。以上儀式的能にして。本丸大廣間の南庭なる

學問を心に入れぬとて父の怒を受け手討に遇はんとせしを。仲光と僧都とに救はれて遂に勘氣を解かれ。仲光の一子幸壽はその身代に立ちて首討たるゝ事を作れり。當時武士のたましひ斯くこそと思はれてすはれなり。

土蜘蛛

前シテ　僧
ツレ　源頼光
同　胡蝶
後シテ　蜘蛛の精魂
ワキ　頼光の郎等（前ハ京都　後ハ大和）
處ハ

光の病中に土蜘蛛の精魂來りて惱まさんとせしを。枕邊なる膝丸の太刀もて切り拂はれ其場は立ち退きしかば。郎等其跡を認め行きて遂に葛城山の巣窟に至り。之を退治せし昔語を作れるなり。

小鹽

前シテ　翁
後シテ　在原業平

舞臺に於て執行せらるゝ故。これを御表能と稱ふ。何れも翁附禮脇にて。當日出勤の役者は。樂屋にある時は麻上下。舞臺に出づる時は（當役の外）素袍を着用し。嚴然肅然威儀侵すべからざる有樣なりき。

御大禮能の内。將軍宣下婚禮等の祝賀には。參向の公卿を始め。諸大名諸役人に見物を許さるゝ事なりしが。中に一日は江戸八百八町の町人には拜觀を申付けらるゝ事あり。之を町入能といふ。當日は先づ拜觀の町人を二つに分つて。午前の分と午後の分となし。午前の分は各町名主おの〳〵相引き連れて。前夜より大手桔梗の兩門外に押し寄せ。皆それ〳〵に町名を錐太に記したる高張提灯を掲げてその場〳〵に陣を取り。酒肴など携へゆきて飲食しつゝ夜の明くるを待つ有樣は。火事場のやうにもあり陣營のやうにもありと。當時を見たる人は語りぬ。

さても當日は立錐の地をも餘さぬ混雜なれば。通常の上下を着用してはとてもたまるまじと。皆々古上下に紙の裔樂を張り。或は紙製て肩衣にふざけたる紋など書き散らすもありて。之に細の襷を懸けいくら押されても揉まれても何のそのといふ出立にて。夜明け門開くれば。どや〳〵と城中に亂入し。玄關前にて傘一本づゝ渡さるゝを例とす。是は昔し町入能の日。俄に雨降り出でたる事ありて下賜せられしが。起原なりと言ひ傳へたり。

かくて舞臺を斜に見て。脇正面の廣庭白砂の上に。おしあひへしあひ重なり〳〵詰め込む樣は。恰も重箱の中に豆など入れたるが如し。此日に限りて。如何なる悪口雜言をなし。無禮の振舞をしても咎められぬ事なれば。天下晴れてのいたづらは今日こそすべけれとて。將軍の簾が上れば口々に。「日本一」「親玉」「隊長」「えらいぞ」など叫び。役人とし見れば「判官樣」「頭たのむぜ」と怒鳴り。幕揭り能はじまれば「成田屋」「天神樣」などゝ冷かし。又或時は持參せし味柑の皮や鮨飯の笹葉の投合を始むるなど。亂暴書生の親睦會にも見るべからざる振舞をなせども。叱られぬのみか將軍は之を見て打ち興ぜらるゝが。當日の特色なりき。

かくて能二番狂言二番すめば中入になりて。將軍も御簾をおろして奥に入り。午前の組は辨當菓子酒を賜はりて出で。午後の組かはりて入り來るなり。辨當は握飯梅干漬物にて。菓子は饅頭羊羹今坂餅の類。酒は二合づゝ錫の瓶子に入れたるを。下さるゝ事なるが。或は辨當にあたるもあり。餅酒を得るもありて。その時の混雜は又更に一層甚しきものなりしと云ふ。

ワキ　男
處ハ　山城

業平の靈あらはれて我いにしへを語り詠歌を說く事を作れり。小鹽の花盛を寫さん爲に業平を出だし。業平を出ださん爲に花盛を寫して相反射せしむ。

小督

シテ　源仲國
ツレ　小督局
トモ　侍女
ワキ　勅使、
處ハ　山城

小督局は少納言信西が孫。櫻町中納言成範卿の女にて禁中第一の美人なりしが。清盛の爲めに忌まれて遂に嵯峨の奥に隱れたりしを。仲國勅を奉じて明月の夜そこに尋ね至る事を作れり。表には小督を借りて主上御心中のあはれなるを說き。裏には清盛の横柄。君の御寵姫をさへ逐ひ失はしむるに至れる感慨を含めて見なば。味さらに深かるべし。

大原御幸

シテ　建禮門院
ワレ　阿波内侍
同　大納言局
同　後白河法皇
ワキ　萬里小路中納言
ツレ　大臣
トモ　供奉官人
處ハ　山城

西海にて平家の一門ほろびしかば建禮門院も御入水ありしに。御心ならずも源氏の武士に救はれて再び都に上らせ給ひ。終に御年廿九にて元暦二年御出家あり。それより大原に籠り居給ひしが。其翌年後白河法皇の御幸ありて昔の御物語に及ぶ事を作れり。

百萬

シテ　百萬
子方　百萬の子
ワキ　附
狂言　參詣人

午後の組の騒ぎも前に異なるところなく。其跡りは夜に入る事とて。町々より數百の提灯を照らして門外まで迎に來ることなれば。再びこゝに火事場めきたる混雜を現出して。目ざましきこと譬ふるに物なかりしとぞ。

徳川氏は觀世を以て家の流儀と立て。觀世太夫を以て能役者の首座と定められしかば。太夫はいふに及ばず。その一流の權勢なか〳〵盛なりき。されば江戸にて勸進能の興行は。觀世太夫のみ一代一回づゝ爲し得るの權力を有し。幸橋外いまの櫻田學校のあたりにて。晴天十日を限り願ひ出でゝ催したり。

その願濟となるや。町奉行は八百八町に觸を出だし。間口一間につき銀一匁づゝ取立て。又大名は一萬石につき銀一枚の割にて之を出だし。以て其舞臺樂屋棧敷等一切の小屋掛をなすの費用に充てしむ。是を見ても其待遇の特別なりしを知るべし。

よりて其答禮として大名には棧敷を設け。町人には切符を配りて之を請待せり。大名は他の芝居見物に行く能はざれども。勸進能は公然と之を參觀し。その奥方姫君の如きも。御簾なしに見物せらるゝは勸進能のみなりしといふ。番組は日々太鼓を打ちて之を町々に賣りあるく事。今日の相撲の如し。之を勸進太鼓といへり。

處は　山城

奈良の都の百萬と云ふ女。失ひたる子の行方を尋ねんとて狂ひ出でたるが。つひに嵯峨の大念佛の場にてめぐり逢ふ事を作れるなり。嵯峨大念佛緣起と云ふ書に。奈良招提寺の圓覺上人は和州服部の人なるが。幼くて母に別れ迷ひ子となりしかば。所々にて融通念佛を施行して母に逢はん事を祈る。念佛に參集する人十萬に滿つる毎に上人供養せり。故に時の人は之を十萬上人と呼ぶ。或時嵯峨の清涼寺にて之を行ひしに。一人の僧ありて母の行方を敎へしかば終にめぐり逢ひ給ひしと云ふ事あり。之によりて虛實をまゝへ作れりと見ゆ。十萬上人の母なれば百萬と作者が名づけしならんと。古註にも云へり。

船辨慶

前シテ　靜
後シテ　平知盛
子方　判官義經

かくの如く江戸の勸進能は觀世太夫の專有權に歸しゐたりしに。十二代將軍家慶は深く能を好み。賓生彌五郎（今の九郎の實父）を師として學ばれしかば。賓生流一時に勃興して。權勢まさに觀世を凌がんとするばかりなりしが。是の時に乘じ賓生太夫は願ひ出でゝ。遂に名譽ある勸進能を興行せり。時に弘化四年。外神田加賀町（今の講武所の邊）の地に於てせしが。其時の景況は故南新二翁の大和新聞に掲げたる記事いと詳なれば。いさゝかこゝに抄出せん。

曰く。舞臺樂屋見物所等の構造は餘程念の入りしものにて。御本丸の舞臺を擬造せしといふは左もあるべし。橋がゝりの長さ。總檜木造りなる等すべてよく似て居たり。正面脇正面及び地謠座のうしろ等。遠く隔てゝ折り廻して。上下の棧敷は劇場の如く。中央に一際高く御簾を垂れしは。將軍の見物し給ふべき設けなり。棧敷は一間毎に疊三疊を敷きたり。それより前は一面の平場にて。こゝへも一面に疊を敷き込み。雨障子を掛けたれど。雨天には興行なし。樂屋は狂言笛大小鼓太鼓太夫弟子中まで。家々に區別して廊下づたひにて往來をしたり。酒茶菓子辨當菓物の中賣あり。入口所々に矢車の幕を掲げ。辻番の如き所ありて。突棒さすまた袖捻等をいかめしく建てならべて。非常を戒めたり。表には楽内所の茶屋もあり。大

ワキ　弁慶
ツレ　義經從者
狂言　船頭
處ハ　摂津

義經運盡きて頼朝に惡まれ。身のおきどころなくして一先西國に趣かんと大物の浦より舟に乘る事を前段とす。靜の離別をのぶるを主とせり。出船の後平知盛の幽靈に逢ひて所り伏するを後段とす。雄壯の樣を寫すを主とせり。此能に義經を子方とせし事は。能しらぬ人の非難する所なれども。是には深き理由のある事なり。靜の別をのぶるに夫婦と云ふ直接の感情を與へんよりも單に別離と云ふだけの感情を與へて。優美にせんとの手段に出でたるものなれば。能の特點はこゝにぞ在る。況んや副役の義經を輕くして。正役の靜を重くするにも。此手段なかるべからず。味ふべし〳〵。

前シテ　岩船　童子

ツレ　男　龍神
後シテ　男　勅使
ワキ　摂津
處ハ

名所と古事とを借りて君が代を祝ふ心を作れり。されば祝言能として初春の能には終番に之を演するを故實とす。

老松

前シテ　翁
ツレ　男　老松の神靈
後　梅津の何某
ワキ　筑前
處ハ

老松の神靈あらはれて松梅のめでたき謂はれを示す事を作れり。これも德川氏の謡初式に用ひられてより重き位置を占む。

八島

前シテ　漁夫
ツレ　同
後シテ　源義經

袈裟なる見せものゝ如くなれど。木戸を這入れば頗る權威ありて。町人などは酒に醉ひでもしたなら。縛りもしさうなる躰なりと。

その前年九月。江戸の繁華なる辻々に掲示して。來申年二月於筋違橋御門外明地賓生太夫勧進能有之候間望のものは可致見物者也。といへり。たゞ是のみを以ても其權勢おもふべく。更に左に示す見物入高を讀まば。その盛會の想像以外なるに驚くべきものあらん。曰く。

初　日(二月六　日)疊場　千五十一人　入込　三千二十三人
二日目(同　十六日)同千二百二十六人　同　三千五百七十人
三日目(三月十二日)同　千百九十四人　同二千九百七十七人
四日目(同　十九日)同　千二十六人　同二千六百四十八人
五日目(四月二　日)同　千百十人　同　二千九百二十人
六日目(同　四　日)同　千五十二人　同二千五百四十五人
七日目(同　十六日)同　八百五十七人　同　二千六十人
八日目(同　十九日)同　八百二十五人　同　千八百六十六人
九日目(同二十二日)同千三百五十三人　同三千九百五十二人
十日目(同二十五日)同　八百八十人　同　二千八百八十人
十一日目(同二十七日)同千百三十五人　同二千五百九十五人
十二日目(五月四日)同　七百五十人　同　千七百二十六人
十三日目(同　六日)同　千百十三人　同二千六百六十六人
十四日目(同　九日)同　千二百三十人　同　四千四十八人
十五日目(同十三日)同　千百三人　同二千四百三十四人
(右は町割出銀配當の札幷に相對賣共疊場入込場の人數にて松竹の棧敷は此外なり)

是ぞ德川時代勧進能の殿にして。かゝる盛擧は又と見るあたはざる時勢と變遷し來れり。社會萬般の破壞的運動をなしたる明治維新は。この壯大優美の能樂をさへ奪ひ去つて。危いかな一歩を誤らば。能役者は糊口の道を失ひ。能面能裝束は外國人の手にのみ渡らんとせしを。幸に有志者の存するあり。特に英照皇太后陛下のいたく好ませ給ひしによりて。今なほ之を維持し。再び盛時にあはん事を萬一に希望するに至りしは。此道のために賀せざるべけんや。

其四　流儀と家元

觀世。賓生。金春。金剛。喜多。これを能の五流といふ。その流儀を創めたる五家。すなはち上に述べたる今の觀世清廉。賓生九郎。金春八郎。金剛鈴之助。喜多六平太の家柄を。能の家元として今も

ワキ　僧
處ハ　讃岐
有名なる八島の合戦を義經の物語にして作れり。勝修羅三番の一つにて祝言能に用ふる事田村のところに云へるが如し。

江口

前シテ　女
後シテ　江口の君
ツレ　遊女
ワキ　僧
處ハ　摂津

江口の君の幽霊あらはれて西行法師と歌よみかはしたる昔語をする事を作れり。これは西行の書きたる撰集抄にある事なるが。同書にまた。性空上人と云へる人。普賢菩薩を拝みたしと祈念し居けるに。天童來りて室の遊女を拝めと告ぐ。即ち遊女が家に行きて目をふさぎ心を靜めて見れば。生身の普賢白象に座して居給へり。と云ふ物語をも交へて作れるなり。此謡の文章は一休和尚の作なりと云ひ傳ふ。一休は京都紫野大徳寺の住僧にて。文明十三年に寂せし人。

望月

シテ　小澤刑部友房
ツレ　安田庄司の妻
子方　花若
ワキ　望月秋長
狂言　同　従者
處ハ　近江

小澤刑部友房と云ふ人。故主の妻子を助けて敵を討たしむる事を作れり。圖らずも一夜一家の内に敵と同宿し。一人は盲御前と爲り一人は獅子舞を學びて敵に近づく趣向。後世の徳川時代に專ら行はれし芝居小説の祖とも云ひつべし。

紅葉狩

前シテ　女
ツレ　侍女
後シテ　鬼女
ワキ　平維茂
トモ　従者

其道に從事する人々の尊崇するさま。古代基督教徒の羅馬法王に於けるが如き感あり。

されば其流儀の下に此技を習ふ人々は。謡にもせよ能にもせよ。傳授事を受けんとすれば。先づ之を家元に請ひ。其免狀を受取るに非ざれば。演ずるあたはざる事となり居るなり。故に地方に住みて一方の大家をなしをる太夫が。家元の許可を得ずして石橋を演ぜしとか。道成寺を門人に授けたりとかいふ事によりて。家元と弟子家との間に爭論の起りたる結果。勢力ある弟子家は破門せられ家元は孤立するといふやうの騒ぎも。往々おこりたる事あるが如し。家元の全權を握るもよけれど。今や時勢が徳川氏の時勢と違へば。いさゝか顧みるところなかるべからず。

既に流儀を異にして家を五つにす。從つて其家々に特殊なる性質を有すべきは勿論なり。今こゝろみに之を味ひくらべれば。觀世は實生より優れたる點もあり。實生は觀世より勝りたる處もあり。又は互に一の妙味ありて。何れとも優劣を定めがたきも多し。

たとへば道成寺の能に。脇僧の未だ出でざる前に鐘を釣りおき。僧いでゝ「鐘は鐘樓に上げてあるか」と能力に問ふもあり。又僧出でゝ「鐘を鐘樓に上げ候へ」といひて後。能力樂屋より持ち來るもあり。

甲は鐘あぐる事を影としてあらはし。乙は之を實際目の前に見せたるなれば。何れにも一理あるべし。

景清の能に。或る流にてはシテの景清大口の袴を着け。或る流にては着流しにて袴なし。一は平家の武臣たりし昔を忘れぬ面影を見せ。一は乞食と零落せし今の有樣を見せたれば。彼も一の趣意あり此も一の趣意あり。

かくの如き類は舉ぐるに暇あらず。彼は他流なりとして善き點をも退け。此は我流なりとて惡しき點をも立て通さんとするの傾は。古來此道の社會の弊あり。進歩を妨ぐる事少々ならんやは。然れども能の本旨をも心得ざる素人が。みたりに芝居を羨みオペラを擬せんとして。謂はゆる素人細工に此道を弄ばんことは。危險の最も甚しきものぞかし。昔し或る田舍にて能のありける時。鉢木のシテは大いに喝采を博せんと欲し。白紙を小さく切りて扇の中に挾み置き。「雪うち拂ひて見れはおもしろや如何にせん」といふ處にて。扇を開けば雪のばら〳〵と散るやうに見せんとの趣向を避らし。又後シテの佐野源左衛門が持ちて出づる長刀の先に紅殼を塗りて。「古腹巻に錆長刀」といふ文句に合はせんと巧みたる事ありしが。能見る人は左樣の子供だましめきたる手際に感ずるものならざれば。皆々苦々し

處ハ　信濃

平維茂の信州戸隱山にて妖鬼を退治する事を世傳によりて作れり。紅葉を以て彩色とし酒を以て媒介とす。

葛城

前シテ　女

後シテ　葛城の神躰

ワキ　山伏

處ハ　大和

むかし役小角と云ひし行者。吉野の金峰山と葛城山との間に通路を作らんとて。神々を使役して岩橋を渡さしむ。葛城の神は形の醜きを耻ぢて夜ならでは出でざりしかば。小角怒つて之を呪詛し縛して深谷に繫ざたり。と云ふ傳說に本づきて作れり。葛城は山伏の常に登山する處なれば。其雪中に道ふみまよひ女に宿かるを以て物語を起す緣とす。

知章

前シテ　男

後シテ　平知章

ワキ　僧

處ハ　播磨

一の谷の軍敗れて討死せし武藏守知章の事を作れり。其命日に旅僧の來あひて新卒都婆を見るより問答を起さしむ。

玉葛

前シテ　女

後シテ　玉葛の內侍

ワキ　僧

處ハ　大和

これも源氏ものゝ一つなり。まづ玉葛の內侍の小傳を述べ置くべし。內侍は頭中將の夕顏の上の通ひて生ませし娘なるが。三歲にて母にわかれ。四歲の時乳母の夫太宰少貳に連れられて任國の筑紫に下りぬ。十歲の頃任果てゝ歸京すべかりしに。少貳おもく煩ひしかば。三人の子に。此君を都に上せて御父に知らせ申すべしと。遺言して沒せしのち。急にその事も出來難く月日へにけり。筑紫の國人ども其顏よきを聞きて言ひ寄る輩も多かき能を見たりとて。その後は此シテの評判をするものも無きに至りぬとぞ。今日の社會にかゝる誤解の人なしともいふべからず。觀世と賓生とは既にもいへる如く。兄弟同士の如くにして之を上懸と稱へ。金春と金剛と喜多とは又なほ同屬にして之を下懸と稱ふ。上懸とはもと二家の京都に住みたるにより起れる名にて。其他は奈良に住みたるより下懸といへりと云ふ。

其五　明和の改正

十五代の觀世太夫に元章といひし人あり。學識ありて此道に執心深かりしかば。從來の謠曲を改正して明和年間に上木せり。世に之を明和の改正とも改正本ともいふ。

一例を示さば。從來の草子洗小町には大伴黑主を惡人の如く作れるを嫌ひて。かの萬葉集に入筆せしは全く一時の戲れなれば。實は小町が歌なる事を裏書して。洗ひたる後に顯はさんとの意に作り直したる類もあり。

そも〳〵此明和の頃は。恰も國學の興りたる時にて。萬葉調の古文流行し。古實考證の學問爭ひ開けたる折なれば。其風潮が能の世界までも刺激しり來しならん。加茂眞淵の萬葉考を始め。唯いにしへに泥みて。今本は誤謬なり後世の詞は古意に合はずと。私に改正する事の行はれし影響を蒙れるならん。萬葉古事記は上古のものなれば。その解釋法を上古に復して改め讀まんこそよかるべけれど。能は近古のものなれば。いはゆる俗意俗調なるが却つて眞の雅意雅調にかなへる價のある處ぞかし。その上すでに出來居るものをこゝかしこ削り改むるは。到底原文に勝らずして止むが習なり。されば元章一代にて又もとにかへり。改正本の行はるゝ時は終に無かりしなり。されども字句の誤れるを正し。謠ひ訛れるを直しなどしたる功は多く。今も改正本は云々なりとて。其流儀にて參考とする事少なからず。

今こゝに元章の新作なる「梅」の謠を抄出して。其改正本作者の理想は如何なりしか。いかなる程度まで古意古言を用ひんと勉めたりしかを知らしめんとす。

地クリ「そも〳〵神代のならはし。草を賤しみ木を貴む。其木のうちにかばかりの。形色香の花なければ。梅花をよみして木の花といへり。

シテ「さて梅の名はさる花の。咲きづるのみかうるはしき。

地「藥の實さへ結びつゝ。木の肌妙に木立まで。異木にすぐれ

りし中に。太夫の監として肥後の國に權威あるもの來り。三人の子をかたらひつゝ姫君を迎へ取るべき事を頼みしかば。次郎三郎は之を諾せしに。太郎ひとり母と共に父の遺言を守りて夜にげにして都へ伴ひ上りぬ。かくて姫君の行末をも所らんとて初瀬の觀音に參詣せし折しも。夕顔の上の侍女なりし右近と云ふ女。今は源氏の君に召し仕はれてあるがめくりあひて共に歸京し。右近は源氏の君に姫君の事を申しければ。君は遂に迎へ取りて我六條院に住ませたり。後立身して內侍のかみとなり。髭黑大將の室となる。

なほ夕顔の處をも見合すべし。此謡には其幽靈あらはれて旅僧に昔を語り。佛の功德によりて妄執を晴らす事を作れり。

鞍馬天狗

前シテ　客僧
後シテ　大天狗
子方　牛若丸
ツレ　東谷の僧

くはしければ。

シテ「うまてふ言を通はせて。

地「梅のその名をゆりたるなり。

クセ「そのうへ神事の。御先に立たす宮人に。取らするも本は此。ずはえに限る事なりき。また御佛の大御法に。幸ひ願ぎ得ること。是もずはえを取りてなり。天皇の。大儀の御場にも。主殿の舍人等が。梅のずはえを捧げつゝ。紫の絹笠の。頭に仕んまつれるは。御先を拂ふよしにして。やがて神代の傳へなり。

シテ「初春の。七日の豐の明には。

地「舞の臺の飾らひに。梅と柳を立てらるゝ。さて木綿花は古へに。もてはやせしも此花を。とこしへに見まほしく。思ひて作りそめにけん。又年のはの大宵に。したがふ小忌の人たちも。昔の髻華の心ばせ。木の花の木を冠の。巾子に添へ立て久方の。天の日蔭の鬘垂。黑酒白酒の御酒たうべ。千代萬代も限らじと。うたひ舞ふ其袖を。うつしていざや奏でん。

地「月もおしてる難波の浦。

シテ「鶯の聲ものどけき春風に。

地「梅のにほひや空に滿つらん。〳〵。

狂言　能力

處ハ　山城

鞍馬寺にて花見のありける日。牛若も其席に列せしが。客僧の猥藉するとて人々歸りし跡に獨のこりて。大天狗より兵法の傳授を受くる事を作れり。花の後に凄き氣色を見せ。失望の內に大希望を含ましむ。

海士

前シテ　海人女
後シテ　龍女
ツレ　房前大臣
ワキ　同　從者

處ハ　讃岐

藤原房前の母は讃州の海人なれど。その來歷の委しく知られざるを悲しみ。房前生長の後母の故郷を訪ひて幽靈に逢ふ事を作れり。この事は俗說なれど。志渡寺緣起。大織冠物語などの書より取れりと云ふ。

大蛇

シテ「ゆたけしや。なにはの事か大君の。

地「めぐみに漏れぬば草木まで。時をり〳〵を遊へずして。花さき實を結び。

シテ「人民も唯やすらかに。明くれば暮るゝ。暮るれば明方の。東の山の端にほひそめて。霞みながらに明けゆくまに〳〵。緑の空にたなびく白雲は。天つ乙女の天つ栲領巾。撫づとも〳〵盡せぬ巖も。我君が代のたとしへに足らじな。たゝ幾久に天地の。たゝ幾久に天地のむたに。榮えまさなんめでたさよ。

二百番の謡こと〴〵く此くの如き文句となりたらんには。今のやうに世の嗜好を來すことも多からざりしならんを。あぶなき時代もありつるものかな。然れども今の世にもかゝる改正を企てんとする人。なほ稀には有るを見るこそ合點ゆかぬ事なれ。

其六　內外二百番

能は概して二百番と稱す。是れ無數の作の中より粹の粹たるものを撰び拔きたるものにて。古來多人の手を經て。殊に愛翫せらるゝ作のみ世に行はれ來れるなり。然れども甲流に無くして乙流にのみ用ひらるゝものも少なからず。今これを四季雜に分類し。更に五流對

前シテ　翁
ツレ　姫
子方　稲田姫
ワキ　素戔嗚尊
ツレ　同　従者
處ハ　出雲
素戔嗚尊出雲の國に天降りて大蛇を退治し給ふ事を作れり。神事能のなごりは此曲などにて見るべし。

夜討曽我

シテ（前後）　曽我五郎時致
ツレ　曽我十郎祐成
トモ　團三郎
同　鬼王
後ツレ　敵兵
同　御所の五郎丸
處ハ　駿河
曽我兄弟親のかたき工藤祐經を討たんとて。母に形見の品々を贈り。祐經の陣に夜討に駆ひ入る事を作れり。

三山

照して示せば左の如し。（月の名は大陰暦を用ふ）

觀世	寳生	金春	金剛	喜多
春 正月				
老松	老松	老松	老松	老松
難波	難波	難波	難波	難波
鶴亀	鶴亀	鶴亀	月宮殿	
二人静	二人静	二人静	二人静	二人静
東北	東北	東北	東北	東北
金札	金札	金札	金札	金札
朝長	朝長	朝長	朝長	朝長
巴	巴	巴	巴	巴
二月				
野守	野守	野守	現在巴 野守	野守
高砂	高砂	高砂	高砂	高砂
弓八幡	弓八幡	弓八幡	弓八幡	弓八幡
室君	室君	室君 佐保山		
當麻	當麻	當麻	當麻	當麻
梅	弱法師	弱法師	弱法師	弱法師
雲林院	雲林院		雲林院	雲林院
花月	花月	花月	花月	花月
胡蝶	胡蝶	胡蝶	胡蝶	胡蝶
海人	海人	海人	海人	海人
羅生門	羅生門	羅生門	羅生門	羅生門
俊成忠度	俊成忠度		俊成忠度	俊成忠度
箙	箙	箙	箙	箙
安宅	安宅	安宅	安宅	安宅
三月				
竹生島	竹生島	竹生島	竹生島	竹生島
白髭	白髭	白髭	白髭	白髭
右近	右近			

前シテ　里女
後シテ　桂子
ツレ　櫻子
ワキ　真忍上人
處ハ　大和
大和の中央に鼎足なして並び立てる山を畝傍香具山耳梨と云ふ。此三山が神代に相闘ひしと云ふ古傳を播磨風土記に載せたるに依りて。萬葉集にも其心をよめる歌あり。これらを本として里の女が戀のあらそひの事に作りなせるなり。足利の末の頃にうはなり打とて。男の後妻を迎へし時。その捨てられたる先妻が路次に待ち伏せして後妻を打ち懲す風俗ありしと云へば。これを古事に託して作れるならん。

熊坂

前シテ　僧
後シテ　熊坂長範
ワキ　旅僧
處ハ　美濃

熊坂長範三條吉次を襲ひて。牛若に討ちはたさるゝ物語を作れり。これは幽靈なれば牛若も吉次もかげなり。烏帽子折は現在なれば牛若も吉次も日なたなり。比較して其味を試むべし。

黑塚（一名安達原）

前シテ　女
後シテ　鬼女
ワキ　東光坊祐慶
ツレ　同行山伏
處ハ　陸奥

陸奥の安達原に道ふみ迷ひたる。山伏鬼女の住處に宿をもとめて。終にあるじの鬼女を祈り伏する事を作れり。拾遺集に「陸奥の國名取の郡黑塚と云ふところに重之が妹あまたありと聞きて云ひつかはしける」と前書して。平の兼盛。「みちのくの安達が原の黑塚に鬼こもれりと云ふは誠か」と云ふ歌あり。これもと鬼の住むなど云ひ傳へたるによりて女を鬼とよみなしたるが。之をもとゝして又さらに誠の鬼の事に作りひろめたるが謠曲の興なり。後の芝居には再び趣向を替へて惡婆の事にしたるもをかし。かゝる事を比較して味はゝ讀者嗜好の變遷を知るに足らん。

國陽宮

シテ　秦始皇
ツレ　花陽夫人
ワキ　荆軻
ツレ　秦舞陽
同　大臣
狂言　官人
處ハ　唐土

燕の國の太子に丹と云ふ人。秦に人質となりて居たりしが。始皇の無禮なるを怒りて國に逃げ歸り。何とかして此恨に報いんと思ひめぐらす頃。秦の將軍に樊於期といふものの罪を得て燕に逃げ來りしかば。遂に之に飯して自殺せしめ。其首と燕の地圖とを荆軻秦舞陽の兩人に持たせて。始皇を刺させんと謀りしに。花陽夫

嵐山	嵐山	嵐山	嵐山
志賀	志賀	志賀	志賀
羽衣	羽衣	羽衣	羽衣
熊野	熊野	芳野	羽衣
藤	藤	熊野	熊野
鶏鵡小町	鶏鵡小町		湯谷
吉野靜	吉野靜	鶏鵡小町	鶏鵡小町
櫻川	櫻川	吉野靜	吉野靜
	祇王	櫻川	櫻川
		祇王	
		黑染櫻	
攝待	攝待	泰山府君	攝待
西行櫻	西行櫻	攝待	西行櫻
藤戸	藤戸	西行櫻	籠祇王
蘆刈	蘆刈	藤戸	藤渡
藤榮	藤榮	蘆刈	蘆刈
		藤榮	藤榮

鞍馬天狗	鞍馬天狗	鞍馬天狗	鞍馬天狗	鞍馬天狗
皇帝	皇帝	皇帝	皇帝	皇帝
高野物狂	高野物狂			高野物狂
	關原與市			關原與市
船橋	船橋	船橋	船橋	船橋
春日龍神	春日龍神	春日龍神	春日龍神	春日龍神
淡路	淡路	淡路	淡路	
氷室	氷室	氷室	氷室	氷室
寢覺	寢覺			
吉野天人				
西王母	西王母	西王母	西王母	西王母
田村	田村	田村	田村	田村
八島	八島	八島	八島	八島
知章	知章	知章	知章	知章
忠度	忠度	忠度	忠度	忠度
盛久	盛久	盛久	盛久	盛久
采女	采女	采女	采女	采女
小鹽	小鹽	小鹽	小鹽	小鹽

人の琴の音に妨げられて得はたさゞりし事を作れり。琴の一段は燕太子といへる小説に出でたるが本にて。源平盛衰記にも委しく之をあげたり。

忠度

前シテ　樵夫
後シテ　薩摩守忠度
ワキ　僧
處ハ　攝津

薩摩の守忠度は歌道に執心ふかき人なりしかば。出陣の道より引き返して家集を俊成卿に託し。箙に一首の短冊を遺はして敵に名を知られしは世に聞えたる物語なり。此事を作れり。薪に依りて花を出だし。花によりて行き暮れての歌を出だし。つひに本題に入りたる處。筆に人工の痕なくして天然の妙を見る。

隅田川

シテ　梅若丸母
子方　梅若丸幽靈
ワキ　渡守

千手	千手	千手	千手	千手
百萬	百萬	百萬	百萬	百萬
	三山			
隅田川	隅田川	隅田川	隅田川	隅田川
源氏供養	源氏供養	源氏供養	源氏供養	源氏供養
誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺
道成寺	道成寺	道成寺	道成寺	道成寺
東岸居士	東岸居士		東岸居士	東岸居士
國栖	國栖	國栖	國栖	國栖
第六天				
須磨源氏	須磨源氏		須磨源氏	須磨源氏
			松山天狗	
昭君	昭君	昭君	昭君	昭君
夏　四月				
養老	養老	養老	養老	養老
蟻通	蟻通	蟻通	蟻通	蟻通
代主				
大原御幸	大原御幸		大原御幸	大原御幸

ツレ(男)　旅人
處ハ　武藏

狂女あり失ひつる子の行方を尋ねて京都より東國まで下りしか。隅田川の渡守より末期の様を聞きて。空して墓前に念佛を手向くる事を作れり。昔よりこれを斑女の續物語なりと云ひ傳へたるは。或はさもあらん。果して然らば梅若丸の母すなはち斑女の花子なるべし。

鉢木

シテ(前後)　佐野源左衛門常世
ツレ　同妻
前ワキ　旅僧
後ワキ　最明寺入道
ツレ　近臣
狂言　同從者
處ハ、　前ハ上野　後ハ鎌倉

北條五代の執權時賴剃髮して後。諸國の守護地頭等の非道を行ふを憂ひ。其吏民の情態を視察せんとて。ひそかに鎌倉を忍び出で。三箇年の間六十餘州を行脚せ

杜若	杜若	杜若	杜若	杜若
草子洗	草子洗		草子洗	
雲雀山	雲雀山		雲雀山	雲雀山
兼平	兼平	兼平	兼平	兼平
鵺	鵺	鵺	鵺	鵺
錦戸	錦戸		錦戸	
	加茂物狂			加茂物狂
善知鳥	善知鳥	烏頭	烏頭	烏頭
歌占	歌占		歌占	歌占
石橋	石橋	石橋	石橋	石橋
五月				
小袖曾我	小袖曾我		小袖曾我	小袖曾我
夜討曾我	夜討曾我		夜討曾我	夜討曾我
賴政	賴政	賴政	賴政	賴政
木曾				
				正行
楠露				
鵜飼	鵜飼	鵜飼	鵜飼	鵜飼

しと云ひ傳ふ。此旅行中上野にて廉潔の武士佐野常世にあひて其志を感じ。一族どもの無道を知り得し事を作れり。之を前段とす。鉢の木を切り客をもてなす處に人情の厚きを見るべく。痩馬を指して志を語る處に忠義の深きを見るべし。當時の武士をして覺えず勇み起たしめしは是等の曲にぞあるべき。かくて常世の廉潔は遂に最明寺の明斷にあひて。其押領せられし土地に新領をも併はせて賜はるに至る。之を後段とす。風教に關せし事少なからざる作と云ふべし。

シテ　藤榮
ツレ　鳴尾某
立衆　同從者
子方　月若
ワキ　最明寺入道
ツレ（男）　月若家臣
トモ　藤榮從者
狂言　鳴尾下人

藤榮

六月	草薙	飛鳥川	御裘濕	
加茂	加茂	加茂	加茂	
源太夫	源太夫	富士山	源太夫	
九世戸	九世戸	驚	驚	
驚	驚	壇風	壇風	
水無月祓	壇風	壇風	壇風	
秋	關寺小町	關寺小町	關寺小町	
七月	東方朔	東方朔	東方朔	
關寺小町	斑女	斑女	斑女	
東方朔	空蟬	通盛	通盛	
斑女	通盛			
通盛				

處ハ

これも鉢木に同じく時頼行脚中の事なるが。蘆屋の藤榮と云ふもの。月若の幼きを侮りて兄の家を押領せし事あらはれて。再び月若の世に出づる物語なり。佐野にては廉潔の士を得。蘆屋にては非道の士を懲らす。相照して時頼行脚の精神を見るべし。

掘津

吳服

前シテ　里女
ツレ　同
後シテ　吳織
ワキ　臣下
處ハ　掘津

應神天皇の御代に使を吳國に遣はして織縫の工女を求め給ひしに。吳王はやがて兄媛弟愛吳織　穴織の四人を奉りぬ。吳織は即ちクレハトリ穴織はアヤハトリなり。此二女あらはれて昔を語り今を祝する事を作れり。

花月

八月	禪師曾我	禪師曾我	禪師曾我	禪師曾我
放生川	生田敦盛	生田敦盛	生田	生田敦盛
俠捨	土蜘蛛	土蜘蛛	土蜘蛛	土蜘蛛
小督	大江山	大江山	大江山	大江山
三井寺	天皷	天皷	天皷	天皷
女郎花	放生川	放生川	放生川	放生川
融	俠捨	俠捨	俠捨	俠捨
雨月	小督	小督	小督	小督
木賊	三井寺	三井寺	三井寺	三井寺
鳥追舟	女郎花	女郎花	女郎花	女郎花
芭蕉	融	融	融	融
絃上	雨月	雨月	雨月	雨月
綾皷	木賊	木賊	木賊	木賊
	鳥追舟	鳥追舟	鳥追舟	鳥追舟
	芭蕉	芭蕉	芭蕉	芭蕉
	絃上	絃上	絃上	絃上
	綾皷	皷		

シテ　花月
ワキ　旅僧
狂言　清水門前の者
處ハ　京都

花月と云ふもの七歳の時天狗に奪ひ去られて行方知られざりしを。其父僧となりて尋ねめぐりける内。つひに清水寺にて再會せし事を作れり。

シテ　照日前
ツレ　侍女
子方（謠なし）　天皇
ワキ　供奉官人
ツレ（男）　御使
處ハ　前ハ越前　後ハ大和

繼躰天皇の位に即かせ給はざりし前。越前におはして御寵愛ありし女ありけり。君の御別れを悲しむあまりに狂氣して。御形見の品を携へ都に暮ひ上りしが。其情とはりてもとの如く召し仕はるゝに至れる物語を作れり。是に天皇を子方にし

七騎落　七騎落　七騎落　七騎落
春榮　春榮　春榮　春榮
碇潜　碇潜
楊貴妃　楊貴妃　楊貴妃　楊貴妃
敦盛　敦盛　敦盛　敦盛
蟬丸　蟬丸　蟬丸
安達原　黒塚　黒塚　黒塚
雷電　來殿　雷電　雷電
千引

九月

遊鉾　松尾　伏見　吳服　吳服　吳服　吳服
岩船　岩船　岩船　岩船
經政　經政　經政　經政
清經　清經　清經　清經
遊行柳　遊行柳　遊行柳　遊行柳

たるは。舟辨慶にも云へる如く。一つは男女の情ならずして寧ろ女一方の情を優美に寫さしめんが爲め。一つは天皇の神聖を汚さゝらしめんが爲め。清潔無罪の童子を用ひしにぞ在るべき。是れ能の芝居と懸隔せしところぞかし。

シテ　羽法師
ワキ　俊德丸
處ハ　高安通俊
摂津

河内の國高安の里に俊德丸と云ふものあり。父に捨てられて盲目と爲り所々をさまよひあるきしが。摂津の天王寺にて父にめぐりあひ諸共に歸國する事を作れり。父の名は信吉とも延年とも云ふ說あり。俊あるひは信德とも傳へたり。

シテ　七騎落　土肥實平
ツレ　源頼朝
同　從騎五人
子方　土肥遠平

野宮　野宮　野宮　野宮
江口　江口　江口　江口
玉葛　玉葛　玉葛　玉葛
松風　松風　松風　松風
花筐　花筐　花筐　花筐
富士太鼓　富士太鼓　富士太鼓　富士太鼓
井筒　井筒　井筒　井筒
夕顔　夕顔　夕顔　夕顔
半蔀　半蔀　半蔀　半蔀
碇　碇　碇　碇
三輪　三輪　三輪　三輪
梅枝　梅枝　梅枝　梅枝
佛原　佛原　佛原　佛原
住吉詣　住吉詣　住吉詣　住吉詣
六浦　六浦　六浦　六浦
戀重荷　陀羅尼落葉　落葉　水無瀬

ワキ　和田義盛
狂言　船頭
處ハ　海上

頼朝石橋山の戰やぶれて。主從八騎眞鶴が崎より安房に渡海する船中の事を作れり。實平は主君の爲めに我子を上陸させ。義盛は之を救ひて目出度く御船に參る。是ぞ此物語の種なる。

金札

前シテ　老翁
後シテ　天太玉命
ワキ　勅使
處ハ　山城

桓武天皇御遷都の後。神社造營の勅使伏見に至りて。奇特に逢ひたる事を作れるなり。是も祝言能にて君が代を祝ふ事を主とす。

白樂天

前シテ　漁翁
ツレ　漁夫
後シテ　住吉明神

張瓦	張瓦	張瓦	張瓦
紅葉狩	紅葉狩	紅葉狩	紅葉狩
熊坂	熊坂	熊坂	熊坂
俊寛	俊寛	俊寛	鬼界島
	鶏龍田		
正尊	正尊	正尊	正尊
鐵輪	鐵輪	鐵輪	鐵輪
殺生石	殺生石	殺生石	殺生石
松虫	松蟲	松蟲	松蟲
阿漕	阿漕	阿漕	阿漕
烏帽子折	烏帽子折	烏帽子折	烏帽子折
項羽	項羽	項羽	項羽
錦木	錦木	錦木	錦木
一角仙人	一角仙人	一角仙人	一角仙人
通小町	通小町	通小町	通小町
			元服曾我
枕慈童	枕慈童	枕慈童	枕慈童
菊慈童			

ワキ　白樂天
處ハ　筑紫の海

唐の白樂天と云ふ詩人わが國に渡らんとせしに。住吉明神かりに漁翁と現じて歌道を論じ。遂に之を逐ひかへし給ふ事を作れり。是は白樂天の詩集ひとたびわが國に行はれしより。これならで詩も歌も無きやうに崇拜せし世の中なれば此迷を解きて歌道を興さんとする歌人の手などに出でし作ならん。

旅

前シテ　男
後シテ　梶原景季
ワキ　僧
處ハ　摂津

元暦元年生田の森の戰に。梶原景季箙に梅花を挿して功名を得し事を作れり。勝修羅三番の一つにて田村八島と共に祝言能に用ひらる。

楊貴妃

シテ　楊貴妃

身延				
橋辨慶	橋辨慶	橋辨慶	橋辨慶	橋辨慶
道明寺	道明寺		道明寺	道明寺
鐘巡	鐘巡	鐘巡	鐘巡	鐘巡
飛雲	飛雲		飛雲	飛雲
大佛供養	大佛供養		大佛供養	大佛供養
大瓶猩々			花軍	
猩々	猩々	猩々	猩々	葛城天狗
冬 十月				
大社	大社	大社	大社	大社
咸陽宮	咸陽宮		咸陽宮	咸陽宮
柏崎	柏崎	柏崎	柏崎	柏崎
谷行	谷行	谷行	谷行	谷行
定家	定家	定家	定家	定家
十一月				
龍田	龍田	龍田	龍田	龍田

ワキ　方士
處ハ　仙界

唐の玄宗皇帝に龍姫あり。名を楊貴妃と云ふ。死後皇帝は御嘆きのあまりに魂の行方を尋ねしめんとて。方士を仙界に遣はし給ふ事を作れり。此物語は白氏文集の長恨歌を本として作りたれば。まづ本文を讀み置きて。其字句の出でたる時一々くらべ見るべし。長恨歌の詩に曰く。

漢皇重レ色思二傾國一。御宇多年求不レ得。楊家有レ女初長成。養在二深閨一人未レ識。天生麗質難二自棄一。一朝選在二君王側一。回レ頭一笑百媚生。六宮粉黛無二顏色一。春寒賜レ浴華清池。温泉水滑洗二凝脂一。侍レ兒扶起嬌無レ力。始是新承二恩澤一時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度二春宵一。々々苦短日高起。從レ此君王不二早朝一。承レ歡侍レ宴無二閑暇一。春從二春遊一夜專レ夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在二一身一。金屋粧成嬌侍レ夜。玉樓宴罷醉和レ春。姉妹弟兄皆列レ土。可レ憐光彩生二門戶一。遂令二天下父母心一。不レ重レ生男重二生女一。驪宮高處入二青雲一。仙樂風飄處々聞。緩歌慢舞凝二絲竹一。盡日君王看不レ足。漁陽鼙鼓動レ地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。千乘萬騎西南行。翠華搖々行復止。西出二都門一百餘里。六軍不レ發無二奈何一。宛轉蛾眉馬前死。花鈿委レ地無二人收一。翠翹金雀玉搔頭。君王掩レ面救不レ得。回レ首血淚相和流。黄埃散漫風蕭索。雲棧縈紆登二劍閣一。峨嵋山下少二人行一。旌旗無レ光日色薄。蜀江水碧蜀山青。聖主朝々暮々情。行宮見レ月傷レ心色。夜雨聞レ鈴腸斷聲。天旋地轉回二龍馭一。到レ此躊躇不レ能レ去。馬嵬坡下泥土中。不レ見二玉顏一空死處。君臣相顧盡沾レ衣。東望二都門一信レ馬歸。歸來池苑皆依レ舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如レ面柳如レ眉。對レ此如何不二淚垂一。春風桃李花開夜。秋雨梧桐葉落時。西宮南苑多二秋草一。宮葉滿レ堦紅不レ掃。梨園弟子白髮新。椒房阿監青娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未レ成レ眠。遲々鐘鼓初長

葛城	葛城	葛城	葛城	葛城
實盛	實盛	鵜祭	實盛	實盛
忠信	忠信	實盛		
三笑	三笑			三笑
船辨慶	船辨慶	船辨慶	船辨慶	船辨慶
十二月				
和布刈	和布刈	和布刈	和布刈	和布刈
繪馬	繪馬	繪馬	繪馬	繪馬
卷絹	卷絹	卷絹	卷絹	卷絹
雜				
鉢木	鉢木	鉢木	鉢木	鉢木
竹雪	浦島	竹雪	竹雪	竹雪
車僧	車僧	車僧	車僧	車僧
	大蛇		大蛇	大蛇

玉井	玉井		玉井	玉井
白樂天	白樂天	白樂天	白樂天	白樂天
善界	善界	是界	是界	是我意
小鍛冶	小鍛冶	小鍛冶	小鍛冶	小鍛冶
輪藏	輪藏		輪藏	輪藏
舍利	舍利	舍利	舍利	舍利
				鱗形
邯鄲	邯鄲	邯鄲	邯鄲	邯鄲
景清	景清	景清	景清	景清
仲光	滿仲	滿仲	滿仲	滿仲
望月	望月	望月	望月	望月
檜垣	檜垣	檜垣	檜垣	檜垣
葵上	葵上	葵上	葵上	葵上
籠太皷	籠太皷	籠太皷	籠太皷	籠太皷
	護法	初雪	湛海	
浮船	浮船		浮船	浮船

夜。耿々星河欲レ曙天。鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共。悠々生死別經レ年。魂魄不レ曾來入レ夢。臨邛道士鴻都客。能以レ精神一致レ魂魄一。爲レ感レ君王展轉思一。遂教レ方士殷勤覓一。排レ風馭レ氣奔如レ電。升レ天入レ地求レ之徧。上窮碧落一下黃泉。兩處茫々皆不レ見。忽聞海上有レ仙山一。山在レ虛無縹渺間一。樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多レ仙子一。中有レ一人字レ太真一。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩レ玉扃一。轉教レ小玉報レ雙成一。聞道漢家天子使。九華帳裏夢魂驚。攬レ衣推レ枕起徘徊。珠箔銀屏迤邐開。雲鬢半偏新睡覺。花冠不レ整下レ堂來。風吹レ仙袂一飄飄乎。猶似レ霓裳羽衣舞一。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶レ雨。合レ情凝レ睇謝レ君王一。一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絶。蓬萊宮中日長。回レ頭下望レ人寰一。處。不レ見レ長安一。見レ塵霧一。唯將レ舊物一表レ深情一。鈿合金釵寄將去。釵留レ一股一。合一扇。釵擘レ黃金一。合分レ鈿。但令レ心似レ金鈿堅一。天

放下僧	放下僧	放下僧	放下僧	放下僧
山姥	山姥	山姥	山姥	山姥
大會	大會	大會	大會	大會
自然居士	自然居士	自然居士	內外詣	自然居士
			切兼曾我	切兼曾我
合市	調伏曾我		調伏曾我	調伏曾我
松山鏡	松山鏡		松山鏡	松山鏡
現在七面			現在七面	
土車				土車
藍染川	藍染川	愛染川		
龍虎				龍虎
江島		愛宕空也		愛宕空也
唐船	唐船	唐船	唐船	唐船

右の內。曲名を載せざるは其流儀にて用ひぬもの。同じ行にありて名稱の異なるは同じものにて曲名のかはれるものと知るべし。又古代は用ひたるものも現今用ひぬものはこゝに掲げず。(寶生流にては當時用ひぬものを載せたるもあれど。これは現行の謠本のまゝを擧げたるのみ。)

其七　二百番の外

現在その流儀々々にて用ふるものは前章に示したるが如くなれども二百番の外の作また數ふるに遑あらず。是も何かの參考となるべければ。曲名だけはこゝに掲げおかんとす。

箱崎	實方	菊地	吹上	正義世守
丹波物狂	落葉	一來法師	木曾願書	太刀垈
稻荷	舞車	現在鶴	塚漉	三藏法師
皷瀧	大般若	横山	岡崎	隱岐院
嚴島	內府	植田	太子	土宮太子
玉津島	粉川寺	玉取	章陀天	千引
蛙	菅丞相	一夜天神	翌入自然居士	春近
上人流	信貴山	呂后	鐘引	貴舟
朝顏	刀	愛蕎	池贄	碁
行家	清重	羊	犀川	七面

天上人間會相見。臨レ別殷懃重寄レ詞。詞中有レ誓兩心知。七月七日長生殿。夜半無レ人私語時。在レ天願作レ比翼鳥一。在レ地願作連理枝一。天長地久有レ時盡。此恨綿々無レ絶期。とある是なり。されども直譯に似て直譯に非ず。原文を用ひて原文に拘はらぬ處が。謠曲文章の得たる點ぞと云ふ事を忘るべからず

俊寬

シテ　曾都俊寬
ツレ　平判官康頼
同　丹波少將成經
ワキ　赦免使
處ハ　薩摩

俊寬僧都はわが鹿谷の別莊に人々を會して。平家を滅ぼさんと謀りたる罪に依り。康頼成經と共に鬼界島に流さる。然るに康頼成經の二人は熊野權現を信仰せし爲めに赦免に逢ひ。俊寬ひとり殘し置かれて哀しむさまを作れり。

擅風

前シテ　壬生資朝卿
後シテ　不動明王
子分　梅若
ワキ　帥阿闍梨
ツレ　本間三郎
同　船頭
狂言　從者
處ハ　佐渡

壬生大納言資朝卿は後醍醐天皇の御時の忠臣なりしが。敵慮を承けて北條高時を討たんとせし事あらはれ。あへなくも囚はれて佐渡の國に斬られ給ひぬ。其子梅若父の跡を慕ひ。遂に敵を討ち。帥阿闍梨の助に依りて逃げ歸る事を作れり。壇風と名づけし意は。演義三國志に。諸葛孔明魏の曹操を赤壁に討たんとて。七星壇を築き風を祈るとある古事を用ひしなるべし。僧の五大明王に祈る事を五壇の御修法など稱ふる壇の字にも絲あり。

難波

比良　維盛　敎經　經盛　大木
瀧文覺　齋藤五　當願暮頭　降魔　熊手判官
野口判官　鳴不動　龍頭太夫　政德西王母　家持
飛雁　安犬　巴園　野干　祝言橋立
河水　濱ならし　虎送　關戸　吉水
不斷櫻　島廻　鎌田　引鐘　稻舟
仲算　鈴鹿　反魂香　法界寺　馬融
松浦鏡　廣基　佐國　御崎　五節
守屋　爲世　飛鳥寺　權守　千手寺
千人切　今世巴　梶原座論　狹衣　惡源太
駒與佐々木　范蠡　獅子　連獅子　笛卷
眞田　橘　榊天狗　法華會　菊萱
東心坊　三尾　香椎　柳　濱川
和泉小次郎　松浦梅　見塚　薄雪　童堂
野寺　河原太郎　櫻間　武藏野　宮城野　花盜人
木幡　櫻間　笠寺　佐々木　長鄉寺　熊野詣
玉椿　笠寺　長兵衛尉　石瀨　園田
女沙汰　小林　室住　宗貞　大世太子

前シテ　老翁
ツレ　男
同（天女）　木華開耶姫
後シテ　玉仁
ワキ　臣下
處ハ　攝津

應神天皇の御時。百濟の國より王仁と云ふ博士來朝して。漢學を菟道稚郎子に傳へたり。其靈あらはれて難波の梅の古事を說き。君が代を祝ひ奉る事を作れり。春の祝言能によく用ふ。

放下僧

シテ　小次郎兄
ツレ　牧野小次郎
ワキ　利根信俊
狂言　從者
處ハ　相摸

牧野小次郎兄の禪僧と共に諸國を遍歷し。手段を廻らして父の敵利根信俊を討つ事を作れり。

松風

妹背山　嚴橘　總角　西寂
石神　素戔櫻　おんぼう曾我　小手卷　花見曾我
樒切曾我　鬚切曾我　文覺曾我　伏木曾我　齒靈曾我
和田酒盛　十番切　高安小町　裙子曾我　清水小町
富士見小町　夢見小町　玉津島小町　雲林院小町　鶴君
つるべ　津の梅鶯ども　山本小町　甲良物狂　和坂物狂
隱岐物狂（隱岐院ども）　鞠物狂　松浦物狂　吉野物狂
龍田物狂　箱崎物狂　小野物狂　敷地物狂　笛物狂
枕物狂　更科物狂　西行物狂　きの物狂　鬼物狂
禿物狂　樒物狂　學文字物狂　博多物狂　小倉御幸
現在經政　現在熊坂　現政頼政　現在忠度　現在實盛
現在菅丞相　現在海人　大原猩々　七人猩々　狛形猩々
二人猩々　寄合猩々　海中猩々　岩尾猩々　三人猩々
三河猩々　一番々猩　九本狸々　紅猩々　壺練猩々
猩　後　現在張良　横笛　玉津島龍神　龍神浦島
龜浦島龍神　小栗　吉野翠　磯田　吉野三位
白杵　笠卒都婆　祐經　侍從重衡　まもり
六代　奈良六代　初瀨六代　庵六代　人形文覺

シテ　松風
ツレ　村雨
ワキ　僧
處ハ　摂津
在原行平の須磨にて寵愛ありし姉妹の海士あり。其執心の幽靈あらはれて書を語り。僧の向回を願ひ事を作れり。謠に熊野松風に米の飯とて珍重するは。いつ見ても聞きても飽かぬ曽なるへし

安宅

シテ　武藏坊辨慶
子方　判官義經
ツレ　同行山伏
狂言　强力
ワキ　富樫某
狂言　從者
處ハ　加賀
義經陸奥に下らんとして作り山伏と爲り。安宅の關に通りかゝるを關守にとがめられ。辨慶苦計をめぐらしてやうやく虎口をのがれし事を作れり。之を讀みて

神有月　奈須與市　布引滝　八剣　后揃　川蟬網　千手院　實檢賀盛　鶴岡　大山天狗　花西行　龜井　鳶窟　高野敦盛　丹けい　七草　布引松　いろは
神無月　延年奈須　夢一字　小倉山　宮川　阿彌陀峰　長柄橋　武王　正行　有馬天狗　御崎　露　温泉寺　形見敦盛　脈論　若草　武文　鎌辨慶　鶴次郎
西宮　御法　道家心　花香襲　二見浦　春日神子　二人神子　板敷山　鐘卷道成寺　袖湊　木刀　一夜天狗　吉野天狗　櫻天狗　奥院　秦治時　蒲壁　御輿振　若菜　濡衣　寒山寺
松竹　信夫　鬼女谷行　軒端草　見塚　花櫓　法藏比丘　天龍鬼神　狗天だふし　梅乙女　和歌天神　卒都婆流　九穴　阿詮留王　盲目沙汰　石井　會盟
母衣　身賣　金剛山　月見　内海　十四經　融通鞍馬　吉野天狗　吉野西行　箒木　茶治時　雨林寺　忘草　布引松　武文　鎌辨慶　鶴次郎
篭尺八

當時君臣の情を想像し涙を流さざるものは男兒に非ずとや謂はまし。義經を子方にしたるは。倒の憐むへき感情を强くしシテに重からせんとてなり。

摂待

シテ　佐藤繼信母
子方　繼信の子鶴若
トモ　從者
ツレ（判官）　源義經
同　同行山伏
ワキ　武藏坊辨慶
處ハ　陸奥
義經の一行は佐藤の館にて摂待に逢ひ。情に引かれて君臣の名乘をし。繼信討死のさまを母子の前に物語る事を作れり。

安宅の樓きと見るべし。

雨月

前シテ　翁
ツレ　媼
後シテ　住吉明神
ワキ　西行法師

滝口　千方　村山　西國下　磯崎　初潮　木玉浮舟　熊　清水沙汰　二人浦　橋姫　御衣　朝夷　承久退治　神崎　近江高砂　篭景清　思橋姫
雪願朝　玉水　九品　松山　蘇武　八景　阿古屋松　北條　祇園汰沙　戀松原　鑪重衙　人穴　島津　鏡池　經書堂　圓通寺　筑紫落葉　鬼身賣
酒呑童子　虎石　楊家　藤田　革袴　王代記　相摸八景　明石上　末松山　相羽　式子内親王　四季　美人揃　歌中山　一本菊　水汲　孟宗　京落葉　十柄
龍口　玉島　白狐　近任　王代記　年代記　舟立合　一枚起請　聚津采女　周防内侍　書寫　相坂盲　玉蟲　時雨　先帝　男山　巣父　砥波
影山　玉川　東國下　玉島川　二千塚　弓矢立合　見渡　承久　鄙訪　風呂辨慶　瓦辨　思妻　明智討　宗盛　磯屋　六本松

處ハ　摂津

西行法師住吉明神に參詣して奇特に逢ふ事を作れり。住吉は歌道を守る神。西行は有名の歌人なれば。此取り合はせを爲して。江口の尼の物語を翻案敷演せしなるべし。西行自作の撰集抄に白く。治承二年長月の頃ある聖と伴ひて西國へ赴きしに。さしていづくとしもなきまゝに。日の傾くにも急がずして。江口柱木などいふ遊女が住家見めぐれば。家に南北の岸にさしはさみて。云々。其里を過ぎなんとするに。冬を待ちえず村時雨のはげしくて。人の門に立ちやすらひて内を見入れ侍るに。あるじの尼の時雨のもりけるをわびて。板を一ひら提げてあちこち走りありきしかば。何となくかく。賤がふせやを葺きそねづふ。と打すさみたるに。此尼さばかり物さわがしく走りありきつるが。何とか聞きけん板を投げすてゝ。月ばもれ雨はたまれと思ふには。とつけ侍りき。とあり。なほ末にあげたる事をも合せ見るべし。

經政

シテ　平經政

ワキ　僧都行慶

處ハ　京都

但馬守經政は琵琶の上手なりしかば。仁和寺の守覺法親王より青山と云ふ名器を賜はりて秘藏したりしが。嘉永二年都落のとき一先これを返上し置きて遂に討死せり。されば之を靈前に手向けたるが。魂魄佛事に引かれ來て懺悔を催す事を作れり。

求塚

前シテ　里女

ツレ(二人)　同　菟名日處女

後シテ　僧

ワキ

處ハ　摂津

津の國に住む少女。二人の男に迫られてせんかたなく生田川に身を投げし事。大和物語にあり。之を本として作れり。前

育王山　星　星下　明星　蘇
迫掛朝比奈　和國　瑠璃鳥　蝙蝠　富樫
御湯立　齋宮　櫻前　伊吹　醍醐
金毘羅　千丈嶽　正八幡　文覺瀧詣　西岸居士
葛　津守　清石山　姥竹　蹴鞠岡
にせ菊　墨染川　忠信　桂子　今和泉
星合　瀧不動　乙平　よるべの水　髻塚
昊橋　磯島　京妻　文覺　郭巨
貞任　紅葉仙人　衣川　山中常盤　八橋
範頼　野上　富士詣　和光　佐夜姫
清見原　逆罪　雪翁　遊行櫻　氏清
勸學院　ゆつるき　姫小松　衣被色　弓纒
行基　始皇　秀衡　式島　志水
秀郷　光季　吉次　有乳山　淺沼
櫻姫　有政　櫻狩　阿蘇山　佐渡島
二木尾　椿姫　公任　清瀧田村　清時田村
貞盛　伏屋　高矢　安達靜　浮島
御惱楊貴妃　戀鈴木　松浦姫　村雲　村方

箱根詣　草刈敦盛　後撰集　八重櫻　翁草
箱山颪　小山　磯山　八幡弓　大原木
蓼巴　安達藤榮　水潛　大殖　飯沼
花三衣　高良山　餓鬼　百代王　立田姫
神惜　箱三　箱根　梅花　ちかとら
短冊忠度　千代鶴　堀川夜討　片輪車　吉野忠信
吉野貫之　玉崎　六道　池水　熱田
壇浦　扇開　菖蒲　御靈嶽　武利
深山　きんたんちん　二葉　其坊　鳴戸
浦壁　馬爭　忠光　流山　高館
禁足　高光　竹取山　方便品　添伏
法性坊　平家櫻　陶淵明　高綱　秩父
垂井　戸坂　高樓　なかはる　七つ子
燈籠鬼　そさ櫻　朝源左衛門　朝忠　籠破
中山　藏橋　鶴西王母　鶴村鴨　白大王
はそう天　名取　仲麿　小鹽詣　鞭文字
樊噲　師範　早友　楠櫻　黒坂
浦山　初風　たんたん　櫻戀　二本板

段は土地の名物なる若菜をあげて興とし。後段は地獄の苦患を見せて戒めとす。殊に若菜の古歌をならべ引きて自在なる處に。作者の手際を味ふべし。

天蜻

前シテ　父
後シテ　天蜻
ワキ　勅使
處ハ　唐土

天蜻と云ふもの違勅して死罪に處せられしを。朝廷より佛事をして賜はりしに依りて成佛する事を作れり。

羅生門

ワキ（前後）　渡邊綱
ツレ　源頼光
同　平井保昌
同　碓井貞光
同　卜部季武
同　坂田公時
シテ（謡なし）　鬼神
處ハ　京都

こし姫　浅間　菊水　城太郎　ひらと眞覺
費長坊　沙那王　佛御前　二人墳　三島
西行再住　姉はの松　芝山　平山　巴松
高野卷　鶯　住吉蛙　みるべの松原　三井水
五十鈴　羽黒　熊谷　雪月花　昔千手
玉鉾　ちか山　菊光麿　清櫻　鞍馬判官
鳴島　老子　形見送　小車　唐崎
梶原　河野　稲刈　若狭姫　橋本
和泉式部　遊近山　かくや形　鏡御裝濯　千本
爲朝　頼朝　乘房　役行者　常磐
次信　大山　磯松　義經
花加奇　夫盤星　水江　龍門寺　梅尾
たち柳　鳴櫻　横山ちうさん　ほの〳〵と明石浦　うちへん　御前靜　慈覺
笠渡　花家　清光　惟政　小侍從
北山　駒饒　あしたて　北野　千里濱
衣通姫　惟治　天香久山　利根河　湯谷立合
金山寺　姫鏡　鬚切　行山伏　飛彈工
兵庫筑島　盛永　湊入　御調　柴舟

君の御前にて酒宴の興より爭論おこりて。綱は鬼神の姿を見せんと羅生門に向ふ事を作れり。武士の人情寫し得ておもしろし。

氷室

前シテ　翁
ツレ　男
後シテ　氷室の神躰
ツレ　天女
ワキ　臣下
處ハ　丹波

氷室の古事と氷の物の御調さゝぐる樣を。神に寄せ祝言に寄せて述べたり。雪氷の多少によりて年の豐凶を知ると云ふ事あれば。元日の節會にもまづ氷のためしとて。諸國氷を歳むる處の氷の多小厚薄などを奏聞する儀式あり。

正尊

シテ　土佐坊正尊
ツレ　姉和平次光景
同（立衆）　土佐郎等

侍從　淨妙　菊水　城太郎　ひらと眞覺
篠田　金菊　四位少將　鈴木　一雪の陰
三保の山　さらし源氏　篠栗　遊橋　撞鐘
恒房　眞菰　富士牧狩　地獄廻　石橋山
たれその森　生駒山　濱名　潛鷺　高荷
輪塔　とんゑんたう櫻　御池寺　內野合戰
源氏夕顔　矢矧　八島判官　くがみ　親衡
里川遊年　矢倉忠度　財くらべ　袴着　天野
高梨子　鹿島　朝成　人丸　御前鈴木
粉川鬼　藤代峠　風俗歌　待宵小侍從　佐渡御崎
七夕　佛盥師　寶塔　腿月　沖の鰐
醒井　戀中川　孟嘗君　不動國行　普賢
二山鹿　重花　桐之小林　蟻卷　葵
安土　義平　金花門　彦山　庄司
龍鞍寺　鈴掛　住吉江上　住吉少將　平等院
淨土寺閣　敎訓　敎訓狀　敎訓千手　巨溪
ねこひ重衡　柳　富士颪　楠　河內通
八坂　位淨　龍田紅葉　大織冠　安宅龍神

同　源義經
同　江田源三
同　熊井太郎
子方　靜
ワキ　武藏坊辨慶
處ハ　京都

頼朝の命にて土佐坊義經を討ちに向ひたる事を作れり。前段問答の間におのづから義經辨慶の器量を異にする所を見せたるに。此曲の佳境と知るべし。

富士太鼓

シテ　富士妻
子方　同人子
ワキ　官人
狂言　從者
處ハ　京都

富士と云ふ樂人の妻。夫の殺されしをも知らで其跡を尋ねゆき。形見の裝束を見て悲しみ狂ずる事を作れり。是は花園天皇の文保三年十一月大嘗會の日。正三位中將參議有時卿清晏堂神宴拍子に參仕する處に。陣中に於て敵人之を討つ。後日の相爭となる。今夜拍子勤めしむ。紙屋川顯香これを討つと風聞す。依て顯香卿關東に於て罪せらるゝ由。大系圖に云へるを本として翻案せしなるべし。

鐵輪

シテ　女
ワキ　安部晴明
ツレ　夫
狂言　貴船社人
處ハ　京都

嫉妬の一念凝つて捨てられし夫を取り殺さんとせしに。安部晴明に祈り伏せられて立ち去る事を作れり。是等の作は當時の風俗を諷し。無教育の婦女子を戒むる精神より出でたるものなるべし。太平記に曰く嵯峨天皇の御宇に。ある公卿の息女あまりに嫉妬深くして。貴船の社に詣でつゝ七日籠りて申すやう。歸命頂禮貴船大明神。願はくは七日籠りたるしるしには。我を生きながら鬼神になしてたび

篠舟　文武　三井寺禪師　都島別　在世太子
ふつとう山　三輪緒環　十羅刹　せうとらほう　青葉
青柳　深草　佐々木判官　糸繰　野間
八鹽岡　禊鬼　足疾鬼　大國退治　豐成
九款浦　御誓藏　神功皇后　七不動　二上
石菖　石鏡　かこ丞馬　古今假名序　りんたう
高祖　かたき錦木　まれい山　三八孝　寶滿長者
法華經　布智　布袋　大黑　三の舟
九十賀　盥夫石　鵜羽　逢坂庭鳥　蘇東坡
木幡　高野　布留　子守　須磨忠度
志賀忠度　玉蟲　末松山　伏戸　貞任
小野物狂　堀乘　もろよし　ひかみ　網持
知忠　つねしげ　らうとうしや　木魂　やすさだ
けうほう女　そんし　みうへがだけ　龍王　檻塚
菅原相　緒環　樹神浮舟　吉備津宮　住吉
黑谷　春日野露　嵯峨野隱　犬寺　清閑寺
往生院　櫻前　卒都婆子　和光　烏羽
紅葉　辨內侍　閑翁　現在錦木　土偶神

一夜天神　鯉　金龍山　中將姬　武俊
十夜　善導寺　鵜鷄僧　延喜帝　橘供養
臼杵　富樫笈搜　二柱　多賀　多手利
天王寺物狂　九品　蘭奢侍　立田物狂　郭蘂蹠
鬼童丸　鳴長明　上人流　あはでの森　不斷櫻
佐保川　橘　犀　仲算　九穴
鈴鹿　野口判官　岩瀨　鞠　女沙汰
高安　二度懸　御崎　御室經政　熱海
眞名井の水　八幡弓　異國退治　清重　村上
水神森　銀杏森　兎獵師　金剛水　遥思邊
龍神白樂天　玉祭小町　更科祐近　吉野櫻　閑居
五節　槌打健　見が淵　鍬池　霞關
田鶴　三笠山　柳津　濱鏑　宮戸龍神
現在鵜飼　國府津　獅子王　江戸鹿子　高野敦盛
門破　東夷　躰天神　八劔　姫切
治國　時有　赤澤曾我　水尾山　鳴渡
祇園　籠馬　隱里　劔珠　淨藏貫所
鵜の丸　戀草　根芹　瀧籠文覺　變化信之

給へ。ねたましと思ひつる女とり殺さんとぞ祈りける。明神あはれとや思しけん。賊に申すところ不便なり。まことと鬼に爲りたくば。姿を改めて宇治の川瀨に行きて三七日ひたれと示現あり。女房よろこびて都に歸り。人なきところに籠りて長なる髪を二つに分け角にぞ作りける。顏に朱をさし身には丹をぬり。鐵輪をいたゞき三つの足には松を燈し。松明をこしらへて兩方に火をつけて口にくはへつゝ。夜ふけ人志づまりて後。大和大路へ走り出で南をさして行きければ。頭より五つの火もえあがり。眉ふとくかね黑にして面あかく身も赤ければ。さながら鬼形に異ならず。云々。さてねたましと思ふ女。そのゆかり。我をすさむ男の親類。上下をも撰まず男女をきらはず。思ふやうにぞ取り失ふ」とあるに本づけるにや。

前シテ　唐船　祖慶官人

子方　唐子二人
同　日本子二人
ツレ　箱崎某
處ハ　筑前

唐土の祖慶官人と云ふ者。久しく日本に住み箱崎殿に使はれ居たりしが。故郷の子ども尋ね來て連れ歸らんと乞ふ。されど箱崎殿は父の歸國を許して子どもの同行を許さず。父せんかたなさに身を投げんとす。親子の情つひに箱崎殿を感ぜしめて。四人めでたく出帆する事を作れり。

西王母

シテ　西王母
ツレ　侍女
ワキ　大臣
處ハ　唐土

西王母と云ふ仙女天上より降り來りて。三千年の桃實を君に捧ぐる事を作れり。出所は漢武內傳に。王母降二漢宮一。侍女以二玉盤一盛二仙桃七顆一。大如二鴈卵一。形圓色青。母因啖二一。以二五枚一與レ帝。帝

薬平　花自然居士　歌藥師　翁草　蹴鞠
濱土產　錦織　鈴落　山住　厚婦
龍宮猩々　天橋立　遠矢　江島童子　堯舜
現在善知鳥　髻判官　嵯峨女郎花　禿物狂　大川下
將門　三社託宣　武藏塚　大磯　孟宗
一言主　岩根山　成經　玉江橋　高貞
泣鬼　現在檜垣　戀塚　語酒呑童子　飯野
宍戸　朱雀門　月乙女　蘆屋辨慶　人穴
出雲龍神　野中清水　輪管　太平樂　筐敦盛
佛櫻　農龍　現在殺生石　五郎　義貞
釧女　江豚　百足　喜慶　上宮太子
御岸　衣潛巴　國玉　六角堂　範頼
明智討　柴田　北條　吉野詣　高野詣
豐國詣（以上六番豊臣氏の時の作）

なほ漏れたるもあるべけれど。そは後日補ふことゝすべし。

其八　異名と古名

曲名は流儀によりてかはるあり。觀世にては安達原なるを他流にては黑塚といひ。他流にては俊寛なるを喜多に限りて鬼界島といふの類なり。これは前の內外二百番のところに對照して示したれば今は別に掲げず。今の稱と古の稱とかはれるものゝみを左に示さんとす。

今は	古は
高砂	相生
志賀	黑主
東北	又は志賀黑主
半蔀	軒端梅
松風	半蔀夕顏
六浦	松風村雨
百萬	六浦楓
錦木	嵯峨物狂
女郎花	又は嵯峨大念佛
通小町	錦塚
	頼風
	市原小町
	又は四位少將

今は	古は
春日龍神	明惠上人
寢覺	寢覺床
淡路	又は三返
俊成忠度	楳
難波	五條忠度
加茂	難波梅
忠度	矢立鴨
源氏供養	短冊忠度
千手	紫式部
定家	千手重衡
葛城	定家葛
小督	雪葛城
	仲國

レ核著レ前。母開。用レ此何。上曰。此種美欲レ植レ之。母笑曰。此桃三千年一實。非二下土所植と見ゆ。

巴

前シテ　里女
後シテ　巴
ワキ　僧
處ハ　近江

巴御前の履歴を述べて。義仲討死のさまを語らせたる作なり。

杜若

シテ　杜若の精靈
ワキ　僧
處ハ　三河

在原業平杜若の古跡を伊勢物語に依りて述べ。經文の功德にて花の精でも成佛する事を作れり。先づ原脅をこゝに載せて讀者の便に供ふべし。かの物語に曰く。むかし男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして。京にはあらじ東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。云々。三河の國八橋といふところに至りぬ。そこを八橋といひけるは。水行く川の蜘蛛手なれば。橋を八つ渡せるによりてなん八橋といひける。その澤のほとりの木陰におりゐてかれ飯くひけり。その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを見て。ある人のいはく。かきつばたと云ふ五文字を句の上にすゑて旅の心をよめといひければよめる。唐衣きつゝなれにしつましあればはるゝばるゝきぬる旅をしぞ思ふ。とよめりければ。皆人かれいひの上に涙おとしてほとびにけりと。

藤戸

前シテ　母
後シテ　子
ワキ　佐々木盛綱
トモ　從者
處ハ　備前

佐々木盛綱備前の兒島に平家を攻めし時。海路の案内せし漁夫を刺し殺し我一人の功にしたりしを。事をさまりて後そ

邯鄲　又は蘆生　枕
船橋　佐野船橋
黑塚　糸車
野守　野守鏡
皇帝　明王鏡　又は孝宗
放生川　放生會　又は八幡
賴政　源三位
代王　葛城鴨
蟬丸　逆髮
讒法　名取媼

藍染川　染川
卒都婆小町　小町物狂　又は小町卒都婆
正尊　土佐坊
木曾願書　埴生
箙　箙梅
求塚　若菜
忠信　空腹
羅生門　綱
大江山　酒呑童子
石橋　獅子

其九　作曲者

謠の作文者は多く知らざれども。作曲者の名は世に傳はるもの少なからず。尤も作曲者にて作文者なるもあるべく。作文者のものせし原案を作り改めて曲に成せるもあるべし。今こゝに傳はりたる作曲者のみを紹介せん。

結崎觀阿彌清次の作

白髮一説には禪竹　松風一説には阿彌　花筐
百萬世阿彌　自然居士一説には鵠一説には阿彌　草子洗一説には融世阿彌
松尾一説には世阿彌　淡路　吉野靜一説には阿彌　卷絹
求塚一説には阿彌　鉢木一説には世阿彌　道成寺　卒都婆小町

結崎世阿彌元清の作

高砂　弓八幡　難波　老松
松尾一説には觀阿彌　志賀　白樂天　鵜羽
養老　吳服　右近一説には小次郎　田村
八島　實盛　通盛一説には非阿彌　乘平
賴政　經政　朝長　清經
忠度　須磨忠度　志賀忠度　經盛
項羽　東北　佛原　江口一説には禪竹
夕顏一説には左衛門　采女　野宮　井筒
熊野　班女　二人靜　雲雀山
定家一説には禪竹　松風一説には觀阿彌　梅枝　三輪
源氏供養一説には西王母　富士太鼓　羽衣
雲林院　杜若　誓願寺　葛城

の母の恨みを受け。冥福の法事を修して亡魂を成佛せしむる事を作れり。

山姥

前シテ　山住の女
後シテ　鬼女
ツレ　都の女
ワキ　從者
處ハ　越中

都の女山中に宿して。山姥の山廻りする樣を見る事を作れり。前後ともに物凄き氣色を以て十分に裝ひたり。拾葉抄に曰く。此謠の大意に付きて二義あり。一には旅人の行き暮れて一夜の宿を借り。山姥に逢へると云ふ事。昔より童部などの物語にいひもて來れるを此謠に作るなるべし。二には山姥とは輪廻無窮の躰を名づけて山姥と曰ふ。山とは世界を云ふ姥とは凡夫を云ふ。一切衆生生死に沈淪するをよしあし引の山姥が山めぐりするとは云ふなり。よしあしとは善惡の二つを云ふ。慾界に生まるゝ衆生は。智ある

櫻川　百萬一說には觀阿彌　三井寺　花月
雲雀山　東岸居士　船橋　邯鄲　天鼓
錦木　藤戸　通小町一說には次郎　阿漕一說には川上神主
善知鳥　鐵輪　隅田川一說には十郎　車僧
山姥一說には禪竹　春日龍神　海人　鵜飼一說には江波
當麻　御裳濯　蟻通　玉色　三山　護法　景清　泰山府君　花筐　鐘馗一說には觀阿彌　舍利　礎　關寺小町
猩々　放生川　佐保山　代主　金札　知章　籠太鼓　七夕　俊寛　反魂香　鏡馗一說には觀阿彌　國栖　木賊　鷺
富士山一說には小次郎　敦盛　菊　盛久一說には十郎　蟬丸　玉水　檀風　箱崎　末松山　忠信　檜垣　求塚一說には世阿彌
大原御幸　昭君一說には禪竹　道明寺　松色　鉢木一說には觀阿彌　落葉　嗣信　戀重荷　鶏鶏小町　伏見

も恐なるも輪廻やむ事なし。依て善惡ともに山姥と見るなりと說けり。文の作者は一休和尚と云ひ傳ふ。和尚の小傳は江口の始めに述べたれば今は略せり。

嵐山

翁
前シテ　姫
ツレ　藏王權現
後シテ　木守神
ツレ　勝手神
同　勅使
ワキ　山城
處ハ

勅使嵐山に至りて神の奇特に逢ふを骨とし。花の來歷を說き名所の景を寫して君が代を祝するを皮肉とせり。これも春の祝言能に用ひらる。

養老

前シテ　父
ツレ　子
後シテ　山神の神靈
ワキ　勅使

飛鳥川　皷瀧　竹雪　春榮
滿仲　歌占　土車　紅葉狩一說には次郎
常陸帶　池贄　橘辨慶一說には佐阿彌　須磨源氏
橘姫　堀籠　玉桙　鳴不動
長等　丹波物狂　吉野靜一說には觀阿彌　横山
翁法師一說には十郎　吉野琴　女郎花　小野物狂
隱岐物狂　柏崎一說には江波　餓鬼　神有月
自然居士一說には觀阿彌　獅子　實方　逆鉾一說には宮增
草子洗一說には觀阿彌　逢坂庭鳥　蘆刈一說には禪竹　綾皷
葵　木幡　舞入自然居士　高野　布留
子守　伏戸　伏木曾我　野守一說には禪鳳　松浦饒
融通鞍馬　三渡　酒呑童子　貞任　經書堂
水無月祓一說には佐阿彌　承久
金春禪竹或は善竹氏信の作　竹生島　白髮一說には觀阿彌　江口一說には世阿彌
加茂　楊貴妃一說には別人　千手
源氏供養一說には世阿彌　芭蕉　小鹽　西行櫻
玉葛　龍田

處ハ　美濃

續日本紀および其他の傳說によりて。飛老の滝の古事孝子の物語を述べ。かゝるめでたき御代なれば山神出現して。勅使に藥の水を捧げ奉る事を作れり。まづ續日本紀元正天皇の詔に曰く。朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日。因覽當耆郡多度山美泉自盥手面皮膚如滑。亦洗痛處無不除癒。在朕之躬其驗。又就而飲浴之者。或白髮反黑。或頹髮更生。或闇目如明。自餘痼疾咸皆平癒。昔聞。後漢光武時醴泉出。飲之者痼疾平癒。符瑞書曰。醴泉者美泉。可以養老。蓋水之精也。寔惟美泉即合大瑞。朕雖痛虛何遂天貺。可改靈龜三年爲養老元年。大赦天下。と。瑞亮の記と云ふ書に曰く。むかし元正天皇の御時。美濃の國に貧しき男あり。老いたる父を持ちたりける。此男。山の木を伐りて代となし父を養ふ。此父常に酒を愛す。或時山に入りて薪を採らんとするに。昔深き石にすべりてまろびぬ。かの石より水ながれ出づ。其色酒に似たり。汲みて嘗むるにめでたき酒なり。日々に之を汲んで父にあたふ。みかど此事を聞召て。靈龜三年九月に其所へ行幸なりて御覽じけり。至孝の志を天神地祇あはれびて。その德をあらはすなりと感ぜさせ給ひて。此男を美濃の國司になされ。酒の出づる處を養老の滝と名づけられ。同じき十一月に年號を養老と改められけりと。

敦盛

前シテ　草刈男
ツレ　同
後シテ　平敦盛
ワキ　遣生法師
處ハ　攝津

敦盛の幽靈遣生法師に逢ひて合戰の物語をし。つひに生前の遺恨をひるがへして成佛する事を作れり。

井筒

小督　蘆刈（一說には世阿彌）　山姥（一說には世阿彌）　黑塚
大會　葵上　雨月　放僧
鐘馗（一說には世阿彌）　昭君（一說には世阿彌）　谷行　熊坂
源太夫　重衡　定家（一說には世阿彌）　六浦（一說には佐阿彌）
虎送
結崎十郎元雅の作
隅田川（一說には世阿彌）　弱法師（一說には世阿彌形）　盛久（一說には世阿彌）　石橋
金春禪鳳（或は音鳳とも書く）元安の作
嵐山　野守（一說には世阿彌）　東方朔　生田敦盛
初雪　一角仙人
觀世小次郎信光の作
玉井　遊行柳　安宅
張良　皇帝　羅生門　胡蝶
大蛇　龍虎　船辨慶　紅葉狩
高祖　龜井　鐘卷　吉野天人（一說には佐阿彌）
大世太子　木魂　知忠
巴園　恒重　維盛　維治
安貞　けうほう女　らうとうしゃ　久世戸
もろこし　盛長

ひかみ　光季　江島（一說には彌次郎）　富士山（一說には世阿彌）
網持　二人神子　貴布禰　三井寺禪師
觀世彌次郎長俊の作
大社　江島（一說には小次郎）　輪藏　正尊
花軍　葛城天狗　降魔　そんし
いてたいし　香椎　岡崎　龍王
呂后　宮川　みうへがだけ　廣元
通小町（一說には世阿彌）
邪山又五郎吉廣の作
唐船
金剛彌五郎の作
烏追船　絃上（一說には川上神主）
宮增樂の作
氷室　鞍馬天狗　逆鉾（一說には世阿彌）　大江山
烏帽子折　浦島　錦戸　元服曾我
調伏曾我　菅丞相　大木　舞車（一說には別人）
日吉佐阿彌安清の作
六浦（一說には竹）　殺生石　水無月祓（一說には世阿彌）　藤

前シテ　里女
後シテ　井筒女
ワキ　僧
處ハ　大和

伊勢物語中の一段を本として作れり。原文に曰く。むかし田舎わたらひしける人の子ども。井のもとに出でゝ遊びけるを。おとなになりにければ。男も女も恥ぢかはしてありけれど。男は此女をこそ得めと思ひ。女も此男をこそと思ひつゝ。親の(他の男女に)あはする事も聞かでなんありける。さて此隣の男のもとよりかくなん。筒井づゝ井筒にかけしまろがたけ生ひにけらしなあひ見ざるまに。女返し。くらべ來し振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき。かくいひ〳〵て。遂に本意の如く逢ひにけり。さて年頃ふるほどに。女の親なくなりて便なくなるまゝに。諸共にいふかひなくてあらんやはとて。河内の國高安の里に(男の)いき通ふ(女の)所いできにけり。さりけれど。此もとの女あしと思へるけしきもなくて。出だしやりければ。男(女の方に)異心ありてかゝるにやあらんと思ひ疑ひて。前栽の内に隠れ居て河内へいぬるがほにて見れば。この女いとよう假裝してうちながめて。風吹けば沖つ白波立田山夜半にや君がひとり越ゆらん。とよみけるを聞きて。限なくかなしと思ひ。河内へも通はずなりにけり。など。

シテ　小野小町
子方　寺の見
ワキ　關寺住僧
ツレ　同
處ハ　近江

小野小町老ひ衰へて關寺のほとりに住みしを。歌道の譽れに依りて七夕祭に寺に招かれ。昔に歸りて舞をまふ事を作れり。出處は愚見抄に。小野小町大江惟茂が妻になりて筑紫へ下りけるが。後に尼になりて近江の國關寺のあたりにありける

吉野天人(一説には小次郎)　橋辨慶(一説には世阿彌)
與江元久の作
浮舟(一説には細川弘港寺)
江波左衛門の作
拍崎(一説には世阿彌)　鵜飼(一説には世阿彌)
内藤左衛門の作
半部　夕顔(一説には世阿彌)　俊成忠度
井阿彌の作　樹神浮舟
通盛(一説には世阿彌)
竹田法印定成の作
善界
三條西某卿の作
常磐　狹衣
川上神主の作
結環　紘上(一説には彌五郎)　朝夷
文覺　阿漕(一説には世阿彌)
細川弘源寺持之の作
浮舟(一説には興江)

太田垣能登守忠説の作
朝顔
金春善德の作
吉備津宮
觀世音阿彌元重の作
住吉
金春八郎の作(作文は由己法橋)
明智　柴田　北條
高野詣　吉野詣
觀世左近元章の作
梅

嘗て謡曲通解を著はし。ついで謡曲文粹を編みたる時は。未だ調べの足らざりしため。作曲者も其曲名も之を掲ぐること少なかりしがその後こゝかしこより得たる材料の結果によりて。かくまで多く示す事を得たるは。すこぶる歡喜に堪へざるところなり。なほ古く探り博く尋ねて世に知られざりしを顯はさんとするは。特に著者の志なり。

と。鴉鷺記に。いくばくか人の心を惱ましゝといへども。おとろへぬれば鄙にさすらひ都にさまよひ。はては關寺の邊に庵を結びて。野邊の若草に命をさゝへ。うきすまひをせしを。智證大師御覽じましゝて寺にて七日の御說法ありとて召されしに。身のありさまを恥ぢて參らざりき。御使たび〳〵なりしかば。召事はをのゝやけばとわびけんも。誠にあはれに覺えたり。そのまゝ乞食となりて昔志のはれしほど。今は厭はれ終に路次の骸となる。など見ゆ。これも老女ものゝ一つにて重き能なり。

前シテ　樵童
後シテ　獅子
ワキ　寂昭法師

寂昭法師入宋して獅子舞の奇特に逢へる事を作れり。

加茂

前シテ　里女
ツレ　同
後シテ　別雷神
ツレ　神女
ワキ　室の神職
處ハ　京都

加茂明神の奇特を作れり。

木曾

シテ　太夫坊覺明
ツレ　木曾義仲
同　池田次郎
同　從兵
處ハ　越前

木曾義仲信濃より起りて平家を討たんとする陣中にて。願書を八幡宮に納め出陣を祝ふ事を作れり。

蟬丸

シテ　逆髮
ツレ　蟬丸
ワキ　勅使
處ハ　山城

蟬丸の宮と申すは皇子の御身にておはし

其十番組

能にもせよ謠にもせよ。其日に舞ひ謠ふ曲の配合を善くして順序正しく組み立つるを。番組といふ。この番といふ詞は。舞樂の左方唐樂）右方（高麗樂）と二曲づゝ必ず組合はするを番の舞と稱ふるより出でゝ。能もしくは謠にては五番なり六番なり其日に演奏する全部の組立を稱ふる名とはなりたるなり。

その配合の種類は。花傳書といふ能の秘書に曰く。一番に祝言をする事。神能に定まりたり。祝言にて有らば何の部にてもあれ。是あるべき儀なれども。神能に定め候事は子細あり。日本は神國なり。神代より傳はれる國なれば。今人皇の御代に至るまで。我朝の守護神たり。かるが故に。其日祈禱として神を歡請するといふ心に依つて。一番に神能なり。

二番に修羅（合戰を仕組めるもの）をする事。そも〳〵此國は。弓矢を以て惡魔を平らげ治まる國なればとて。惡魔降伏の爲めに修羅を用ふるなり。

三番に鬘（女もの）をする事。皆人かづらにてさへ有れば何なりとも心得候事。是れ大きなる僻事なり。かづらは幽玄のかづら本なり其故は。一番に神代の始を受け。二番に惡魔降伏の修羅を引き。三番には斯樣に國治まり天下泰平の御時は。こと〳〵く幽玄なり。かるが故に三番に幽玄を定ひ。幽玄いろ〳〵あり。男の幽玄もあり。さま〳〵の幽玄ありといへども。女の部に定むること。二番の修羅男の部なれば。陰陽和合と取り合はせ。三番にかづらなり。そのうへ世治まり泰平の御代には。色に染み香に愛で。幽玄つもりて戀慕の道になる故なり。かるが故に世間の有樣を學びたるものなれば。戀慕幽玄の鬘をするなり。

四番に鬼能を定むる事。是も鬼なればとて唯の鬼の部にあらず。冥途の鬼を本とす。その子細は。此前の能幽玄のかづらなり。脇の部に神祇を學び。二番の惡魔降伏の修羅。かくの如く世を治めて。榮花つもつて幽玄になる時は。又冥途の處へ行くなり。此くの如く樂しみを極め榮花盛にてもあれ。人間の一期は一唖の夢。電光朝露石の火まぼろしの間の世なれば。樂しみも頼まれず。たゞ菩提心の心を起し。後世を願はんこと本意なり。さるによつて。今日は有れども明日を期せざる浮世なれば。因果報いの冥途の姿を現はし。樂しみ榮花も菩提のたよりにはならざるとの心を。知らさんとの儀によつて。四番に冥途の鬼をするなり。又は漸く半も過ぎぬれば。四番目

ながら。盲目なるため逢坂山に捨てられ給ひし處に。國ちずも狂女ときまをます姉君。琵琶の音をしるべに尋ねよりて兄弟對面し給ふ事を作れり。但し蟬丸は式部卿敦實親王（宇多天皇の皇子）の雅色なりと傳へたるに。此謠に皇子に作れるは。盛衰記海道下の詞などに依れるなるべし。

蘆刈

シテ　日下左衛門
ツレ　同妻
ワキ　從者
狂言　里人
處ハ　摂津

日下左衛門と云ふ人。貧にせまりて夫婦わかれ〳〵になり。夫は芦刈るわざを營業とし妻は都に奉公して互におとづれもせざりしを。妻は今は身分よくなりたるをもて夫を尋ねゆき。うちつれてめでたく都にのぼる事を作れり。出處は大和物語なれど文長ければこゝに得引かず。

の時分は諸人も眠る頃なれば。一つは萬人の眠りをも覺まし氣をも附けんために。一座の内にかた〳〵もつて鬼を用ふるなり。是は能組の秘事なり。かくの如く面白き遊の内にも。後の世の躰を此世にて作り罪科に引かれて。それ〳〵の罪に苦しみを受くる躰を見て。後世を思ひ出し候へば。我人の發心をおこし候へば。佛法も能にあり。說法の場に參るも同前なり。さるによつて謠を無盡經といふも此儀なり。

五番に義理を定むる事。世間は仁義禮智信の五常を背かずして。義理を本とする事本意なり。右一番より神の部と定め。二番に修羅を定め。三番にかづらを定め。四番に鬼を定む。冥途の有樣をあらはすと義理をあらはす。五常にはづれたるものは此くの如くなりゆくとの理りも。義理を思はんがためなり。然るによつて五番に義理を定むるなり。

六番に祝言を又する事。是は一座の收めなれば。君を祝ひ身を祝ひ處を祝ひ。花は春過ぎつれども。又立ちかへり春來ぬれば。過ぎにし春の如くに花さき榮ふるとそれを表し。咲きかへりぬる春に又逢ふと樂しみを祝ひ重ねて收め。六番に始め有りつる祝言を又するなりと。

殺生石

前シテ　里女
後シテ　狐
ワキ　源翁
處ハ　下野

殺生石の古事を世の物語によりて作れるなり。出處は先づ海藏寺開山傳に。源翁（玄翁とも書く）禪師は相州海藏寺の開山なり。諱は心昭。空外と號す。姓は源。越前荻村の人なり。康治帝（近衛）の御宇に玉藻前あり光を身より放つて殿階を照らす。帝こゝに於て不豫なり。安部易說（やすなり）之を卜して曰く。これ玉藻のしわざなりと。忽ち狐を化して東國に逃る。帝は三浦介義明。千葉介常胤。上總介廣常に詔して其狐を下野の國那須野にうたしむ。義明射て之を殺す。其のち百年餘にして狐の靈石となる。世俗に殺生石と曰ふ。其石に觸れば鳥獸人民みな死す。民の苦しむ甚し。時に僧大徹と云ふものあり。其石の怪を止めんと欲すれ

右花傳書筆者の說は附會多けれども。配合順序は此くの如きなり。今わかりよく之を言ひかふれば。初番は神祇。二番は合戰。三番は女。四番は見物聽衆を感ぜしむべき面白きもの。五番は賑はしく人氣を引くべきもの。六番は君を祝ひ世を祝ふもの。といふ具合に出來たるなり。今假にいさゝか例を作りて示さば。

一　高砂
二　田村
三　羽衣
四　盛月
五　船辨慶
六　岩船

一　難波
二　八島
三　東北
四　百萬
五　融
六　金札

ども能はず。寶治帝（後深草）源翁に詔して曰く。師は野州に往いて此怪をやめよ。翁いたれば石の左右は自骨鬪攫山の如くつもれり。翁は破竈墮の機緣を拈して曰く。汝既に是れ何れの處よりか來る。性いづくに向うてか收まると。偈を題して曰く。云々と。柱杖を擧げて卓一下す。石忽ち破碎す。其夜一の女子現じて曰く。我淨戒を得て天に生まると。言ひをはつて畑の如くに沒す。此より翁の聲名洛鄙にしけり。鎌倉の副元帥平時賴。翁の道驗を聞いて。奥州會津利根川の庄を以て翁の館粥の資と爲す。時に建長年間なり。

とあるを本として作れり。

善界

シテ（前後）　善界坊
ツレ　太郎坊
ワキ　比叡山の僧
處ハ　山城

唐土の天狗の主領。わが日本に渡りて佛法の妨害をなさんとせしに。神佛の罰を蒙りて終に敗北し歸る事を作れり。今昔物語に出でたる話を本とせしなり。僧は比叡山の餘慶律師を暗に指す。

松虫

前シテ　客人
ツレ　同
後シテ　亡者
ワキ　市人
處ハ　攝津

松虫を愛せし人の亡者來りて酒を飲み舊遊を物語る事を作れり。阿部野に松虫塚と云ふ古墳あるによりて。云ひつたへたる俗說を布演せしなるべし。或は松虫は官女の名なりとも云ふ。

三井寺

シテ（前後）　狂女
ワキ　三井寺住僧
ツレ　作從僧
子方　寺の兒
狂言　夢卜者（前ハ京都　後ハ近江）
處ハ

一　老松
二　箙
三　熊野
四　芦刈
五　善界
六　猩々

一　養老
二　兼平
三　松風
四　鉢木
五　野守

一　白樂天
二　頼政
三　楊貴妃
四　善知鳥
五　鞍馬天狗

一　弓八幡
二　忠度
三　采女
四　山姥
五　春日龍神

一　三輪
二　實盛
三　江口
四　道成寺
五　土蜘

一　龍田
二　經政
三　井筒
四　七騎落
五　紅葉狩

およそ此くの如く組み合はするを正則とす。六番目の祝言を略して

愛兒を失ひて狂女となり三井寺まで狂ひゆきたるが。佛の助によりて遂にめぐりあふ事を作れり。文中に湖水の景を寫して裝とし。鐘の古事を引きて曲とせし處など。最も味ひ見るべし。

木賊

シテ　父
子方　子
ツレ（二人）　里人
ワキ　旅人

信濃に木賊を刈りて世を渡る翁あり。かねて愛子の行方を失ひて嘆き居たるが。年を經てめぐりあへる事を作れり。能にては重き習事とす。

融

前シテ　老翁
後シテ　融大臣
ワキ　僧
處ハ　京都

融大臣は榮花を極めて住まれたる人なれば。其遺跡の物さびしきさまと。ありし世の盛なりし面影とを照らし合はせて作れるなり。一盛一衰の理目前に見えて感ふかし。愚見抄に。河原左大臣六條河原にいみじき家つくりて池を掘り水をたゝへて。毎月潮三十石ばかりはこび入れて海底の魚貝等を住ましめたり。陸奥の國鹽竈の浦をうつして。海士の鹽屋に煙を立てゝもてあそばれけるとなん。と見え。今昔物語に。大臣うせ給ひてのち。宇多院は此河原院に住ませ給ふ夜。西の對の塗籠をあけて人の參るやう思して。見させ給へば。緋の裝束したる人の太刀はき笏取りて二間ばかり退きて畏たり居たり。あれは誰ぞと問はせ給へば。こゝの主にて候ふ翁なりと申す。融大臣かと問はせ給へば。しかに候ふ。此所ほ我家なり。院こゝに住み候ふが故に所せくなり。如何にすべからんとせ申せば。院聞しめし。我おしとりて居たらばこそあらめ。大臣の子孫の我にしれたればこそ此所にすむなれ。いかにかくは恨むるぞと。高五番にて收むる時は。附祝言とて高砂の「千秋樂には民を撫で」以下を謠ふ法なり。尤も五番目の終の文句に。「めでたけれ」とか「久しけれ」とか言ふ如き祝言の文句あれば別に附祝言を用ひず。又時によりては高砂に限らず。他の文句を謠ふ事もあり。追善供養の法樂には。融の「この光陰にさそはれて」以下。もしくは難波の「この音樂に引かれつゝ」以下を用ふること常なり。

右正式は六番もしくは五番と定まりたれども。是も多くもし少なくもするは隨意なり。在樣の時は定まりたる標準を本として。番組の配合に工夫を凝らすべきものなりと知るべし。

其十一　習事

能にても謠にても。其家々の秘事と爲して重んずるところの曲ありて名づけて習事といふ。弟子たるものは家元の免許傳授を得るに非ずんば。これを習ふ事も演奏する事も出來ざる規則なり。今これを其流儀々々に分ちて示さん。

觀世流

九番習（直弟後）

藤戸　俊寛　鉢木　當麻

景清　大原御幸　角田川　遊行柳

定家

重習

碓　望月　鷺　卒都婆小町

木賊　道成寺　石橋　戀重荷

姨捨　檜垣　鶏鵡小町　關寺小町

別習

神歌　梅

三讃物

勸進帳　起請文　木曾願書

關曲

上の卷　中の卷　下の卷

寶生流

入門後習古の分

高砂　弓八幡　松尾　志賀

養老　繪馬　吳服　和布刈

加茂　嵐山　氷室　難波

やかに命せられければ。かひ消すやに失せられぬ。など見ゆ。此今昔物語を下に思ひて幽靈の事をは作れるなるべし。

鵜飼

シテ（前後）　漁夫
ワキ　日蓮上人
ツレ　從僧
處ハ　甲斐
日蓮上人甲斐の石和川にて鵜つかひの幽靈を成佛さすを事を作れり。

頼政

前シテ　里人
後シテ　源三位頼政
ワキ　旅僧
處ハ　山城
源三位頼政は高倉宮に御謀反をすすめ參らせて。平家を討たんとせしに。事あらはれて遂に宇治川の合戰に討死する事を作れり。

夕顔

前シテ　里女

老松　放生川　通盛　頼政
藤　胡蝶　祇王　節太皷
富士太皷　葵上　邯鄲　卷絹
三笑　自然居士　盛久　滿仲
調伏曾我　天皷　蟻通　斑女
加茂物狂　雲雀山　花筐　櫻川
冤狀の分
實盛　楊貴妃　熊野　江口
野宮　誓願寺　草子洗　西行櫻
三山　阿漕　竹雪　三井寺　通小町
菩知鳥　鐵輪　七騎落
歌占　山姥　國栖　紘上
來殿
中傳冤狀の分
朝長　井筒　昭君　安宅
蟬丸　柏崎　芭蕉　藤戸
當麻　雨月　高野物狂　遊行柳
唐船　鉢木　俊寛　大原御幸

後シテ　夕顔上
ワキ　旅僧
處ハ　京都
源氏物語に夕顔の上と云ふ女あり三位中將なりし人のむすめなるが。早く父を失ひてのち、頭中將これに通ひ睦び給ひしかば。玉葛の君うまれたり。さるほどに頭中將の北の方嫉妬の事ありて。我身危く思ひしかば。ひそかに住居をかへ玉葛をば乳母にあづけて身を隱し居たりしが。五條の假住居せし折。光る源氏の立ちよらせ給ひしに。夕顔の花に歌すへて奉りしが。御心に深くとどまりてこれより通初め給ふ。八月十五日夜同車にて何がしの院にうつり給ひしに。十六日の夜にいたり夕顔の上は物におそはれつゝ遂に空しくなり給ひぬ。と云ふ一段の物語を同番夕顔の巻によりて作れるなり。

鳥追船

シテ　妻
子方　子

攝待　景清
習事冤狀の分
松風　弱法師　綾皷　隅田川
求塚　砧　定家　正尊
卒都婆小町　鵜鶴小町　木賊
大習の分
翁　亂　道成寺　望月
石橋　鷺
三老女
檜垣　姥捨　關寺小町

金春流
大秘事重き習
翁式
別して重き習
弓矢立合
一子相傳
關寺小町

ワキ　日暮殿
トモ　從者
ツレ（男）　左近尉
狂言　處の人
處ハ　蘆摩
主人の留主に其家臣左近尉と云ふもの横領して。主家の妻子を苦役せしめしが。主人かへり來りて左近尉を手討にせんすると、妻の和解によりて無事にすみたる事を作れり

前シテ　雷電
後シテ　菅公
ワキ　雷神
處ハ　法性坊（昔ハ近江　後ハ京都）
菅公筑紫にて薨去ありしのち、生前の師なりし法性坊のもとに來て頼まるゝ事あり。之を前段とす　遂に遺恨つもりて雷神と爲り。君邊の姦臣どもを取り殺さんとせしが。法性坊の法力によりて祈り伏せられ。天滿大自在の勅號を賜はりて止む。之を後段とす。

前シテ　志賀　樵夫
ツレ　同
後シテ　大伴黒主
ワキ　臣下
處ハ　近江
大伴黒主あらはれて歌がたりする事を作れり。無名抄に。志賀郡に大道より少し入りて山ぎはに黒主の明神と申す神はいます。是は黒主が神になれるなり。などある如く。世にいひつたへたるまゝに神能に仕組みしなるべし。

清經　左中將清經
シテ　女
ツレ　淡津三郎
ワキ　京都
處ハ
左中將清經は平家の衰運また復すべからざるを嘆き。壽永二年に豐前の柳浦にて入水せり。其時の有樣を魂魄の歸り來

三番大事の習
道成寺　猩々亂　朝長懺法
七番別して重き習
定家　西行櫻　卒都婆小町　望月
雨月　石橋　角田川
九番小習物の内重き習
高砂　老松　同　白樂天
佐保山　朝長　融　安宅
清經
廿番小習物
芭蕉　同　楊貴妃　野々宮
同　江口　松風　同
熊野　誓願寺　柏崎　同
通小町　藤戸　海士　羽衣
杜若　舟弁慶　昭君　野守
入門濟の上巻古
高砂　老松　田村　八島
東北　芭蕉

金剛流
三番習
繪馬　卷絹　弦上
十三番習
雪　住吉詣　角田川　俊寛
弱法師　景清　遊行柳　調伏曾我
雨月　安宅　大原御幸　碪
木賊
祝言の習
亂
重き習
鷺　望月　道成寺　石橋
姨捨　檜垣　定家
三老女
卒都婆小町　鵜鴨小町
開寺小町

喜多流

て語る由に作れるなり。女と髪との出處は盛衰記に。清經は都を落ち給ひける時。女房をも西國へ相具し奉らんとのたまひければ。年頃深ふ契りを結び二心なく結ばれし御中にて。女房はさもと出で立ち給ひけるを。父母大きにいかりつゝ許し給はざりければ力及ばず。哀しみの中を別れてひとり都を落ち給ひけるが。道より髪の髪を切りて形見に歸しつかはして。常は音づれ申さん。たよりの時は又うけたまはる事も候へよなど。いひおくりながら。三年の程あるかなきか言づても無かりければ。女房恨み給ひて。いづくまでも相具せんと云ひしかば。我もさこそ思ひしに今は心がはりのあればこそ三年を經れども云ふ事は無かるらめ。さては形見もよしなしとて返し下し給ひけるが。左中將の柳が浦におはしましける所へ着きたり。一首の歌を添へられたり。見るからに心づくしの髪なればうさにぞ返す本の社に。左中將これを見給ひては。

習

翁　猩々亂　道成寺　望月
石橋　關寺小町　檜垣　伯母捨
鵜鵜小町　卒都婆小町　木賊
定家　隅田川　景清　正尊
鷺

これらの外。能にては替の形の習事あまた有れども。そは能の部にていふべし。されど委しき事は其流儀々々の秘事に渡るべければ。ことゝくは盡す能はず。

謠

其一　番謠小謠素謠

謠を一番まるで謠ふを番謠といひ。酒席などにて短きところ一部分を拔き出だして謠ふを小謠といひ。すべて是等皷太皷笛等の拍子なしに。又は立ちて舞ふ事もせずに謠ふを素謠といふ。番謠は說明を待たずして明かなれが言はず。小謠の事は必要ありと信ずれば。少し言ふべし。

さこそ哀しくおぼしげめと見ゆ。之を死後の事に作り替へたるがおもしろし。

砧

前シテ　妻
ツレ　侍女
後シテ　妻の幽靈
ワキ　蘆屋某
處ハ　筑前

蘆屋某の妻。夫の久しく在京して歸らざるを嘆き。遂に空しくなりたるが。夫の吊らひを受けて成佛する事を作り。始終砧を以て物語の種とす。能にては習事にて重くする事なり。

阿漕

前シテ　漁翁
後シテ　阿漕
ワキ　旅僧

阿漕の海士の物語を俗說によりて作れり。それは勢陽雜譚に。阿古木は津の城下より五六町巽。濱邊に古墳一堆。模一本あり。これを阿古木の明神と云ふ。海小謠を謠ふには。其席の如何と其季節の如何とを先づ考へ定めて。適當したるものを謠はざるべからず。たとへば花見の宴ならば。

花さかば。告げんといひし山里の。使は來たり馬に鞍。鞍馬の山の山ざくら。手折りしをりをしるべにて。奥も迷はじ咲きつゞく。木陰に並みゐて。いざ〳〵花をながめん。（鞍馬天狗）

納涼の趣ならば。

御たらしの。聲も涼しき夏かげや。糺の森の梢より。初音ふりゆく時鳥。なほ過ぎがてに行きやらで。今一とほり村雨の。雲もかげろふ夕づく日。夏なき水の川隈。汲まずともかげはうとからじ。〳〵。（加茂）

月見ならば。

月は山。風ぞ時雨に鳴の海。波も粟津の森見えて。海ごしに。かすかに向ふ影なれど。月は眞澄の鏡山。山田矢走の渡守の。夜は通ふ人なくとも。月のさそはゞおのづから。舟もこがれて出づらん。舟人もこがれ出づらん。（三井寺）

雪見ならば。

肩上の笠には。無影の月を傾け。擔頭の柴には。不香の花を手折りつゝ。歸る姿や山人の。笠も薪も埋もれて。雪とそ下れ谷

人の俗語ならし。むかし納所村より太神宮へ御供調進の時。此浦にて贄の佳肴を漁せり。其故に伊勢をの海士の世を渡るいさりを禁戒しけるに。阿古木といふあま人。よる〳〵忍びて網を引き。渡世ともしからざるとなり。かくて忍び〳〵の度かさなりければ。人目もあまり遂にあらはれ罪科は行はれて。此浦の波間に波められけるとかや。其悪霊たゝりをなす事あるによりて。十の禰宜より社を祠りてのち。悪霊邪氣のさたも鎮まりけると云々。罪せられしは七月十六日と云々。それより毎七月十六夜はかの幽霊網引きけるとて。伊勢の浦には今に於て其後に限りて漁を断絶すと云々。とあり。

大江山

シテ　酒呑童子
ワキ　源頼光
ツレ　同行山伏
狂言　童子侍女
處ハ　丹波

源頼光の一行は山伏となづて酒呑童子のすみかにあざむき入り。つひに之を退治する物語を作れり。

春日龍神

前シテ　宮守
後シテ　龍神
ワキ　明惠上人
處ハ　大和

榊尾の明惠上人入唐渡天の望ありしを。春日明神龍と現れて之を止め給ふ事を作れり。出處は古今著聞集に。高辨上人（明惠上人の事）云々。釋尊の御遺跡拜み奉らんとて弟子。十餘人を相具して天竺へ渡り侍らんと思はれける頃。春日大明神に暇申さんとて彼社へ参られけるに。鹿六十頭膝を折りを地に伏して上人を敬ひける。其後生所紀伊の國湯淺郡へ向はれたりさるに。上人の伯母をりたる女房につきて。春日明神御託宣ありけるとて。我佛法を守護せんが爲に此國に跡を垂れたり。上人わが國をすてていづくへか行の道を。たどり〳〵歸り來て。柴の庵に着きにけり。〳〵。（葛城）

婚禮ならば。

正木のかづら永き代の。たとへなりける常磐木の。中にも名は高砂の。末代のためしにも。相生の松ぞめでたき。（高砂）

男子の祝言ならば。

かやうに祝ひつゝ。程なく烏帽子ありたてゝ。花やかに三色組の。烏帽子掛緒とりいだし。召されて御覽候へとて。御首の上に打ちおき。立ちのきて見れば。天晴御器量や。これぞ弓矢の大將と。申すとも不足よもあらじ。（烏帽子折）

神前の奉納ならば。

かけまくもかたじけなや。是をぞ願む神垣に。繪馬は掛けたりや。國土ゆたかになさうよ。（繪馬）

佛事には。

濟度の舟をも寄するなる。難波の寺の鐘の聲。異浦々に響きゝて。あまねき誓ひ滿汐の。おしてる海山も。みな成佛の姿なり（弱法師）

歌の會などにては。

かゝる奇德に逢坂の。關の清水に影見ゆる。月毛の此駒を。引き立て見れば不思議やな。もとの如くに歩みゆく。越鳥南枝に巢を掛け。胡馬北風に嘶えたり。歌に和らぐ神心。誰か神慮の誠を仰がざるべき。（蟻通）

酒宴ならば。

老せぬや。〳〵。藥の名をも菊の水。盃も浮び出でゝ。友にあふぞ嬉しき。此友に逢ふぞうれしき。（猩々）

などやうに文句を撰ぶべきなり。

いま觀世小謠萬聲樂。隨一小謠繪抄などいふ書に就きて。その目錄を擧ぐれば左の如し。（現今は用ひぬ小謠も多けれど。原書のまゝに掲げて私に省かず）

春の部

高砂　ところは高砂の。　四海波まづかにて。
　　高砂や此浦舟に。
難波　なにはづに咲くやこの花。
　　祝ふなる心ぞしるき。　一花ひらくれば。
老松　松が根の岩間をつたふ。　天つみそらも曇なき。
　　うれしきかなやいざゝらば。

かんとするとのたまひければ。上人申し給ひけるは。此事信ぜられず。誠ならば其驗を示し給ふべしと申し給へば。汝我れを疑ふ事勿れ。春日に來りし時。六十頭の鹿膝足を折りて敬ひしは。われ汝が上に六尺あがりて翔り離れざりし故に。我を敬ひしによりて膝を折りしなり。上人また申すやう。それは誠に然りき。さりながら猶疑あり。速に凡夫の振舞に離れたらん事を示し給へと申されければ。此女房とびあがりて萱屋の棟に尻をかけて坐せり。其顏の色瑠璃の如くに青く透きとほり口より白き泡を垂らす。その泡香ばしき事かぎりなしとあり。眞言傳にも右と大同小異の物語あり。それには神託の年月を延仁三年正月二十六日としるせり。

西行櫻

シテ　櫻の精
ワキ　西行上人
ツレ　花見の人々

不老松　綠の陰も光ます。
廣基　流にひかるゝ盃の。
竹生島　名どころ多き數々に。　名こそさゝ波や。
綠樹かげ沈んで。
立春松　春立つや尾上の松の。
右近　ひをりせし右近の馬場の。
雲林院　げに枝を惜しむは又。
田村　白妙に雲も霞も。　櫻の木の間に漏る月の。
鞍馬天狗　花さかば。　花に三春の約あり。
八島　釣のいとまも。
若葉松　神まつる今日あらたまの。
萬代の花を含むや。
波瀧　曇なき君のみかげは。ともなひ語らふ人々に。
羅生門　にほひも深き紅に。
若菜　道なしとても踏み分けて。
二人靜　このめ春雨ふるとても。
白髭　瑞垣の年もへにけり。
志賀　げにや今までも。

狂言　寺男
處は　山城

西行上人京都の西山に住みける頃。櫻の精あらはれて。上人の歌の事につき問答せし物語を作れり。雲玉集に。西行西山に山居の時。花に人あつより來にければ。花見んとむれつゝ人の來るのみぞ。あたら櫻のとがにはありける。かくよみし暮つかに花のもとに白髮の老人あらはれて。罪科はいかゞあらしの山櫻。ながむる人のわがみやま木を。と返しゝて失せにけり。花の精なるべし。とあるに本づきて作れるなるべし。

大瓶猩々

前シテ　童子
後シテ　猩々
ツレ　同
ワキ　かうふう
處は　唐土

かうふうと云ふ酒屋のあるじの孝行なるを愛して海中の猩々うちつれ來りて盡き

桃海　春風の吹けどもなどや。
西行櫻　百千鳥さへづる春は。あたら櫻の陰くれて。
采女　はこぶ歩みの數よりも。
熊野　四條五條の橋の上。　車やどり馬とゞめ。
寺は桂の橋柱。　稻荷の山の薄紅葉の。
松竹　春毎に君を祝ふや。
嵐山　となせに落つる白注も。千本の花の種うゑて。
西王母　三千年になるてふ桃の。
羽衣　風むかふ雲の浮波。
寢覺　日も夕ぐれに程もなく。
船橋　頃も春なり川風の。
藤波　いく春も花の盛と。
花衣　またや見ん交野のみのゝ。
佐保山　玉かづら來る年の緒の。
地主　とげて中々よしなや。
昭君　春やくるらん糸柳の。
泰山府君　あはれ一枝を。
春日龍神　御法の花も八重櫻の。

きせぬ酒の泉を授け。目出度く醉ひ戯むれ舞ひ遊ぶ事を作れり。

三輪

前シテ　里女
後シテ　三輪明神
ワキ　玄賞僧都
處ハ　大和

三輪の明神里の女と爲りて玄賞僧都の庵を訪ひ。終に神姿を顯はして神樂を奏し遊び給ふ事を作れり。是は謂はゆる神能の一つにて。三輪の社の緣起を述べたるものと見るべし。出處は舊事本紀に。大巳貴神天の羽車に乘じ。虛空を飛びてあまねく妾を求む。時に節度縣に下りひそかに大陶祇のむすめ活依玉姫に通ず。其往來人の知るところに非ず。其女孕めり。父母あやしんで問ふて曰く。誰人か來れるぞ。女答へて曰く。神人あり屋上より來りて共に枕をならぶと。是に於て之を顯はし見んと欲し。針を苧手卷に着けて。神人の裳に懸けて。其糸を認めて之を見る。明旦に往くに從ひて尋ね見れば。輪の孔より節度山を經て吉野山に入り三諸山に留まる。綰ぬる所の糸。三丸なほ遺れり故に號けて三輪山と曰ふ。と見え。江論の。玄宵洛陽を去つて他國に趣く間。道にて女人に來り會ふ。衣を脫ぎて之を與ふ。女人これを得て和歌を詠ず。三つの輪は滯く淨きぞ唐衣。くると思ふな得つと思はじ。など見ゆ。

鵜

前シテ　舟人
後テシ　鵜
ワキ　旅僧
處ハ　摂津

近衛天皇の仁平三年內裏にて頼政に射られし。鵜の亡靈あらはれて僧の弔を受くる事を作れり。物語の事實は多く平家物語に依る。

芭蕉

前シテ　里女
後シテ　芭蕉

櫻川　さくら川せゝの白波。
淡路　さかりに引かれて苗代の。
實方　これらは和歌の言葉にて。
躑躅　岩つゝじ折りもて見れば。
胡蝶　胡蝶の舞人いろ〳〵の。
忠度　須磨の若木のさくらは。
藤　さかり久しき藤波の。
小鹽　ちりもせず咲きものこらぬ。
氷室　かはらぬや氷室の山の。
杜若　在原の跡なへだてそ。

夏の部

加茂　みたらしの澤も涼しき。
加茂物狂　花やかなりし春すぎて。
鐘引　春秋のながめも夏の。
氷室　ましてや春すぎ夏たけて。
雲雀山　月は見ん月には見えじ。
更科　花たちばなの香をとめて。
鷺　鷺のゐる池の汀に。

菖蒲　君が代に引きこそ初むれ。
源太夫　時は三伏の夏の日の。
水無月祓　みな月のなごしの祓する人は。
清經　有明月の夜たゝども。
飛鳥川　しでの山田の時すぎて。
雷電　風月の窓に月を招き。
蟻通　源流やうやく茂る木の。
鵜飼　不思議やな篝火の。

秋の部。

女郎花　なまめき立てる女郎花。
雨月　折しも秋なかば。
　　うき世のわざを賤の女は。
弓八幡　木の葉衣の袖の上。
班女　秋高き枝も連なる。
玉江橋　夏はつる扇と秋の。
七夕　よる作るなる岩橋や。
東方朔　秋さり衣たがためぞ。
三井寺　秋きぬと目に見ぬ空は。
　　月は山風ぞ時雨に。

ワキ　僧
處ハ　唐土

芭蕉の精あらはれて僧の弔らひを受くる事を作れり。出處は湖海新聞に。安成彭元功築二庵於山中一。使二一奴守レ之。一日暮時有二婦人一求レ宿。自稱二小水人一。奴固拒レ之。婦人入二奴臥室中一不レ去。奴推レ之。衣中又登二奴榻一。奴舉而擲レ之。輕女二一葉一。奴燭取二佛手一執レ之。婦人笑云。汝謂レ畏レ經耶。天將レ明。庵有二神鋸一。起擊レ之。婦人云。莫レ打々々。打得人頭碎。遂去。奴趁出門觀レ所レ向。入二松林間一忽不レ見。蓋林中芭蕉叢生也。奴躋見レ壁。有二五言詩一。意婦人芭蕉精也。云々。とあり。之を本とし奴を僧にかへなどして作れるなるべし。

シテ　小野小町
子方　帝王
ツレ　大伴黑主
狂言　同從者

處ハ　京都

小野小町は内裏の御歌會に差し出だすべき歌を吟じ居たりしに。大伴黑主これを立聞して我萬葉集に書き入れおき。當日持參して小野の歌を古歌なりと強ひんにせしが。事あらはれて面白なさに自殺せんとす。小町は之をとゞめて遂に目出度く御前に舞を奏する事を作れり。世人は此謠を批難して。小町貫之などが同席するも時代に合はず。黑主の自殺せんとするなど當時の事實にあるべき事ならんやと云へり。此論もとより然り。去れども謠は作者時代の人心を喜ばせんが爲めに過去の事實を借り用ひたるものなれば。左樣に正史や何かのやうに拘はるまじきが作者の精神なり。競爭の極度は死を以てするが作者時代人情なり。謠は謠として見るべし活歴史活處などの流行語は適用せざらん事こそ望ましけれ。ある世の謠を評し能を論ずるもの拘はるを知つて作者の精神を知るはなし。嘆かはしきか

菊月　山かづら明けゆく庭の。
翁草　時しりがほに白菊の。
礎　月のいろ風のけしき。　げにやいつはりの。
玉葛　人や見ゆらん身のほども。
　河おと聞えて里ついき。
通盛　うきながら心のすこし。
菊慈童　靈山の妙法。
梢秋　長月の末野の眞葛。
小督　秋や恨むる戀やうき。
宮城野　秋風ぞ吹く白川や。
藤袴　秋風にほころびぬらし。
源氏供養　げにやあしたも秋の光。
定家　庭もまがきもそれとなく。
花筐　松も千年の緑にて。
六浦　空さだめなき村しぐれ。
逆鉾　すぐに御蔭もみぢ葉の。
錦木　機織松虫まり〳〵す。
松虫　盃にむかへば色も猶まさりぐさ。

姨捨　今とても慰めかねつ。
大江山　さてお着は何々ぞ。
融　雪とのみつもりぞきぬる。
野宮　秋の花みなおとろへて。
七人猩々　秋の夜しばし明くるなと。
松風　みつしほの夜の車に。
殺生石　ものすさしき私風の。
井筒　迷をも照らさせ給ふ。
道明寺　神さぶる松は十かへり。
紅葉狩　下もみぢ夜のまの露や。一河のながれを汲む酒を。
三輪　秋さむき窓の内。
芭蕉　見ぬ色の深きや法の。
阿漕　ものゝ名も處によりてかはりけり。
卒都婆小町　月もろともに出でゝゆく。
金札　青によし奈良の葉守の。
露　白玉か何ぞと人の。
鵜羽　萱きのこせ〳〵。
善知鳥　月のためにはそとの濱。

な。

烏帽子折

前シテ　烏帽子屋亭主
ツレ　同妻
子方　手若丸
ワキ　三條の吉次
ツレ　弟吉六
後シテ　熊坂長範
ツレ（多人數）　手下ども
處ハ　前ハ近江　後ハ奥濃

牛若は鞍馬寺にありけるが。陸奥の左藤代に依りて大望を果たさんと思ひ立ち。寺を拔け出で三條の吉次に伴はれて下る道の事を作れり。前段は寺よりの追手を恐れて姿を變へん爲めに元服するより。悦奮感慨の物語に及びてあはれなるを主とし。後段は吉次の金銀を奪はんと打ち入る盜賊を牛若一人して打ちほろぼし。出世の門出に先づ武勇をあらはして壯快かぎりなきを主とす。前後相映じて變化あり。味ふべし。

項羽　家づとなれば色々の。

冬の部

大社　神の代を思ひ出雲の。
定家　庭もまがきもそれとなく。
三笑　頃もはや霜降月の。
龍田　氷にも中たゆる名の。
賢城　しもとを集め柴をたき。
竹雪　いつを吳山にあらねども。
鉢木　それは雨の木陰。　さて松はさしもげに。
昭君　涙の露の月のかげ。
阿古屋松　げにや雪ふりて。
江口　江錦繡の山。
戀松原　げにや花ならば。
雪山　はらはじ拂はで。
和布刈　春の野にいでゝ摘む若菜。

祝言の部

高砂　ところは高砂の。（年賀）　四海なみ靜にて。
難波　難波津にさくやこの花。一花ひらくれば。（婚姻移徙）

白髭

前シテ　漁翁
ツレ　漁夫
後シテ　白髭明神
ワキ　勅使
處ハ　近江

江州比良山の麓なる白髭明神の緣起を作れり。クリよりクセまでは。太平記の文を本としてつゞけたり。

三笑

シテ　惠遠禪師
ツレ　陶淵明
同　陸修靜
處ハ　唐土

謂はゆる虎溪三笑の古事を作れるなり。出處は高僧傳に。晉の義　の間。僧惠遠廬山に居り。劉の遺民等十八賢と同じく淨土を修す。書を以て陶淵明を招く。淵明曰く。若し飲酒を許さば即ち往かんと。師之を許す。遂にいたる。既にし酒てなし。

志賀　都鄙圓滿の雲の下。
吉野　かゝるながめは盡きぬ世の。（婚姻）
奥奈井原　おのづから四海の波も。
放生川　枝をならさぬ松の風。（神祇）
老松　松が根の岩間をつたふ。　花も千代までの。
羽衣　風むかふ。　緑は波に。
若葉松　神まつる今日新玉の。（賀）
立春松　春立つや尾上の松の。（賀。婚姻）
西王母　三千年になるてふ桃の。（賀）
皷瀧　十かへりの花を含むや。（賀）
松竹　春毎に君をいはふや。（移徙）
胡蝶　こてふの舞人いろ〳〵の。
采女　運ぶ歩みの數よりも。
嵐山　千本の花の種うゑて。
三月三日　桃の花さくや彌生の。
藤波　いく春の花の盛を。
佐保山　玉かづら來る年の緒の。　萬歳を呼ばふ三笠山。
羅生門　くもりなき君の御かげは。

陶拱眉して去る。と見え。また廬山記に惠遠は廬山の東林寺に居り。客を送つて溪を過ぎず。一日陶淵明道士陸淨修（陸修靜の事）と共に話し。覺えず之を踰ゆ。虎すなはちしば〳〵鳴く。三人大笑して別る。後三笑亭を建つ。と見えたり。

竹雪

シテ　賀母
ツレ（姫）　姉
子方　月若
ワキ　父
狂言　繼母
同（男）　從者
處ハ　越後

直井月若と云ふ小年。父の留守に繼母より命ぜられたる。苦役に堪へかぬ。遂に雪中に斃れたるを。實母尋ね來て歎くさまを作れるなり。

前シテ　棄捨
後シテ　里女
姨

春日龍神　御法の花も八重櫻の。
葛城　よしや吉野の山かづら。（門出。酒宴）
白鬚　花さそふ比良の山風。
比良　かはらぬや神の宮居は。
氷室　かはらぬや氷室の山の。
藤　盛久しき藤なみの。

（以上春の季）

加茂　組む誓は此神に。（神祇）
みさを　夏草の事しげくとも。
源太夫　時は三伏の夏の日の。
加茂物狂　花やかなりし春すぎて。
菖蒲　君が代に引きこそ初むれ。
氷室　袖ひぢて結びし水の。（六月一日）
水無月祓　みな月のなごしのはらひ。（六月晦日）

（以上夏の季）

弓八幡　松たかき。（神祇）
七夕　秋さり衣たがためぞ。（七夕）
東方朔　秋きぬと目に見ぬ空は。

ワキ　旅僧
處ハ　信濃

姨捨山にて昔物語の老女に逢へる事を作れり。それは大和物語を本とせしなれば。先づ其本文を節略して示すべし。曰く。信濃の國更科と云ふ所に男住みけり。若き時に親死にければ。叔母なん親の如くに相添ひて有るに。此妻の心いとこゝろうき事多くて。此姑の老いかゝまりぬたるを常に憎みつゝ。男にも此叔母の御心のさがなき事を云ひ聞かせれば。疎かなる事多く此叔母の爲めになりゆきけり。此叔母いたう老いて二重にて居たり。之を猶此嫁ところせがりて。今まで死なぬ事と思ひて。深き山に捨て給へよとのみせめければ。月のいと明き夜。高き山の横の下り來べくもあらぬに置きて。逃げて歸ぬ。家に來て思ひ居るに。年頃親のごと養ひつゝ相添ひにければ。いと悲しく覺えけり。此山の上よりもいと明くて出でたるをながめく。さて一夜いも寐ら

道明寺　神さぶる松は十かへり。（神祇）
七人猩々　秋の夜しばし明くるなと。（酒宴）
金札　あをによし奈良の葉もりの。
鵜羽　ふきのこせ〳〵。
菊月　山かづら明けゆく庭の。
翁草　時しりがほに白菊の。
礎　げにや僞の。
菊慈童　靈山の妙法。
花籠　よろづよの惠みも久し。
龍田　山も動ぜず海邊も。
逆鉾　すぐにみかげもみち葉の。（神祇）
女郎花　三千世界も目の前に。
九月九日　ほの〳〵と明けゆく庭の。
松尾　春見しは花の都の。

（以上秋の季）

大社　神の代を思ひ出雲の。
難波　雪は豐年の貢物。
鉢木　さて松はさしもげに。

れず。悲しく覺えければかくよみたりける。わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て。とよみてなん又いきて迎へもて來にける。それより後なん姨捨山といひける。とあり。

紫上

前シテ　老翁
ツレ　老女
同　藤原師長
後シテ　村上天皇
ツレ（謡ナシ）　龍神
ワキ　師長從者
處ハ　摂津

藤原師長琵琶の秘曲を授からんため入唐せんとせしを。村上天皇梨壺女御と共にあらはれて之をとゞめ。師長に獅子丸の琵琶を賜はりて秘曲を奏し舞ひ給ふ事を作れり。

弓八幡

前シテ　老翁
ツレ　男

戀松原　げにや花ならば。
雪山　我衣手にふる雪を。
阿古屋松　げにや雪ふりて。（賀）
神在月　いく世とも限はいさや。
羽衣　げに雪をめぐらす。
和布刈　春の野にいでゝつむ若菜。
歳暮　たのしみの民のかまどはにぎはひて。
（以上冬の季）
高砂　正木のかづら永き代の。（婚姻）
浦島　契り結ぶの神こゝに。（同）
玉井　長き命を汲みて知る。（同）
貴船　こゝに貴船の宮柱。（同）
菊刈　然れば目に見えぬ。（同）
佐保山　のどけき色に染めなして。（同）
嵐になびく羽衣の。（同）
邯鄲　花の袂をひるがへして。（同）
吉野琴　月の花かつら。（同）
駒乘　時めくや采女のきぬの。（同）

後シテ　高良明神
ワキ　陪從
處ハ　山城

男山八幡宮の御神事に勅使參りて神託を得る事を作れり。八幡は弓矢の守護神なれば弓矢の矢の字を八の字につゝけて云ふ。

項羽

前シテ　老翁
後シテ　項羽
ツレ　虞氏
ワキ　草刈
處ハ　唐土

楚を項羽が末路のさまを幽靈の物語にして作れるなり。

源氏供養

前シテ　里女
後シテ　紫式部
ワキ　安居院法印
ツレ　從僧
處ハ　近江

不老松　緑のかげも光ます。（同）
大蛇　そのまゝ治まる國の神。（同）
皇帝　ことぶきなれや此ちぎり。（同）
蘆刈　世々にあまぬき花色の。
弓八幡　洛陽の南の山高み。　治まる御代に立ちかへり。
吳服　けしき立つなり雲鳥の。　綾の錦の唐衣。
西王母　かゝるためしは喜見城。　ひろき敎への誠ある。
嵐山　千本の花の種うゑて。
富士山　西天唐土扶桑にも。
養老　長生の家にこそ。　げにや玉水の。
晉の七賢が樂しみ。　袖ひちて結ふ手の。
岩舟　民ゆたかなる樂しみを。　神と君とはゆきあひの。
護法　うけられ申す神心。（神祇）
大世太子　賓を受くる民のかず。
蟻通　中にも貴之は。
和布刈　開けし神代の如くにて。（神祇）
現在鵜　萬代のためしにも引く。
小鍛冶　たゝたのめ此君の。

安居院法印石山寺に參詣するとて紫式部の幽靈に逢ひ。其依頼によりて源氏物語の供養する事を作れり。是は此物語につき當時いろ〳〵の妄想説ありし結果として出で來れる。卷の名づくしの表白を本として前後を作り添へたるなれば。先づ其本文をあげて文句の異同をも知らしめ。次に妄想説の一端を示して。此作の因つて來れるところを合點せしむべし。

表白に曰く。相壺の夕べの煙すみやかに法性の空に至り。箒木の夜の言の葉は遂に覺樹の花を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて夕顔の露の命を觀じ。若紫の雲の迎へを得て未摘花の臺に座せしめん。紅葉賀の秋の夕べには落葉をのぞみて有爲をかなしび。花の宴の春の朝には飛花を觀じて無常をさとらん。たま〳〵佛教に奚なり。柳葉のさして淨殺を願ふべし。花散里に心をとゞむとへいども愛別離苦の理りを免かるゝ倒なし。だゝすべからくは生死流浪の須磨の浦を出でゝ。四智圓明の明石の浦に身をづくし。關屋の行きあふ道をのがれて。般若の清きみぎりに趣き。逢生の草むらをわけて菩薩の賊の道を尋ねん。何ぞ彌陀の尊容をうつして繪合にして。松風に業障の薄雲を掃はざらん。生老病死の身朝顔の日影を待たんほどなり。老少不定の境少女子が玉葛かけても猶たのみかたし。谷うち出づる鶯の初音も何かめづらしからん。鳧鴈鶯鷰のさへづりには如かじ。籬にたはるゝ胡蝶の唯しばらくの樂しみなり。天人聖衆の遊びを思ひやれ。澤の螢のくゆる思ひ常夏なりといへども。忽に智慧の篝火に引きかへて野分の風に消ゆる事なく。如來覺王の御幸に伴なひて慈悲忍辱の鎧袴を着。上品蓮臺に心をかけて七寶莊嚴の眞木柱のもとに至らん。梅枝の匂ひに心をとゞむる事なくて淨土の藤のうら葉もて遊ぶべし。かの仙洞千年の給仕には若菜を摘みて世尊に供養せしかば成佛得道の因となりき。夏衣立居に如何して一

布留　國家をまもりの御誓。

（以上雜）

神に手向の分

松尾　久しき國に跡垂れて。

大社　何くにか神の宿らぬ。

道明寺　ありがたし〳〵。

諏訪　君は代は千代に八千代を。

眞名井原　祈らずも心の水の。

佛に法樂追福の分

大般若　惡事惡魔は萬里に退き。

博多物狂　一念稱名の力にて。

大會　鷲の御山を移すなる、

弱法師　濟度の舟をもよするなる。

身延　正直捨方便無上の道に。

水無瀨　紫雲たなびき音樂きこえて。

加茂　年の矢の早くも過ぐる。

百萬　彌陀たのむ人は雨夜の。

芭蕉　燈をそむけて向ふ。　されば柳は絲。

一切衆生ことゝ〳〵く。

迷をも照らさせ給ふ。

井筒　月雪の古き寺井は。

舍利　げにや安樂世界より。

田村　己身の彌陀如來。

柏崎　此界一人念佛名。

遊行柳　枅木の柳は絲をなし。

花月　一念稱名の力にて。

博多物狂　向は文珠の淨土にて。

石橋　月はくまなき春の夜の。

泣不動　まことに妙なる此教。

誓願寺　あらゆる諸佛の。

嚴島　知る人も知らぬ人をも。

實盛　飛花落葉のらんぶうまで。

高野物狂　砂を塔と重ねて。

卒都婆小町　菩薩もこゝに來迎す。

葵上　願のまゝにやす〳〵と。

藤戸　たゞ西方に迎へゆく。

當麻

鳥屋野

枝の柏木を給ひ。妙法の薪となして無始
曠劫の罪を滅し。本有常住の風光かゝやかして聖衆音樂の横笛を聞かん。恨めしきかなや。家を出で名を捨つるみぎりには鈴虫の聲ふりすてがたし。道に入り飾をおろす所には夕霧のむせび晴れがたし。悲しきかなや。人間に生を受けながら。御法の道を知らずして苦界に沈み。幻の世を厭はずして世路を營まんこと。如かじただ蕭大將の香をあらためて青蓮の花房に思を染め。匂ふ兵部卿の匂をひるがへしては香の煙の裝ひとなし。竹川の木を結びては煩惱の身をすゝぎ。紅梅の色をうつして愛着の心を失ふべし。待宵の更くるを嘆きけん宇治の橋姫に至るまで。優婆塞が行ふ道をしるべして椎が本にとどまる事なかれ。北邙の野邊の淡雪と消えん夕べには解脫の總角を結び。東岱の山の早蕨と上らん朝には栴檀の陰に宿木とならん。官位を東屋の内にのがれて樂しみ榮えを浮舟にたとへ光と共に白妙の。

江口

豐干

菩薩も獅子象に。

船橋

其如法身の玉橋の。

但し是は僅に例を擧げたるのみ。決して是のみに止まるべきにはあらず。よく〳〵折を見さだめ文句を考へ合はせて工夫すべしと。古人の敎なり。先年何がし伯の邸に行幸ありて能の天覽あらせられし時。賓生九郎に獨吟を謠ふべきよし仰下りしかば。九郎うけたまはりて舞臺に進み。

繪言なればうれしくて。

と草子洗を謠ひ出だしたるには。皆人感じ入りたりと云ふ。この心得を忘れざらんには。時に取りての興いよ〳〵添ひぬべし。この話とは似もよらぬ事なれど。先日の事なりき。或る地方の架橋工事に赴く工學士の送別會に。謠一つうたひてと言はれしば。ふと思ひ出だしたるまゝに。

頃も春なり川風の。花ふきわたせ船橋の。法にゆきゝの。道作り給へ山伏。峰々めぐり給ふとも。渡りを通らでは。いづくへ行かせ給ふべき。

と船橋を謠ひて。喝采を博したる事もありき。

し。是もかげろふの身なり。あるかなきかの手習にも往生極樂の文を書くべし。夢の浮橋の世なり。朝な夕なに來迎引摩を願ひ。南無西方極樂彌陀善逝。願はくは狂言綺語の誤をひるがへして紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊。かならず轉法輪の緣として之をもてあそばん人を安養淨刹に迎へ給へり」とあり。此文は即ち安居院法印聖覺の作なれば。ワキに其名をあらはしたるなり。平康頼の寶物集に。まちかく紫式部が虛言を以て源氏物語を作りたる罪により。地獄に落ちて苦慮忍びがたき故に。早く源氏物語を破りすてゝ一日經かきて。吊ふべしと。人の夢に見えたりけりとて。歌よみどもよりあひて一日經書きて供養しけるは覺え給ふらんものを。と見え。信實の今物語に。ある人の夢に。其正躰をもなき影のやうなるが見えけるを。あれ何人ぞと尋ねければ紫式部なり。空言をのみ多くしあつめて人の心を感はす故

其二　蘭曲

謠內外二百番の外に蘭曲といふものあり。謠一番の中の妙處を一段ぬきいだし。又は別に一段ぎりの文句にして。殊に節おもしろく緩急たくみに獨吟すべき曲なり。もとは足利時代に行はれたる宴曲などといふ謠物よりも出で。又は曲舞などよりも來りて。一番の能成り立ちたる後までも。存じたる古風の歌曲なりと知るべし。されば種々の曲を集めたりといふ意にて亂曲と稱へしを。亂の文字みだるゝと讀むを嫌ひて蘭の字に書きかへたるものならん。（今も金春流などにては亂曲と書く）然るに觀世流明和改正の蘭曲に序して曰く。

今此類を蘭曲といふ。そも〳〵蘭曲優曲閑曲といふは。至れる上に此三つの姿ある事にて。うたふ人を外より稱美せる詞なり。然るを俗に蘭曲をうたはんなどいふ事あるべからず。故に獨吟の曲と題せり。

と。かゝる附會の說は自尊主義の藝道には常あること。怪しむに足らず。又一名を曲舞といふは其もとを忘れずして名づけしなり。舞といへばとて。蘭曲になりたる以上は謠のみなり。拍子をさへ用ふる事あらず。

に地獄に落ちて苦をうくる事いと堪へがたし。源氏の物語の名を具して。なもあみだ佛といふを卷毎に人々によませて。わが苦しみを吊らひ給へといひければ。など見えたり。

錦木

シテ（前後）　男
ツレ（前後）　女
ワキ　旅僧

處ハ　陸奥

錦木細布のいはれを作れり。神中抄に。陸奥國のえびすは男をんなをよばはんとする時。文をやる事ばなくて。一尺ばかりなる木をまだらに色どりて其女の家に立つるに。逢はんと思ふ男なれば其錦木を程なく取り入れつ。遲く取り入るれば强ひて猶立てゝ。千束を限りに立つれば。誠に心ざしありけりとて。其時に取り入れて逢ふと云へり。など見ゆるに本づきたる物語なるべし。

大會

今現に用ひらるゝ曲は左の如し。

觀世流

上の卷

玉取　近江八景　和國
四季　皷瀬　香椎
定家一字題　實方　高野物狂

中の卷

内府　經山寺　阿古屋松
上宮太子　反魂香　松浦物狂
博多物狂　更科　笠取
蛙

下の卷

島廻　加茂物狂　美人揃
妻戸　隱岐院　山百物狂
横山　五輪碎　島飛川
倶利加羅落

三曲

初瀬六代　東國下　西國下

前シテ　客僧
後シテ　天狗
ツレ　帝釋天
ワキ　山僧
處ハ　山城

山僧に危き命を救はれたる天狗。その恩返しに釋迦如來說法の有樣を魔術もてして見する事を作れり。出處は十訓抄に。後冷泉院の御時。比叡山西塔の僧みやこに出でゝ歸るさに。東北院の大路に童部五六人あつまり。老いたる鷲を縛りて羽を拔かんと云ふ。彼僧いとふびんに思ひ。持たる扇に替へて鷲を助けてゆきぬ。其先の道のかたはらなる鍛より法師出でゝ。只今は御憐みにより命たすかり添しと云ふ。僧覺えずと云へば法師の云ふ。東北院あたりにての事なり。思ひあたり給ふべしと云ふ。其時天狗と知りぬ。其者いふやう。何にても望あらば叶へんと。僧の云ふ。我七十になりて更に望みなし。但し世尊の御說法の躰を見せ侍る事なる

實生流

口の分

八景　一字題　實方
飛鳥川　土車　玉島
玉取　雪月花　松浦物狂
上宮太子　鶴龜曲

奥の分

横山　島廻　卒都婆流
西濱八景

金春流

亂曲

上宮太子　御裝束　吉野　山家秋
一字題　歌占　太刀堀　母衣
島廻　香椎　玉取　皷瀬
碁　菊露　曙　隱岐院
東國下上　同下　西國下上　同下
富士山

獨吟

べきかと云へば我小道の通を得たり。やすき御事なり。しばらく目をふさぎ佛の御聲きこゆる時目を開き給へ。かまへて貴く思ひ給ふなと云ひて。峯へ上ると思へば說法聞えたり。山はすなはち靈山となり。地は又瑠璃となる。七重の寶樹あり如來獅子にまします。佛弟子天龍八部微妙の音樂を奏す。其時おぼえず合掌しければ。護法天童あまくだり給ひかほどの僧をいかでかやうにはたぶらかすと云ひて殘らず追ひ散らし給ふ。と見ゆ。

前シテ　老翁
後シテ　鐘馗
ツレ　楊貴妃
同　鬼神
ワキ　玄宗皇帝
ツレ　大臣
處ハ　唐土

玄宗皇帝の寵愛たゝならざりし楊貴妃の病を。鍾馗大臣の亡靈明王鏡に姿をうつして退治する事を作れり。

春榮

シテ　增尾種直
トモ　從者
子方　增尾春榮丸
ワキ　高橋權頭
狂言　從者
處ハ　伊豆

增尾春榮丸と云ふ少年。敵の囚はれとなりて高橋權頭にあづけられあたるを。兄の種直たづね來て弟の身代りに殺されんと云ふ。春榮いづくまでも弟たる事を隱さんとすれど。事つひに破れせんかたなく兄弟共に首座に直りし處に。鎌倉より早打來て赦免せられしかば。春榮は目出度く高橋の養子になる事を作れり。但し此合戰ならびに兄弟の出處は未だ見あたらず。

簡太皷

シテ　關清次妻
ワキ　松浦某

雪月花　奈良八景　起請文　兵揃
六源　阿古屋松　飛鳥川　近江八景
同　花形見　須磨源氏　舞車
蟬丸　鳥追船　蟻通

金剛流
七闌曲
樓葉（淡路の曲）　香椎　上宮太子
島廻　隱岐院　東國下
西國下
七曲舞
五輪碎　須磨源氏　美人揃
舞車　兵揃　太刀堀
那須
曲舞
實方　一宇題　玉取
皷瀧　横山　阿古屋松
長谷　弱法師　山良物狂

卒都婆流　博多物狂　松浦物狂
敎訓　加茂物狂　飛鳥川
身延　落葉　高野物狂

喜多流
七曲舞
淡路　香椎　島廻
上宮太子　隱岐院　東國下
西國下
曲舞謠
母衣　太刀堀　松浦物狂
加茂物狂　由良物狂　蘇武
泊瀨六代　玉執　六元
飛鳥川　雪月花　舞車
經山寺　花筐　横山
土車　徒然　當願幕當
現在經政　弓箭立合

また今は用ひざれど。觀世流明和改正本に撰びたる曲の目錄を擧ぐれば左の如し。

狂言　從者
處ハ　肥前

牢を破りし夫の行方を白狀せぬとて妻まで入牢させられしに。狂氣になりて皷を打ちくるふがあはれなればとて。遂に夫婦ともに赦免せらるゝ事を作れり。牢太皷と云ふべきなれども。牢の文字が不吉なるを忌みて籠の文字に書き替ふる事謠の常なり。まに意を取りて弄太皷とも書きたり。

シテ　一角仙人
シレ　一角仙人　施陀夫人
同　龍神
ワキ　宮人
處ハ　天竺

一角仙人と云ふもの美人の酌に心を亂して神通を失ひ。我岩屋に封じこめおきたる龍神どもを遂に取りにがす事を作れり。

自然居士

シテ　自然居士
子方（謠なし）　女兒
ワキ　人商人
ツレ　同
狂言　里人
處ハ　山城近江

自然居士が説法の場に飆師を上げに來れる女兒あり。やがて無情にも人商人に連れゆかれせしを。種々の耻を忍び力を盡して居士遂に助けかへす事を作れり。

放生川

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　武内の神靈
ワキ　鹿島神職
處ハ　山城

男山の放生會に參詣して奇特に逢ふ事を作れり。放生會は神社考に。石清水の放生會は八月十五日に至るまで。人を諸處に遣はして數方喉の魚を買ひて之を山下の小川に放つ。十五日の早朝其供養の爲

卷第一
不盡　豐宴　敏馬浦
芳野　祭神　好可來
所[illegible]　深江石　香　菓

卷第二
玉取　近江八景　和國
四季　皷瀧　香椎
一字題　眞方　蛙

卷第三
重盛　兵[illegible]　經山寺
島廻　八雲　上宮太子
反魂香　砥並山　倶梨伽羅落
笠取

卷第四
美人揃　妻戸　當願碁頭
鳥羽殿　隱岐院　星
由良湊　佐夜中山　更科
横山　博多物狂　五輪碎

卷第五
西國下　東國下　泊瀬六代

卷第六
生田川　薬水　外濱風
法樂　松竹　葛袴
浦下部　照日宮　雪山
寂光院　飛火　橘柱
自然物狂　賢女鏡

卷第七
青春　三元　人日
桃花節　上巳　三月盡
朱夏　更衣　泛浦節
端午　夏祓　素秋
羅綺節　乞巧夕　星夕
中秋節　三五夕　陽數節
重陽　九月十三夜　九月盡
玄冬　初雪　歲暮
歌人意

めに神輿山下に降る。祠官衣服を粧ひ伶人伎樂を奏す。供奉甚嚴なりとあり。前にあげたる月八幡と關係おほしくらべ見るべし。

生田敦盛

シテ　平敦盛
子方　同遺子
ワキ　法然上人の從者
處ハ　前ハ山城　後ハ攝津

敦盛の遺子法然上人に襲はれゐたりしが。其從者と共に津の國生田に至りて父の幽靈に逢ふ事を作れり。

胡蝶

前シテ　里女
後シテ　蝶の精
ワキ　旅僧
處ハ　京都

蝶は大方の花に親しむ習なるに。たゞ梅花に縁の無き事を嘆きて。法華經の功德を頼みに來れる事を作れり。

柏崎

前シテ　女
後シテ　狂言
子方　花若
ワキ　小次郎
處ハ　越後

柏崎何がしの妻は夫に別れ子に別れて。哀しみの餘り狂氣せしが。遂に善光寺にて廻り逢ふ事を作れり。

通小町

シテ　深草少將
ツレ　小野小町
ワキ　僧
處ハ　山城

深草の少將と云ふ人。小野小町がもとへ百夜通ひし物語を作れり。歌論議と云ふ書に。昔あやにくなる女をよばふ男ありけり。(男)心ざしあるよしを云ひければ女(男)を試みんと思ひて。常に來て物いひける處に榻を立てて。是が上にしき(重ね)て百夜臥したらん時に。言はん事は明かんと云ひければ。男やすき事なりと

卷第八

習三謠物

勸進帳　起請文　願書

右の內卷第一は皆萬葉集中の古歌に節附したるなり

右示したる曲の外。古板の蘭曲集に見えたるもの猶多し。何れも皆節博士さだまりて古は謠ひたる曲なれば。後人の參考にもとて。うるさきも忘れて又々其曲目を示さんとす。

歌占　山本小町　小徒從　丹後物狂　綾鼓
祇王　流　鶯鶯　北野物狂　唐王代記
日本王代記　武王　人丸　豐干　鬱
胡蝶　吉野琴　不斷櫻　地主　濡衣
座敷飾　乙平　名香　枕士童　石橋
菊士童　箱崎物狂　高雄　橫笛　北山
總角　丁固松　粉川寺　長柄　白路
陀羅尼落葉　內海　墨染櫻　一枚起請　碁
議法　高安　炭燒　水無月祓　末松山
室君　信夫　先帝　大內裏　風草
撰集　白髭　二人神子　敷路物狂　雪

俊成忠度　思婁　厭諭　元服曾我　龍
仲遠　碇被　昭君　虎送　伏木曾我
雪鬼　望月　濱川　大蛇　弱法師

とかく從來の仕來りに安んじて。材料の豐富ならん事を望まざるは斯道專門家の惡癖。されども世の聽衆は。既に同じものばかり聞くに飽かんとしつゝあれば。ひろく古を探りて。絕えたる作をも出だし。廢れたる曲をも興さんことこそ望ましけれ。或る流儀にては近來やう〳〵番數も增しかんとするに。他の流儀にては成るべく番數を減らさんとするさへ有りといふ。斯道のため喜ばしき事にはあらざるべし。

其三　謠の心得

謠をうたふには。式作法その他すべての心得なかるべからず。是等の事は師より傳受すべき事なれば。今いふべき限にもあらず。又其道の達人ならぬ余が强ひて言ふ事好まぬ事なれども。古人の言ひおきたる事を古書より拔抄して示さんは。無益にもあらざるべし。今日の世の中は。とかく習慣にも禮法にも何にも構はぬといふことの流行るが。一つは嘆かはしければ。差出口もちと言ひたくなるな

云ひて。雨も降れ風も吹け。暮るれば(あわて)まどひ來て其榻の上に臥しけり。榻の上に寐る夜の數を書きつけたりければ。九十九夜になりにけり。今宵ふしなば明日よりは何事も得いなみ給はじなどいひおきて出でゝ。とく暮れよかしなど思ひけるに。親の俄に死にければ。それにさはりてといまりにけり。其時女の元より此歌をよみておこせたりける。曉のしぢのはしがき百夜がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく。とあるより來れり。

當麻

前シテ　化尼
ツレ　化女
後シテ　中將姫
ワキ　旅僧
處ハ　大和

有名なる當麻曼陀羅の起りを當寺の緣起に依りて作りたり。緣起に曰く。天平寶字年中。右大臣豐成の女中將姫この寺に入つて尼となり一心に佛道に趣き。われ

り。

隨一小謠繪抄に曰く。

一まづ謠はんと思はゝ。帶をゆるめ腹の丹田氣海にて息を張り。臍にて壘を見る心持にて腹に力を入れて。口を明きてうたふべし。桃をふくみたるやうにて人を叱る如き謠ぶりは。いかにもよからざることなり。また聲の鼻へかゝれるは。音曲第一の病と知るべし。よく〳〵氣をつけ。聲の鼻へかゝらざるやうにうたふべし。

一酒宴賀席などにて。肴謠は。いかにも短き謠をうたふべし。長きは失禮なり。

一高砂の四海波を發聲する人ある時は。いつにても枚を鳴らさぬより附くべし。これ枚づけと云ふ習なり。譯は師によつて聞くべし。

一其名所にて其處の謠をうたふべからず。たとへば須磨にて松風敦盛。宇治にて頼政のたぐひなり。餘は押して知るべし。

一貴人小謠御發聲の時は。そと御面を誰るべし。此方に向はせ給ふ時。引き取りて附け申す事。候ずる人の心得あるべし。

一舟にては小謠にても堅く謠ふべからず。

異の彌陀を拜まずんば寺を出づまじと誓ふ。ある時一人の比丘來り語つて云はく。われ汝が爲めに彌陀如來を拜ましめん。すべからく百駄の蓮莖を集むべしと。中將尼帝へ奏し給へば。詔して蓮莖を送らしむ。其時化尼みづから莖を折り糸を取て新井を穿つて之を濯ぐ。五色燦然たり。其後又一人の女來り化尼に問うて曰く。糸は成るや。答へて曰く成れり。化女糸を得て殿の西北の角に於て之を織る。初更より初めて四更に成就す。其幅一丈五尺。蓮三把を以て油二升に浸して燭と爲す。化女は化尼に捧げ授く。化尼は中將尼に與ふ。淨土の衆相悉く備はれり。中將尼大きに悅び節無き竹を求めて軸と爲す。而して後化女忽然と見えず。化尼倡を作り圖を禮して曰く。住昔迦葉說法のところ。佛事新に起る又故あり。君が懇志を感じて我こゝに來れり。一たび道場に至らば永く苦を離れんと。中將尼問うて曰く。善哉知識いづくより來り給ふぞ。

一人の謠に付く時は。我うたひを立てずして人に隨ひそうて。先の聲を育てゝ付くべし。

また觀世小謠萬世樂に曰く。

祝言。賀宴。送別等。すべて燕席にて諷ふべき謠を心掛けて。所望の時は滯なく諷ふこと專一にて。其席の忌詞去嫌をよく考へ。目出度き音聲にて諷ふべし。春ならば春の季の詞ある祝言秋ならば秋の季ある謠を。何にても祝言にうたふべし。祝言といふは目出度き詞ある謠を。心正しく少しも邪なく。强吟を輕く物を略せず諷ふを。祝言といへり。もし不意に諷を望まるゝに當つては。時の季の詞ふと心に浮み出でざる時は。雜の祝言の謠を。何にても心に思ひ出でゝ諷ふべし。祝言の小謠ありて後は。何にても苦しからずといへり。されば其心をよめる歌。

うたはんに先づ祝言を專に
さてその後は戀慕哀傷

○序より諷ふ小謠は。必とまりを返して諷ふべし。小謠に返しなきは祝言にあらずといへり。數多うたふ時は返さずともうべなり。

○小謠を最初に諷ふには。上歌とある謠より謠ひ初むべし。二

又先の女は誰とかいふ。答へて曰く。我は西方の教主なり。先の女は觀音大士なりと。言ひをはつて空を凌ぎて西の方に去り給ふ。中將尼これより精修ます〳〵つとむ。寶龜六年三月十四日安座念佛して終り給ふ年二十九。とあり。

調伏曾我

前シテ　工藤祐經
ツレ　源頼朝
同　從者
子方　箱王
ワキ　箱根別當
ツレ　從僧
處ハ　相摸

前は曾我五郎まだ箱王とて箱根の寺にありける日。親の敵工藤祐經に逢ひて打ちかゝらんとせしを。別當にとめられて泣く〳〵思ひ止まる事を作り。後は別當の祈によりて不動明王現はれ。祐經の形代を首おとし給ふ事を作れり。前は曾我物語に依り。後は作者の趣向を知るべし。

番目よりは。上歌なりとも下歌なりとも。心の欲するまゝに謠ふべし。又强吟よりうたひはじめ。和吟よりはじむべからず。下歌より初むべからずとは。たとへば高砂の如き目出度きものなればとて。

下歌おとづれは松にことゝふ浦風の。

これより初むべからず。

上歌所は高砂の。〳〵。

是より初はべし。二番目よりは苦しからず。

○祝言に序より謠ふ事あり。序より謠ふとは高砂ならば。

下歌おとづれは松にことゝふ浦風の。

これを序といふ。是より謠ふ時は。

上歌ところは高砂の。〳〵。

と返し謠ふものなり。すべて序より謠ふべし。事足らぬは祝言ならずといへり。(初め下歌を忌むは最初の時をいふ。二番目よりは。下歌なりとも序より謠ふ事をいふ。)

最初ところは高砂のと謠ひ出ださば。尾上の松も年ふりてと二行謠はせ。

老の波

より付くべし。二番目より常の如く付くべし。追善は和吟より謠ひ初むべし。

○人の小謠を謠ひ出すに同音を付くる事。二行目或は三行目より付くる事あり。思ひがけなき所より付くるは見苦し。心得あるべき事なり。返しあるものは返しより付くるべし。返しなきは三行目より付くるが大概なり。短き謠は二行目より付くべし。老人には早く付け。若き人聲よき人ならば。少しおくれて付くべし。我謠を立てず人に隨うて。先の聲を育つべし。返しより付くるとは。

高砂や此浦舟に帆をあげて。〳〵。

此。印の返しより付くべし。

○小謠の時。一番謠の内。後の小謠をうたひし後に引き續いて。又前の小謠を謠ふべからず。たとへば。

高砂の尾上の鐘のおとすなり。

此所を謠ひたるあとへ。

四海波靜にて。國もをさまる時つ風。

前の謠を後に謠ふべからず。去りながら是は數番小謠ありて後。又は前の謠を出だす事もあり。座席の見はからひによるべし。

元服曾我

シテ　曾我十郎祐成
トモ　團三郎
子方　箱王
ワキ　箱根別當
狂言　能力
處ハ　相摸

箱王は箱根別當の許にて出家にせられんとせしを。兄の十郎に連れ出だされ。道にて元服する事を作れり。曾我物語には。師にならんとする前日。箱根を抜け出でゝ兄の許に至りかくと告げしかば。相伴なひて北條時政の家に行き。それを頼みて元服し。名を五郎時致と付けられたる由に記せり。

合浦

前シテ　童子
後シテ　鮫人
ワキ　里人
處ハ　唐土

合浦の王と鮫人の王との古事を取り合は

せて作れるなり。槃求に。後漢の孟嘗合浦の太守に遷る。郡穀實産せずして海珠寶を出だす。交趾と境を比べ常に商販を通じ粮食を貿糴す。先時の宰守ならびに多く貪穢にして。人を責めて採り求め紀極を知らず。珠やうやく交趾の郡界にうつり。行旅至らず人物資なく貧者は道に餓死す。嘗官に到りてより前弊を革め易へ。民の病(苦)利(益)を求めしかば。未だ歳を踰えずして去りし珠また還り。百姓業に反り商貨流通す。稱して神明と爲す。と見え。呉都賦に。俗に傳ふ。鮫人水中より出で。曾て人家に寄寓して積日風を賣る。鮫人去るに臨みて主人に器をもとめ。泣いて珠を出だして盤を滿たす。と見えたり。

龍田

前シテ　女　龍田姫
後シテ　ワキ　旅僧　大和
處ハ

先づ此心得あるべし。

○貴人高位の御前にて小謡諷ふには。先づ發聲一番に諷ふ人は初の一句は平伏して諷ふべし。美聲を慢じすぐれて調子を高く諷ふべからず。或は目を閉ぢ。又は空目を使ひ。又は人の顔を見。頭をふり。のけぞりになり。手ずさみして謡ふ事。初心に多くあるものなり。心得て忌むべし。

○昔高砂の小謡に。君の惠ぞありがたきと諷ひし人あり。今太平の御代に生れあひて有難き思をなし。慎み諷ふべき事といへり。去れども時宜による事なり。餘り謙遜に過ぐる時は。阿僻になりて宜しからず。

○酒宴の席にて看謡とて。客の盃を下に置きたる時。短き小謡を諷ふべし。長き謡は客の拍子を扳くものなり。

○小謡は隨分耳近く。能人も付けやすき謡を諷ふべし。遠き小謡はたまゝ〳〵うたうて興あれども。ひたと諷へばおのれぶりて宜しからず。

○番謡を宙に覺えずとも。小謡は數番そらにおぼえおくべき事なり。小謡は時にとりて用の事おほし。先づ音聲に甲乙吉凶あり。其大概を謂はんに。聲高く張り上げ浮調子なる。或は口先

龍田の社の由來と神德とを述ぶる爲めに作り。そも〳〵龍田明神は男女二躰にて龍田彦龍田姫と名づけ。風をつかさどり給ふ神なるを。奈良の都の頃。春は東より來ると云ふによりて。其東山に鎮座し給ふ佐保姫を春の神とし。其西山に祭られ給ふ龍田姫を秋の神と申し習はしたり秋は紅葉の時節なれば。又紅葉をつかさどり給ふやうにも云へるなり。

兼平

前シテ　舟人　今井兼平
後シテ　ツレ　旅僧　近江
處ハ

今井の四郎兼平は木曾義仲の宗徒の郎等なりしが。粟津原の合戦敗れしかば。君の御供して討死せし物語を作れり。例の平家物語盛衰等を本文とす。

誓願寺

前シテ　里女
後シテ　和泉式部

ワキ　一遍上人
處ハ　京都
一遍上人熊野權現の御示現により誓願寺にて御札をひろめらるゝ時。和泉式部の幽靈あらはれて額の文字を書きかへ給へと請ふ事を。當寺の緣起に本づきて作れり。

葵上

シテ（前後）　六條御息所生靈
ツレ　神子
ワキ　横川小聖（山伏）
ツレ　大臣
狂言　從者
處ハ　京都
源氏物語葵の卷に。光源氏の北の方葵の上が物の氣にて惱み給ふ事あり。其物のは姨姻の生靈にて。實は光源氏に恨ある六條御息所の怨念なるよしに。昔より註し來りたれば。此謠もそれによりて作れるなり。

禪師曾我

シテ　久上禪師
ツレ　國三郎
同　鬼王
同　曾我兄弟の母
ワキ　伊藤祐宗
ツレ　同從兵
處ハ　山ハ伊豆　後ハ越後
前は國三郎鬼王の二人。曾我兄弟の形見を母の許に屆くる事を作り。後は伊藤祐宗討手として祐成の弟久上の禪師の寺に打ち向ふ事を作れり。曾我物語には禪師武藏の國府にありける頃持佛堂にて自殺せしを。鎌倉の御使これを受け取り。腰輿にのせて參りしやうに見ゆ。

佐保山

前シテ　里女
後シテ　佐保姫
ワキ　藤原俊家
處ハ　大和
佐保山は奈良の都の東にありて。其山の神は春をつかさどるよし古來歌によみ來

息をゆるめて諷ふべし。面白き風情をひたもの諷ふべからず。たゞ疵なきやうに心得て諷ふべし。文句を輕く拍子は掛りて諷ふべし。

素謠も拍子はづれば聞きにくし
はづみ過ぐれば味ひが無し

拍子をよく會得せずんば。伸縮亂れて合はず。これは常に雨漏拍子といふを打つて合はし試むべし。拍子の事は八ツ拍子といふ書にくはしく出でたれば。是を見てよく覺ゆべし。

○まづ謠を諷はんとならば。身の搆へ正しくすべし。身躰亂るゝ時は。いかほど巧者の人たりとも。開合そろはず謠亂れて聞き苦しきものなり。

身の搆へとは。足の大拇を合はせ。臀をしつかりと戴せ。膝を廣げ。鼻と臍とを等しうし。耳と肩とを等しうし。頭を直に。眼は疊一間内を見張り。腹をゆるく張り。氣を丹田氣海にをさめて。此ところにて息を張れば。腹に力入れず口を開いて諷ふべし。さて諷はんと思ふ時。下なる扇を右の手に取り要の所を持ちて。圓の如く（圓は磬す）搆へて諷ふべし。口をくつろげば舌自由に働くなり。聲は腹より出だすべし。句切に息を吸ふべからず。口なめずりする事勿れ。口を開き過ぎ或は口を閉ぢ。又口先にて諷ふべからず。聲を舌の先にかけ。或は牙又は鼻へ響かせ。舌を卷きうなり聲にて謠ふべからず。是れ謠を諷ふ心得なり。

○同音を付くる事又前の如く。諷ひ初むる人の三行を聞き。同音を付くる時。下なる扇を取りて諷ふべし。初より扇をとりて待ち搆へたるは宜しからず。シテワキにて諷ふも猶かくの如しとへば。

高砂の浦につきにけり。〳〵。

此より扇を取て膝の上に上げ。さて我諷ふ前に扇を下にかまへて諷ふべし。扇を膝の上にあぐるは。我受取り諷ふべきを先へ知らさんが爲めなり。シテワキとも渡し留りは居ゑて諷ひ。息を早く放つべからず。次に諷ふ人の其氣を受けて諷ひ出すまで。止りの息をつめて渡すべし。渡しの所たるみては。次に諷ひ出づるに味ひを失ふなり。同音に渡すも同前なり。

これらの事を心得おかば。何かに付けて便利なるべし。但し余はこれを敎ふるの意にあらず。たゞ紹介するまでなり。知識として手引するまでなりと知るべし。

れるに依りて作れるなり。龍田とくらべ見て味ふべし。

通盛

前シテ　漁翁
ツレ　老女
後シテ　平通盛
レツ　小宰相局
ワキ　旅僧
處ハ　阿波

一谷の合戰に討死せし通盛の亡魂。小宰相の局と共にあらはれ來て昔を語り經文の功力を頼む事を作れり。小宰相の局は通盛と契り深かりし人にて。其討死の音づれを聞き阿波の海に入水して終りしと盛衰記に委しく見ゆ。其要を摘みて引くべし。曰く。越前の三位通盛は小宰相の局と申す女房をぞ相具し給ひける。かの局と申すは故刑部卿憲賢の女。上西門院の女房なり。云々。三位のさむらひに宮滝口時員と云ふものあり。一谷の合戰にうちもらされたりけるが（平家の）舟の内に參りて申しけるは。三位殿は湊川の下にて近江の國の住人佐々木の一黨木村源三成綱と云ふものが手にかゝりて討たれさせ給ひぬと。泣く泣く語り申しければ。云々。夜もやうやく更けゝれば。舟の内もはや靜まりたりけるに。小宰相の局まどのびて舟ばたに立ち出で給ひつゝ。念佛百遍ばかり申してのち。南無西方極樂世界。大慈大悲陀彌阿如來。本願あやまり給はず。別れにし三位通盛と一佛淨土の蓮葉に導き給へ。と忍び聲に祈りつゝ。漫々たる海上なれば何くを西とはわかねども。月の入るさの山の端を。そなたとばかり伏し拜み。海へぞ飛び入り給ひける。おの〳〵海に飛び入りて取り上げ奉らんとしけれども。をりしも月さへ朧にて。阿波の鳴門のくせなれば。滿汐引汐あらそひて。くゝれども〳〵見えざりけり。あひかまへて取り上げたりければ。此世にもはやなき人となり給ひにけり。とあり。

其四　謠の修行

これまた師に就きてする人は無用なるべけれど。獨學者又多き世の中なれば。古人の言ひたる事を又も告げんとす。前章の同じ書に曰く。

謠の上手下手は修行練磨にあれども。心得惡しければ不功者なり。心正しうして謠曲の大意を會得すれば。功速にして早く上達するものなり。歌に。

音曲はたゝ大竹の如くにて
直に清くて節すくなかれ

すべて功者の謠はずる〳〵と輕く。上には節なきやう聞ゆれど底に節こもり伸屈自在にて。そのさかひ耳に立たざるものなり。謠曲の大意といふは。

逢坂の關の清水に影見えて
今やひくらん望月の駒

逢坂の關の岩かど踏みならし
山たちいづる霧原の駒

この歌を以て會得すべし。先の歌は打聽何の節もなきやうなれど。數返吟ずるとも口にあたらず耳に立たずして感深く。後の歌は面白きやうなれども。數返吟ずれば口にこはくあたり。清水の歌には無下に劣りたるよし。音曲も清水の歌の如く安らかに丈高く。耳に立たぬやう有るべきなり。

○謠曲の大意は。たゝ癖なく聞きよきやうに謠はんこと肝要なり。夫れ音聲は直なるものにして。曲節直にして少しも邪なければ。人には面白く聞かせんとて無理なる事をうたへば。節訛るが故文字訛りて義理を失し。耳立ちて聞きづらきものなり。漢土には平上去入の四聲あり。我朝は中國の清き水土の國なれば。言語清く。四聲を借らずして自ら之を分てり。たとへば垣柿昇。橋端箸は。文字に書くところ皆かきはしなれども。いふところは其品を分つが如し。かゝる清淨の水土を受け得て生れながら。曲をなさんとて無理に訛る事。むげに口惜しき次第ならずや。たゝ安らかに癖なきやうに謠ふべし。謠に聲を忘れて曲を知れ。曲を忘れて拍子を知れと云へり。謠修練すれば聲はおのづから出づるものなり。聲をよく出ださんとて聲にのみ心を入るれば。しだるくなりて謠自由ならざるものなり。美聲なりとて。聲に心を入れ太く細く。或は頭を振り。浮沈おもし

祇王

シテ　佛御前
ツレ　祇王
ワキ　妹尾太郎
處ハ　京都

平相國清盛は一時に榮華を極めて祇王と云ふ白拍子を寵愛し居たりしに。また佛と云ふ白拍子出で來り。共に清盛の前にて舞ふ事を作れり。

高野物狂

シテ　高師四郎
子方　平松春滿
ワキ　高野住僧
狂言　平松從者
處ハ　前ハ山城　後ハ攝津

高師四郎と云ふ人。主君の遺命に依りて子息をもりたて居たりしが。其文を殘して出家せしに驚き。狂氣しつゝ高野山まで行方を尋ねのぼる事を作れり。

須磨源氏

前シテ　樵夫
後シテ　光源氏
ワキ　藤原興範
處ハ　攝津

須磨の浦は光源氏の暫く住まれし處なれば。其幽靈あらはれて昔を語る事を作れり。

卷絹

シテ　神子
ツレ　男
ワキ　勅使
處ハ　紀伊

都の男。勅諚の日限を違へし罪によりて縛せられしが。歌の德によりて神助を得る事を作れり。神は神子に乘り移りて繩を解き。神樂を舞ひなどし給ふなり。

關原與市

シテ　源牛若丸
トモ　從者
ワキ　關原與市
ツレ　從兵
處ハ　美濃

ろきやうに謠ふ人あれども。耳に立つて聞き飽くものなり。老人の齒脫聲かれたれども。たゞ一部の謠に心をこめてうたへば少しも聞き飽く事なく。いよ〳〵感に入るものなり。これをもて聲のみに拘はるべからざるを察すべし。

○節にのみ心を入れ。師の癖に少しも違へじと謠へば。必ず謠すくみ固くなりて聞苦し。たとへば名ある墨跡を。薄き紙にて少しも違はざるやうに摸寫にするとも。用ひられざるが如し。人の生により木金土火水の聲かはりありて同じからず。甲高き聲の人。乙たる聲の人に合はさんと聲を乙らし。或は乙たる聲の人。甲高き調子に合はさんと甲で謠へば。聲合はずして却つて其人の謠のみ耳立ちて。聞苦しきものなり。

また或書に曰く。

いかほど晴がましき席にても平氣にてうたふべし。いつも稽古の氣にてうたへば謠ひ損じは無きものなり。是すなはち稽古を晴とし。晴を稽古とせよとの古人の敎なり。亂舞の內にても謠ほどむづかしきものはなく。又謠ほど骨の折れるものなし。かるがゆゑに發古の程をいひし古き狂歌に。

舞二年太鼓三年笛五年
つゞみ七年うたひ十ねん

うたひは此くの如し。年を積まざれば謠ひ得ること難し。と。

其五　去嫌

去嫌とは或る目出度き席にて忌み憚るべき謠の文句をいふ。斯道に志す人の必ず知らでは得あるまじきなり。

婚禮に……のく　さる　かへる　かへす　かさねて
　　かず〳〵　なほ〳〵　又　秋　返しを謠ふ事

移徙
新宅
……もゆる　火　やくる　煙　くづるゝ　たふるゝ

船中
出船
に……かへる　しづむ　波風　あらし

佛事
追善
に……迷ふ　沈む　やみ　くらき　地獄の事
　　うかみがたき　嘆悲　くるしみ

諸祝儀に……死ぬる　冥途　苦しむ　亂るゝ　憂
　　涙　くつる　あはれ

關原與市と云ふ武者美濃の中川庄に押しよする處に。牛若東國に下る道にて之と行き逢ひしが。與市無禮せしとて牛若一人して大勢の敵と戰ふ事を作れり。

藤

前シテ　里女
後シテ　藤の精
ワキ　旅僧
處ハ　越中

越中多胡の浦は古歌によみたる藤の名所なれば。其花の精あらはれて舞ひ遊ぶ事を作れり。

鵜鶘小町

シテ　小野小町
ワキ　勅使
處ハ　近江

小町老年の後勅に應じて鵜鶘返の歌よむ事を作れり。是は阿佛鈔に。小町老いおとろへて後。大内をゆかしげに見物申しけるに。大内の女房たち見て。小町がはてなると云ひ又それには無きなど云ひ其家の主人の姓名の文字ある謠。

右の類の文句あるものは謠ふべからず。又これらの文字は無くとも。不吉の意味ある謠は避くべきなり。

たとへば婚禮の席にて三輪の。
　契りも今宵ばかりなりと。ねんごろに語れば。
など謠ひ。新宅びらきに杜若の。
　信濃なる淺間のだけに立つ煙。
又は鉢の木。
　衛士のたく火はあためなり。
などを謠ひ。山船の門出に清經の。
　舟よりかつぱと落汐の。
などを謠ふなど。いかにも不吉なるべし。

又佛事追善の席ならば宗旨に注意せざるべからず。法華宗の法會に
　彌陀たのむ人は雨夜の月なれや。（百萬）
と謠ひ。淨土宗の追福に。
　歸命妙法蓮華經。（身延）
などは謠んは。いみじき僻事なればなり。

婚禮の席にて返しの文句をうたはぬといふは。高砂ならば。

爭ひけるが。ある女房の云ひ給ふやうは。歌をよみかけて心を見給へ。小町ならば返歌をすべしと云ひければ。歌をよみかけたるに。もとの身の有りしすみかにあらねども此玉だれの内やゆかしき。小町はもと大内には住まぬなり。玉だれの内とはすだれの内なり。此返しに。もとの身のありしすみかにあらねども此玉だれの内ぞゆかしき。と。雜覺記と云ふものに中納言重範卿配所より歸りて内へ參り給ふ時。局わたりし給ふを女房たち見給ひて。雲の上は有りし昔にかはらねど見し玉だれの内や戀しき。と書きて投げ出しけるを重範卿見給ひ。をりふし向ひより小松の大臣來給ひしかば。返しに及はず。燈籠の火のかきあげ木のはしにて。やの字を消りて。そと云ふ字を傍に書きて返し通り給ひしとなん。などあるを取り合はせ作り替へつゝ。一つ物語にせしなるべし。是も老女ものとて能にては甚だ崇敬する曲なり。

ところは高砂の。尾上の松も年ふりて。

と「ところは高砂の」の一句を一度ほか謠はず。又。

すめる民とてゆたかなる。君のめぐみぞ有難き。

と「君のめぐみぞ」の句を一度にして止むるをいふなり。

右去嫉を敎へたる古歌あり。見出でたるまゝ左にしるす。

送り字や重ね言葉に泣く涙
　鐘の一聲鹿の遠ごゑ
鹽干山かすみの谷に夕けぶり
　秋さりごろも玉の緒柳
跡をとふつるばみ衣藤衣
　いのちの消ゆる事をきらはん

以上諸祝儀に忌む。

祝言にさくのくいぬるあくいどま
　獨ふたゝび嫁ふ絶ゑ堪へ
隙の駒猿のこゑ又かへる鳴く
　やもめ烏に追出しの鐘

以上婚禮に忌む。

新宅に燒火の噂肝つぶす

シテ　松山鏡　俱生神
ツレ　母
同　姫
ワキ　父
處ハ　越後

松の山家の女。いまだ見たる事なき鏡を母の形見とてもらひたるが。それに我影のうつるを見て母かと思ひかなしむ物語を作れり。

枕慈童

シテ　慈童
ワキ　魏文帝の臣下
處ハ　唐土

太平記の文意を用ひて祝言の能に仕組みたるなり。よりてこゝに先づ全文を示しおくべし。曰く。むかし周の穆王の時。云々。或時西天竺の舍衛國に至り給ふ。時に釋尊靈鷲山にして法華を說き給ふ。穆王馬より下りて。會坐に臨んですなはち佛を禮し奉りて。退いて一面に座し給へり。如來問うて宣はく。汝は何れの國の人ぞ。穆王答へて云ふ。吾は是れ震旦國の王なり佛重ねて宣はく。善い哉今此會場に來れり。我治國の法あり汝受持せんや否や。穆王の曰く。願はくは信受奉行して理民安國の功德を施さん。その時佛淡語以て。四要品の中の八句の偈を穆王に授け給ふ。今の法華の中の。經律の法門ありと云ふ深秘の文これなり。穆王震旦に歸つて後。深く心底に秘して。世に傳へられず。此時慈童と云ひける童子を穆王寵愛し給ふに依つて。常に帝の傍に侍りけり。或時彼慈童。君の空位を過ぎけるが。誤つて帝の御枕の上をぞ越えける。群臣議して曰く。其例を考ふるに罪科淺きに非ず。然りといへども事あやまりより出でたれば。死罪一等を宥めて遠流に處せらるべし。とぞ奏しける。群議止むことを得ずして。慈童を　縣と云ふ深山へぞ流されける。彼酈縣と云ふところ

なき跡もゆるたふる崩るゝ
夢想には讒言流人ゆめそさめ
陳に貧のく落引を忌む
追善に苦しみ沈み落ちまよふ
所謂しけり叶はぬを忌む
元服に忌むははげ山かみな月
舟にしかへるわりまつを忌む

是は連歌のために作れるなれども。謠の心得になるべけれは掲げつ されどたゝ是のみには限るべからず。

其六　かざし文句

去嫌に屬する詞を他の詞もて言ひかふるをかざし文句といふ。聞き合はせたるを思ひ出づるまゝ記して見ん。

大宮の内まで聞ゆ網引すと。（芦刈）
大宮御所にては　憚ありとて「大殿の」とかざしたり。
日も行末ぞ久しき。（高砂）
ある大名にて末姫君といふの御婚禮に「行先ぞ」とかざしたり。
玉斧の修理とこしなへにして。（羽衣）
酒井修理太夫にては「玉斧の榮」とかざしたり。
淨土の春におとらめや。（采女）
ある大名の姿にお寅の方といふがありしかば其殿にては「くだらめや」とかざしたり。
花も松も諸共に。神さびて失せにけり。（老松）
德川時代には松平氏の松に遠慮して松の失するなといふ事を忌め。「千代よろづよの春とかや」と謠ひかへたるが習となりて。今もしかうたふはをかしきなり。今は遠慮も何もなければ本の文句に復したきものぞかし。以下みな此類。
松はしるしもなかりけり。（三輪）
これも「松は常磐の璧ぞかし」と謠ひかふる流儀あり。
松はもとより煙にて。薪となるもことわりや。（鉢木）
これも松を切るは不吉なりとて「松はもとより常磐にて薪となるは梅櫻」と直したるが。今は正式の文句となりたり
此文句とて見れば松は切らざりしものを。恩賞には松非田を賜はるも合點ゆかぬ事なり。かゝる不都合の文句をも改めざるこそ嘆かしけれ。かざし文句の弊こゝに至りて極ま

は。帝城を去ること三百里。山深くして鳥だにも鳴かず。雲暝うして虎狼充滿せり。されば假にも此山へ入る人の生きて歸る事無し。穆王なほ慈童をあはれみ思し召しければ。かの八句の內を分たれて。普門品にある二句の偈をひそかに慈童に授けさせ給ひて。毎朝に十方を一禮して。此文を唱ふべし。とぞ仰せられける。慈童遂に。縣に流され深山幽谷の底に捨てられけり。こゝに慈童君の恩命に任せて。毎朝に一返此歌を唱へけるが。もし忘れもやせんずちんと思ひければ。傍なる菊の下葉に此文を書き付けゝり。それより此菊の葉に置ける下露わづかに落ちて。流るゝ谷の水に滴けるが。其水皆天の靈藥となる。慈童渴に臨んで之を飲むに。水の味ひ天の甘露の如くにして恰も百味の珍に勝れり。しかのみならず天人花を捧げて來り。鬼神手を束ねて奉仕しける間。あへて虎狼惡獸の恐れ無して。却て換骨羽化の仙人となる。是のみならず。此谷の流れの末を汲んで飲みける民三百餘家。皆病即消滅して不老不死の上壽を保てり。其後時代推し移りて八百餘年まで。慈童なほ少年の貌ありて更に衰老の姿なし。魏の文帝の時。彭祖と名を替へて此術を文帝に授け奉る。文帝これを受けて。菊花の盃を傳へて萬年の壽を成さる。今の重陽の宴是なり。それよりのち皇太子位を天に受けさせ給ふ時。かならず此文を受持し給ふ。若し幼主の君踐祚ある時は。攝政まづ之を受けて。御治世に治に必ず吾に授け奉る。此八句の偈の文三國傳來して。理世安民の治略除災與樂の要術となる。とあり。これによりて謠の文意は大方知らるべし。

忠信

シテ　佐藤忠信
ツレ　源義經
ワキ　伊勢三郎
處ハ　大和

佐藤忠信主君に別れて唯一人吉野山に陷れりといふべし。

其七　節博士

謠の文句の傍にしるして謠の節を示したるものを節博士といふ。その名稱を略あぐれば左の如し。

一　すぐ
丨　下
ノ　つぐ
乀　ふり
㇇　のみ
㇆　まはし
㇇　折りまはし
㇆　消しまはし
㇀　さゝげ
㇂　持ち
㇃　引き
㇄　ふりびき
㇅　ふりまはし
㇈　ゆりびき
㇉　本ゆり
㇊　半ゆり
㇋　一字下り
㇌　二字下り
㇍　三字下り
㇎　走り
イ　色
ア　當り
ウ　浮き
エ　落し
オ　入り
ハル　張り
クル　繰り（或流儀にてはシヲリと云ふ）
ノル　乘る
ノラズ　乘らず
メラス　調子を呂音に取る印。
クヅス　調子を下音に浮かす印。

みとゝまり。法師武者を引き受け。空腹切つて落ち失する事を作れり。

吉野靜

シテ　靜
ワキ　佐藤忠信
狂言　衆徒
處ハ　大和

義經既に吉野を出でゝ後。なほ遠く落ちのひさせんが爲めに。忠信かりに都道者の姿となり衆徒の席に入りて問答に時刻をうつし。靜に出であひて法樂の舞を舞はしむる事を作れり。前の忠信。後の二人靜どくらべ見るべし。

二人靜

シテ　靜
ツレ　菜摘女
ワキ　勝手神職
處ハ　大和

靜の亡魂菜摘の女に乘り移りて昔を語り。亡魂も形をあらはして二人共に舞まふ事を作れり。前の吉野靜は過去の靜をあらはしたる作と知るべし。

歌占

シテ　度會某
ツレ　里人
子方　幸菊丸
處ハ　加賀

伊勢の神職度會何がし。子の行方を失ひて男神子となり所々をさすらひあるきしが。遂に加賀の國にてめぐりあふ事を作れり。

第六天

前シテ　里人
ツレ　同
後シテ　魔王
ツレ（謡ナシ）　素盞嗚尊
ワキ　解脫上人
處ハ　伊勢

太平記に曰く。文治のころ洛陽に一人の沙門あり。其名を解脫上人とぞ申しける。或時伊勢の太神宮に參りて。內外宮巡禮してひそかに持受法樂の法施をぞ奉られ

ヤ
ヤア
ヤヲ
ヤヲハ
ウ　以上四つは拍子の間の印。文句の切目にあるは打切の印。
弓　强の字の略。强吟の印なり。
禾　和の字の略。和吟の印なり。但し流儀によりては强と柔との間を和吟といふ事もあり。

其八　曲節

一番の謡は種々の曲節にて組立てられたるものなり。左の如し。

次第

次第とは。シテにてもツレにてもワキにても又は地謡にても。其事の次第を初に前置するやうに謡ふ一章の曲節なり。七字五字（二返）七字五字の二十四字より成るを法とす。例を示せば。

高砂　今をはじめの旅衣。〳〵。日も行末ぞ久しき。
田村　鄙の都路へだて來て。〳〵。九重の春に急がん。
東北　年立ちかへる春なれや。〳〵。花の都に急がん。
卒都婆小町　身は浮草をさそふ水。〳〵。なきこそ哀しかりけれ。

昼清　消えぬ便も風なれば。〳〵。露の身いかになりぬらん。
千手　琴の音そへて音づれゝ。〳〵。是や東屋なるらん。
朝長　花の跡とふ松風や。〳〵。雪にも恨なるらん。
舟辨慶　今日思ひ立つ旅衣。〳〵。蹄洛をいつと定めん。
望月　波の浮鳥すむほども。〳〵。下安からぬ思かな。
夜討曾我　其名も高き富士のぬの。〳〵。御狩にいざや出でうよ
鉢木　ゆく〳〵定めぬ道なれば。〳〵。來し方も何くならまし。
七騎落　身は捨小舟恨みても。〳〵。かひなきや浮世なるらん。
箙　春を心の友として。〳〵。憂からぬ旅に出でうよ。
安宅　旅の衣は篠懸の。〳〵。露けき袖やしをるらん。
難波　山も霞みて浦の春。〳〵。浦風しづかなりけり。
山姥　善き光ぞと影たのむ。〳〵。佛の御寺尊ぬん。

道行

道行とは。過ぎ行く行路の景色有樣などを謡ふ一章の曲節なり。五字に起りて七字五字と連ねゆくもあり。始より七字五字なるもあり。間には又長短句を交へたるもあり。句數の長短は一定せず。例を示せば。

雨月　住みなれし。嵯峨野の奥を立ち出でゝ。〳〵。西より西の秋の空。月をゆく〳〵のしるべにて。難波の御津の

ける。大方自餘の社には樣かはりて。千草も山らず片そぎもそらず。是正直捨方便の貌を顯はせるかと見え。古松枝を垂れ老樹葉を敷く。皆下化衆生の相を表すと覺えたり。日暮れけれども在家なんどに立ち宿るべき心地もし給はず。外宮の御前に通夜念誦して。神路山の松風に眠を覺まし。御裳濯川の月に心を澄ましておはしける處に。俄に空かきくもり雨風烈しく吹きて。雲の上に車をとゝろかし馬を馳する音して。東西より來れり。あなおそろしや是は何物やらんと。上人肝を消し見給へば。忽然として虛空に玉をみがき。金をちりばめたる宮殿樓閣出で來つて。庭上に幔を引き門前に幕を張る。こゝに十方より來る處の車馬の客。二三千もあらんと覺ゆるが。左右に居流れて。上座に一人の大人あり。其かたち甚だ世の常に非ず。長二三十丈も有らんと見上げたるに。頭は夜叉の如く十二の面うへにならべり。四十二の手ありて左右に相

巴

浮舟

鉢木

浦づたひ。入りぬる磯を過ぎゆけば。はや住の江につきにけり。〳〵。

旅衣。木曾の御坂を遙々と。〳〵。思ひ立つ日ぶみのをはり。定めぬ宿の暮ごとに。夜を重ねつゝ日を添へて。行けば程なく近江路や。鴉の海とは是かよとよ。〳〵。

初瀨山。夕越え暮れし宿もはや。檜原のよそに三輪の山。しるしの杉も立ち別れ。嵐と共に檜の葉の。しばし休らふ程もなく。狗の渡りや早はやみ。宇治の里にも着きにけり。〳〵。

信濃なる。淺間の嶽に立つ煙。〳〵。遠近人の袖さむく。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友の里。今ぞ浮世を離坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野の渡りに着きにけり。〳〵。

一聲　一聲とは。シテにてもワキにても舞臺に出で來りて。まづ一聲に我心にても打ち見たる景色にても謠ひ掛くる章句をいふ。句法は五字か七字五字か又は七字五字なり。例を示せば。

高砂　シテ「高砂の。松の春風ふきくれて。尾上の鐘もひゝくなり。ツレ「波は霞の磯がくれ。二人「昔こそ汐の滿干なれ。

松風　シテ「汐汲車わづかなる。浮世にめぐるはかなさよ。ツレ「波こゝもとや須磨の浦。二人「月さへぬらす袂かな。

石橋　シテ「松風の。花を薪に吹き添へて。雪をも運ぶ山路かな。

兼平　シテ「世のわざの。憂きを身につむ柴舟に。たかぬさきよりこがるらん。

絃上　シテ「持ちかぬる。汐汲む桶の苦しきや。又力づく老の杖。ツレ「つたなきわざを須磨の浦。二人「ながめに憂きや忘るらん。

善界　ワキ「勅を受け。我立つ杣は出でながら。急ぐも同じ名に高き。大内山の道ならん。

サシ　サシとは詞に節を附けて謠ひかゝるといふ程の意なるべし是に四種あり。其一を單にサシといふ。クリの後クセの前にあり。例へば。

高砂　シテ「然れども此松は。そのけしきとしなへにして。花葉時を分かず。四つの時いたりても。一千年のいろ

羽の院遠國へ流れ給はゝ。義時天下の成敗を司り。治天を計らひ申さんに。必ず廣瀬の院第二の宮を位に即け奉るべし。去る程ならば此解説房。彼宮の御歸依ある聖ふれば宮僧に召され。龍顔に近づき奉り。出仕の儀則を引きつくろふべし。是より行業は日〻に忘り驕慢は時々に增して。破戒無慙の比丘とならんとする條。子細あるべからず。かくてぞ我等も若干の眷屬を記くべく候ふと申しければ。二行に並み居たる惡魔外道ども。此儀尤然るべく覺え候ふと同じて。おの〳〵東西に飛びわかれけり。とあるに依りて作れるなり。

船橋

シテ　里男
ツレ　里女
クキ　山伏
ハ　上野

萬葉集の歌を里人の痴情に迷ひて溺死せし物語に取りなし作れるなり。其歌は十雪の内に深く。又は松花の花の色十返りともいへり。

シテ「かゝるたよりを松が枝の。地「言の葉草の露の玉。心をみがく種となりて。シテ「生きとし生けるものごとに。地「敷島のかげによるとかや。

シテ「然るに月宮殿の有樣。玉斧の修理とこしなへにして。地「白衣黑衣の天人の。數を三五に分つて。一月夜々の天乙女。來仕を定め役をなす。シテ「我も數ある天乙女。地「月の桂の身を分けて。假に東の駿河舞。世に傳へたる曲とかや。

羽衣

舟辨慶

シテ「傳へ聞く陶朱公は勾踐をともなひ。地「會稽山にこもりゐて。種々の智略をめぐらし。つひに吳王を亡ぼして。勾踐の本意を達すとかや。

シテ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪。地「柳上に鶯飛ぶ剛〻たる金。花は流水に隨つて香の來ること疾し。鐘は寒雲を隔てゝ。殿の到ること遲し。

熊野

これは皆シテもしくはクキより謠ひ出だして地にて取るなり。其二をサシゴトといふ。シテの謠ひ出しなどにあり。一擘の後につゞきたるも常なり。例へば。

四の卷上野國歌の中に。上つけぬ佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかれかゝへ。とありて。佐野の舟橋は別々の舟を繋ぎ合はせ作れる橋なれば。其取り放しの出來る如く。親は男女の中を離隔せんとすれど。我は決して遠ざかる事あらじとの意なるを。全く橋絶えて水に落ち入りしやうに作れるが新趣向なるべし。

身延

シテ　七靈
クキ　日蓮上人
ハ　甲斐

身延山にて日蓮上人法華經を讀誦し居たりしをりしも。或女體の亡靈其功德に感じてあらはれたる事を作れり。

現在七面

前シテ　里女
後シテ　龍女
クキ　日蓮上人
ハ　甲斐

是も身延に同じく。日蓮上人身延山中に

高砂

シテ「誰をかも知る人にはん高砂の。松も昔の友ならで二人「すぎこし世々は白雪の。つもり〳〵て老の鶴の。ねぐらに殘る有明の。春の霜夜の起居にも。松風とのみ聞きなれて。心を友と菅蓙の。思をのぶるばかりなり。

松風

シテ「心づくしの秋風に。海は少し遠けれども。かの行平の中納言。二人「關ふきこゆるとながめ給ふ。浦わの波のよる〳〵は。げに音近き海士の家。里ばなれなる通路の。月より外は友もなし。シテ「げにや浮世のわざながら。殊に拙なき海士小舟の。二人「渡りかねたる夢の世に。住むとやいはんうたかたの。汐汲車よるべなき。身は海士人の袖ともに。思をほさぬ心かな。

三輪

シテ「げにや老少不定とて。世のなか〳〵に身は殘りいく春秋をか送りけん。あさましやなす事なくて。徒に。うき年月を三輪の里に。住居する女にて候ふ。

これはシテツレなどにて謠ひて地に渡す事なし。其三をサシゴエといふ。是もシテの謠ひ出しなどにあれども。居ながら心中の感慨を述ぶるやうの處にて。心して謠ふ文句なりと知る

て修行のをりしも。七面山の龍女あらはれて。法華經の功德に成佛する事を作れり。日蓮上人一代聞會に曰く。蓮師身延山にある法輪石に說法せらる。石々伍を爲し奇形怪狀自　黙頭の勢ありとなし。此時年二十歲ばかりの容雅なる婦人來り奉仕す。檀越波木井氏座にありて衆と共に大にあやしみ。是唯事ならずとて甚た疑ふ。師は婦を知る。顧みて曰く。汝艶麗端嚴衆と列座す。人甚だ之を疑ふ。今本形を現はすべしと。婦人諾して曰く。一滴の水を得ば命に從はんと。即ち侍者花瓶を婦人の前に置かしむ。婦人一齊長さ丈餘の毒蛇と爲る。舉座大に驚き疑念を氷解す。祖師侍者をして眞容を畫かしむ云々。婦人形を復し。吾師親ら塔中別付を受けて末法の尊師と爲る。妾又佛勅を蒙り護法神となり。長く水火兵革の難ある事ならんと云々。云ひ畢りて茲を去る。其垂迹の地春氣川上にあり。山高く鬼門の一方を閉づ。故に七面山と云ふ。

べし。例へば。

熊野

シテ「草木は雨露のめぐみ。養ひ得ては花の父母たり。況や人間においてをや。あら御心もとなや。何とか御入り候ふらん。

シテ「それ鴛鴦の衾の下には。立ち去る思を哀しみ。比目の枕の上には。波を隔つる憂あり。いはんや深き妹脊の中。同じ世をだに忍ぶ草。我は忘れぬ音を泣きて。袖にあまれる涙の露の。時間まれなる心かな。

シテ「げにわび人の習ほど。哀しきものはよもあらじ。かゝる浮世に秋の來て。朝けの風は身にしめども。胸を休むる事もなく。昨日も空しく暮れぬれば。まどろむ夜半ぞ命なる。あら定めなの生涯やな。

其四を詞のサシといふ。節のなき文句に起りて中頃より節のある文句となる。すべてサシの心持にて謡ふ文句なり。

安達原

ツレ「げにや常に永る。西方の淨土は十萬億土とかや。是は又彌陀來迎の直路なれば。あげろの山とやらんに參り候ふべし。とても修行の旅なれば。乘物をば是に留めおき。かちはだしにて乘り候ふべし。道しるべして

健

山姥

士人相傳ふ。金輪際より湧出する黃金の所成なり。絕頂に池あり。八功德水を澄まし五色の雲を生ず。時々三寶鳥翔鳴す。其本地は吉祥天女。父の名は圓滿具足天。母の名は鬼子母天。とあり。先づ此緣起を心に置きて本文を讀むべし。

鷺

シテ　鷺
ツレ　帝王
ワキ　藏人
ツレ　大臣
處ハ　京都

醍醐天皇神泉苑に御幸ありける時。鷺の勅を奉ぜしを御感あつて。それを捕へし藏人と共に五位を賜はる事を作れり。出處は盛衰記十七の卷に出づ。

東方朔

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　東方朔
ツレ　西王母

たび候へ。

實盛

是は思ひよらぬ仰かな。本より處は天ざかる。鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名のりもせめ。たゝ上人の御下向。ひとへに彌陀の來迎なれば。かしこうぞ長生して。この稱名の時節に逢ふ事。盲龜の浮木優曇花の。花まちえたる心地して。老の幸ひ身に越え。喜びの涙たもとにあまる。されば此身ながら。安樂國に生るゝかと。無比の歡喜をなすところに。輪回忘執の圓浮の名を。又改めて名のらんこと。口をしうこそ候へとよ。

サシはすべて瀧の流るゝ如くによどみなく謡へと古人もいへり。拍子のあしらひはわれど合はせて謡ふところにあらず。

歌　文字の如く歌ふところにて吟詠する心地なるべし。すべて拍子に合はざるべからず。節もこまかに付きたり。下音にて出だすを下歌といひ。上音にて出だすを上歌といふ。例は。

高砂

下歌「おとづれは松にことゝふ浦風の。落葉衣の袖そへて。木蔭の塵をかゝうよ。〳〵。上歌「ところは高砂の。〳〵。尾上の松も年ふりて。老の波もよりくるや。木

唐土

處ハ　東方朔西王母と共に朝廷に出にでゝ三千年の桃を奉り。君を祝ひて舞樂を奏する事を作れり。既に云へる西王母とくらべ見るべし。出處は漢武内傳にあり。

俊成忠度

シテ　平忠度
ツレ　藤原俊成
クキ　岡部六彌太
トモ　俊成從者
處ハ　京都

岡部六彌太は忠度を討ちてのち自筆の短冊を見出でしかば。之を屆けんとて俊成の許に至りしに。忠度もあらはれ出でゝ千載集に作者を盡かれざりし妄執を述べ。また修羅道の苦患を見する事を作れり。

梅枝

前シテ　宿主(女)
後シテ　富士の妻
クキ　旅僧

の下かげの落葉かく。なるまで命ながらへて。なほいつまでかいきの松。それも久しき名所かな。〳〵。

下歌「松浦がた。西に山なき有明の。上歌「月の入る。雲もうかぶや沖つ舟。〳〵。互にかゝる朝まだき。海はそなたかもろこしの。船路の旅も遠からで。一夜どまりと聞くからに。月も程なき名殘かな。〳〵。

下歌「たのむ誓は此神に。よるべの水を汲まうよ。上歌「御たらしの。聲も涼しき夏かげや。〳〵。紅の森の梢より。初音ふりゆく時鳥。なほ過ぎがてに行きやらでいま一通り村雨の。雲もかげろふ夕づく日。夏なき水の河隈。汲まずともかげは疎からじ。〳〵。

下歌「たゝいつとなく一筋に。願む佛の御手の糸。みちびき給へ法の聲。上歌「迷をも。照らさせ給ふ御誓。〳〵。げにもと見えて有明の。ゆくへは西の山なれど。ながめは四方の秋の空。松の聲のみ聞ゆれども。嵐はいづくとも。定めなき世の夢心。何の音にかさめてまし。〳〵。

白樂天

加茂

井筒

これらはシテツレなどの謡ふ文句なり。又地にては謡ふ。

ツレ　從僧

處ハ　攝津

富士と云ふ樂人非命の最期を遂げしため。其妻浮びやらずして此世に執心の殘りしが。法華經の功德を仰がんとて旅僧に一宿を與へ。懺悔の樂舞ふ事を作れり第卷に出だせる富士太皷は妻の現在をあらはし。この梅枝は其幽靈をあらはしたるなり。

加茂物狂

シテ　狂女
クキ　男
處ハ　京都

相別れたる夫婦。賀茂の祭の日出で逢ふ事を作れり。

車僧

シテ(前後)　天狗
ワキ　車僧
處ハ　山城

天狗ありて名僧を魔道に引き入れんとせしに。終に勝つ能はずし辟易し歸る事を

高砂

上歌「四海波しづかにて。國も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生の。松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても。こともおろかやかゝる世に。住める民とて豐かなる。君のめぐみぞ有難き。〳〵。

楊貴妃

上歌「梨花一枝。雨を帶びたる粧の。〳〵。大液の芙蓉の紅。未央の柳の綠も。これにはいかで增るべき。げにや六宮の粉黛の。顏色のなきも理りや。〳〵。

玉葛

上歌「ほの見えて。色づく木々の初瀨山。〳〵。風もうつろふ薄雲に。日影もにほふ一しほの。さぞな景色もかく川の。浦わのながめまで。げにたぐひなや面白や川音きこえて里ついき。奥ものふかき谷の戸に。つらなる軒をたえ〴〵の。霧間に殘す夕べかな。〳〵。

融

上歌「げにや古を。月にはちかの鹽竈の。〳〵。浦わの秋も半にて。松風も立つなりや。霧の籬の島がくれ。いざ我も立ち渡り。昔の跡を陸奥の。ちかの浦わをながめんや。ちかの浦わをながめん。

地にて謡ふ歌をば地とも同音とも同吟ともいふ。一番の謡にて其初度にある同吟を初同といひ。二度目なるを二の同。三度目なるを三

作れり

御裝濯　老翁
前シテ　男
ツレ　與玉神
後シテ　臣下
ワキ　伊勢
處ハ　伊勢の御裝濯川に與玉の神あらわれて。古事を語り御代を祝ひ給ふ事を作れり。

碇潜　舟人
前シテ　平知盛
後シテ　二位尼
ツレ　旅僧
ワキ　長門
處ハ　壇浦の合戰に平家討ち破られて。新中納言知盛は碇をかづきつゝ入水せし物語を作れり。

浮船　男女
前シテ　浮舟の君
後シテ

ワキ　旅僧
處ハ　山城
源氏ものゝ一つにて浮舟の君の事を作れり。浮舟の君は或る宮の姫君にて。光源氏の君の子息薫大將に愛せられ。宇治に住み給ひしが。匂兵部卿の宮之を見そめて。遂に薫大將のまねをして一夜逢ひ給へり。此事を大將ほのかに聞きて京都に迎へ取らんとの用意あり。兵部卿の宮も猶負けじとて大將より先に我方に迎へんと宣ふ。浮舟は先非を悔いて宇治川に身を投げんと思ひなり。深夜に家を出で給ひしに。物のけに誘はれて命つゝがなく木の根に臥し局給ひしを。横川僧都をりゑも通りかゝり之を見つけて小野に連れかへりし事。くはしく浮舟の卷に見ゆ。浮舟その後僧都の教化を受けて尼になり給ひしなり

千引　男
前シテ　女
フレ

の同など稱ふるなり。

クリ　クリのサシ（即ちクセの前の）の前にありて。サシおよびクセの調子を準備するための曲節なり。節博士のクリを以て初むる處ゆゑ此名あり。例へば。

高砂　地「それ草木こゝろなしとは申せども。花實の時をたがへず。陽春の德をそなへて。南枝花はじめて開く。

羽衣　地「それ久方の天といつば。二神出世のいにしへ。十方世界を定めしに。空は限りもなければとて。久方の空とは名づけたり。

三輪　地「それ神代の昔ものがたりは。末代の衆生のため。濟度方便のことわざ。品々もつて世のためなり。

百方　シテ「げにや世の中は。何くとても住めば宿。地「住まぬ時には故郷もなし。此世はそも何くの程ぞや。

熊野　シテ「げにや思内にあれば。色外にあらはる。地「よしやよしなき世の習。嘆きても又あまりあり。

かくの如く地にて謠ふと。シテより謠ふとの二種あり。

クセ　クセは其昔の山舞の名殘にて。一番中の骨とも柱ともなるべき處なり。能にては居グセ舞グセの二種ありて。居グセはシテのすわりたるまゝに謠ふところ。舞グセは舞ふ時に用ふるところなり始は下音もしくは中音に起りて。中程にシテの謠ふ文句をアゲと稱へ。是より上音の調子となる。アゲより前は必ず地にて謠ふものなれど。仕舞の時はシテが先づ一句うたひて夫より地に渡すなり。通例はシテの謠ふアゲ一つなれども。稀には二つあるもあり。其二つあるをば二段グセと稱ふ。左に一段グセと二段グセとの例を示さん

俊寛　クセ「時を感じては。花も涙をそゝぎ。別を借しみては鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼あるところにて。今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと。此あはれなどか知らざらん。天地を動かし。鬼神も感をなすなるも。人のあはれなるものを。此島の鳥けだものも。なくは我をとふやらん。シテ「せめて思のあまりにや。地「さきに讀みたる卷物を。また引き開き同じ跡を。見れども〳〵唯。成經康頼と。書きたる其名ばかりなり。若しも禮紙にやあるならんと。卷きかへして見れども。僧都とも俊寛とも。書ける文字は更になし。こは夢か扨も夢なくば。さめよ〳〵とうつゝなき。俊寛が有樣を。見るこ

後シテ　石魂
ワキ　甲斐守某
狂言　従者
處ハ　陸奥
陸奥の國千引石の物語を作れり。土地の古老などの云ひ傳へたるを據どころをせしなるべし。

小鍛冶

前シテ　童子
後シテ　稲荷明神
ワキ　三條小鍛冶
ワレ　橘道成
處ハ　京都
三條小鍛冶ハ神助を得て勅命の御劔を討つ事を作れり。

玉井

前シテ　豐玉姫
ツレ　玉依姫
後シテ　海神
ツレ（二人）　天女
ワキ　彦火火出見尊

そあはれなりけれ。

羽衣

クセ「春霞。たなびきにけり久方の。月の桂の花や咲くげに花かづら。色めくは春のしるしかや。面白や天ならで。こゝも妙なり天つ風。雲の通路ふきとじよ。乙女のすがた暫しとゞまりて。此松原の。春の色を三保が崎。月清見潟富士の雪。いづれや春の曙。たぐひ波も松風も。のどかなる浦の有樣。そのうへ天地は。何をへだてん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は。天の羽衣まれにきて。地「撫づとも盡きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。聲そへてかず〳〵の。笙笛琴箜篌。孤雲の外に滿ち〳〵て。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。拂ふ嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ妙なる。

山姥

クセ「遠近の。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥の。聲すごき折々に。伐木丁々として。山さらに幽かなり。法性峰そびえては。上求菩提をあらはし無明谷深きよそほひは。下化衆生を表して。金輪際に

處ハ　龍宮
古事記日本紀などの本文に依りて。天孫の海神の宮に行幸ありし物語を作れり。玉井と名づけたるは。備前の國幣立山に玉井社ありて。彦火火出見等豐玉姫の二神を祭れるなどの事に。下文の註を考へ合はせて心得べし。

橋辨慶

シテ（前後）　西塔辨慶
トモ　従者
子方　源牛若
處ハ　京都
牛若辨慶五條の橋にて主従の縁を結ぶ物語を作れり。

檜垣

前シテ　老女
後シテ　檜垣嫗
ワキ　僧
處ハ　肥後
中古に名高かりし檜垣嫗の物語を作れり。後撰集に。筑紫白川と云ふ處に住み及べり。そも〳〵山姥は。生所も知らず宿も無し。たゞ雲水をたよりにて。至らぬ山の奥もなし。シテ「然れば人間にあらずとて。地「隔つる雲の身をかへ。假に自性を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前に來れども。邪正一如と見る時は。色即是空そのまゝに。佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳はみどり花は紅のいろ〳〵。さて人間に遊ぶこと。ある時は山賤の。樵路に通ふ花のかげ。休む重荷に肩を貸し。月もろともに山を出で。里まで送る折もあり。又ある時は織姫の五百機立つる窓に入つて。枝の蜘糸くり。紡績の宿に身を置き。人を助くるわざをのみ。賤の目に見えぬ。鬼とや人のいふらん。シテ「世を空蟬の唐衣。地「拂はぬ袖に置く霜は。夜寒の月に埋もれ。打ちすさむ人の絶間にも。千聲萬聲の。響のしでうつは。たゞ山姥がわざなれや。都にかへりて。世語にせさせ給へと。思ふは猶も妄執か。たゞ打ち捨てよ何事も。よし足引の山姥が。山めぐりするぞ苦しき。

侍りける大武藤原興範朝臣の。(嫗の家の前を)まがりわたるつえでに。水たべんとて(嫗の家に)立ちよりて乞ひ侍りければ。水をもて出でゝよみ侍りける。檜垣の姥。年經ひば我黒髪も白川のみづはくむまで老いにけるかな。とあるを本とせしなり。大和物語にも此物語あれど。それには小野好古が藤原の純友の討手に太宰府に下りし時の事とせり。また嫗が家集には清原元輔によみかけたる歌とせり。參考のために合はせて示す。

東岸居士

シテ　東岸居士
ツキ　旅人
處ハ　京都

東岸居士の傳と一遍上人縁起とを比べ讀まば此作の起りは知らるべし。傳に曰く。東岸居士は自然居士の弟子なり。名は玄鶴。字は東岸。東山雲居寺の僧なり。少壯より志を頓宗に留む。參禪を以て業と爲す。僧依を被す高座に登つて說法す。或は羯鼓を聖つて踊躍し。或は扇を執つて舞ふ。人詰つて剃髮せず緇衣を着ざる故を問へば卒然として曰く。もとよりの住所も無ければ出家の謂はれもなし。出家にあらざれば僧衣を被ず。髮は長く亂るれども特り自ら道に入る。東岸の柳を以て箒と爲して知解の塵を拂ふと。問ふものの口をつぐんで言はず。弘安六年癸未の夏寂す。と。是にて居士の人と爲りを知るべし。一遍上人縁起に曰く。或人法文尋ね申しけるに書きて遣はされける聖の法語に云はく。春過ぎ秋來れども進みがたきは出離の道。花を惜しみ月を詠めても起りやすきは輪廻の妄念なり。罪障の山にはいつとなく煩惱の雲あつくして佛日の光り眼に遮らす。生死の海にはとこしなへに無常の風烈しくして眞如の月やどる事なし。生を受くるに隨つて苦に苦を重ね。死に歸るに隨つて闇きより闇きに趣く。六道の街には迷はぬ所なく。四生のとぼそには宿らぬ住家となし。生

百萬

クセ「奈良坂の。見手柏の二おもて。とにもかくにも俟人の。なき跡の涙こす。月のしがらみひまなきに。思ひ重なる年波の。流るゝ月の影をしき。西の大寺の柳かげ。緑兒のゆくへ白露の。おきわかれて。いづちとも知らず失せにけり。一方ならぬ思草。葉末の露も青によし。奈良の都を立ち出でゝ。かへり三笠山。佐保の川を打ちわたりて。山城に井手の里。玉水は名のみして。影うつす面影。あさましき姿なりけり。かくて月日を送る身の。羊の歩み隙の駒。足にまかせて行く程に。都の西と聞えつる。嵯峨野の寺にまゐりつゝ。四方のけしきをながむれば。シテ「花の浮木の亀山や。地「雲にながるゝ大井川。まことに浮世の嵯峨なれや。盛ずぎゆく山櫻。嵐の風松の尾。小倉の里の夕霞。立ちこそつゝけ小忌の袖。かざしぞ多き花衣。貴賤群集する此寺の法ぞ尊き。かれよりもこれよりも。たゝ此寺ぞ有難き。かたじけなくも斯かる身に。申すは恐なれども。二佛の中間。我等ごときの迷ある。道あきらめん主とて。毘首羯磨が造りし。赤栴檀の尊容。やがて神力を現じて。天竺旦わが朝。三國にわたりて。有難くも此寺に現じ給へり。シテ「安居の御法と申すは。地「御母摩耶夫人の。孝養の御ためなれば。佛も御母を。哀しみ給ふ道ぞかし。況や人間の身として。などかは母を哀しまぬと。子を恨み身をかこち。感歎してぞ祈りける。親子鵜鶏の袖なれや。百萬が舞を見給へ。これらを見ても。文章として最も力を注ぎたる處なるを知るべし。

ロンギ　ロンギは。シテにてもワキにてツレにても地にても。互に掛合にうたふ歌の一種なり。例へば。

加茂

地「汲むや心も潔き。加茂の川瀬の水上は。いかなるところなるらん。シテ「いづくとか。岩根松が根しのぎくる。瀧つ流は白玉の。音ある水や貴舟川。地「水もなく見えし大井川。それは紅葉の雨とふる。シテ「嵐の底の戸無瀬なる。波も名にや流るらん。地「清瀧川の水汲まば。高嶺のみゆき解けぬべき。シテ「朝日待ちあて汲まうよ。地「汲まぬ音羽の瀧波は。シテ「受けて頭の雪とのみ。地「いたゝく桶も。シテ「身の上と。地「誰も知れ老らくの。くるゝも同じ程なき。今日の日も夢のうつゝ

死の轉變をば夢とやいはんうつゝとやいはん。是を有りといはんとすれば雲となり煙と消えて空しき空に影を留むる人なし。無しといはんとすれば。又恩愛離別の歎き。心の内にといまりて腸を斷ち魂を迷はさずといふ事なし。彼紫闕の袂に屍をば愁歎の餘に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷は解くる事あるべからず。鷲鳥の衾の下に眠をば慈悲の涙にうるぼせども。焦熱大焦熱の餘はしめる事なかるべし。いたづらに歎きいたづらに悲しみて。人も迷ひ我も迷はんよりは。早く三界苦輪の里を出でゝ程なく九品蓮臺の都に詣るべし。こゝに苦惱の婆婆はたやすく離れかたく。無爲の境界は等閑にして至る事を得ず。たま〳〵本願の强緣にあへる時。いそぎはげまずしては何れの生をか期すべき。他力の稱名は不思議の一行なり。彌陀超世の本願の凡夫出離の要道なり。身を忘れて信樂し證に任せて唱ふべしと。是にて文句の出處を辨ふべし。

鉢木

ぞと。うつろふかげは有りながら。濁りなくぞ水むすぶの。神のこゝろ汲まうよ。神の御心くまうよ。

ワキ「よしや身の。かくては果てじ唯たのめ。我世の中にあらんほど。又こそ參り候はめ。暇申して出づるなり。ツレ「なごりをしの御事や。初は包む我宿の。さも見苦しく候へど。しばしはとまり給へや。ワキ「とまる名殘のまゝならば。さて幾たびか雪の日の。シテ「空さへ寒き此暮に。いづくに宿を將衣。今日ばかりとまり給へや。ワキ「名殘は宿にとまれども。暇申して。シテ「御出か。ワキ「さらばよ常世。シテ「又お入り。地「自然鎌倉に御上りあらばお尋ねれ。けうがる法師なり。披露の緣になり申さん。御沙汰すてさせ給ふなと。いひすてゝ出舟の。ともに名殘やをしむらん。〳〵。

蟬丸

シテ「これまでなりやいつまでも。名殘は更に盡きすまじ。暇申して蟬丸。ツレ「一樹の陰の宿りとて。それだにあるにましてげに。兄の宮の御わかれ。とまるを思ひやり給へ。シテ「げに痛はしや我ながら。行くは慰む方もあり。とまるをさこそと夕雲の。立ちやすらひて

國栖

前シテ　老翁
ツレ　嫗
後シテ　藏王權現
ツレ　天女
子方　天武天皇
ワキ　供奉の臣
狂言　敵兵
處ハ　大和

天武天皇のまだ大海人皇子と申しけるころ。大友皇子に襲はれて吉野山に近れ入り給ひしを。山神老人夫婦と現じて救ひ奉り給ふ事を作れり。

江島

前シテ　漁翁
ツレ　漁夫
後シテ　五頭龍王
ツレ　辨財天女
ワキ　勅使
處ハ　相摸

江島緣起を本として此島の成りたる物語

泣きゐたり。ツレ「なくや關路の夕烏。うかれ心は烏羽玉の。シテ「我黑髮のおかで行く。ツレ「別路とめよ逢坂の。シテ「關の杉村すぎゆけば。ツレ「人聲とほくなるまゝに。シテ「蘆屋の軒に。ツレ「たゝずみて。地「互にさらばよ。常には訪はせ給へと。かすかに聲のするほど。聞きおくりかへりみおきて。泣く〳〵別れおはします〳〵。

右の如くロンギの末は同吟になりて常の如くとまるもあり。加茂その例なり。中入となりて終るあり。鉢木その例なり。キリとなりて收まるあり。蟬丸その例なり。正式なるは中入の前にありて。シテの素性を名のるといふ意なるか。又は暗に行方を告ぐるといふ意なるが最も多し。一つ例を引かば。

田村

地「げにやけしきを見るからに。たゞ人ならぬ裝の。その名いかなる人やらん。シテ「いかにとも。いさや其名も白雪の。あとを惜まば此寺に。歸る方を御覽ぜよ。地「歸るや何く蔦垣の。間近き程か遠近の。シテ「たづきも知らぬ山中に。地「おぼつかなくも思ひ給はゝ。我行く方を見よやとて。地主權現の御前より。下るかと見えし

死の轉變をば夢とやいはんうつゝとやいはん。是を有りといはんとすれば雲となり煙と消えて空しき空に影を留むる人なし。無しといはんとすれば。又恩愛離別の歎き。心の内にといまりて腸を斷ち魂を迷はさずといふ事なし。彼紫闕の袂に屍をば愁歎の餘に焦がせども。紅蓮大紅蓮の氷は解くる事あるべからず。鴛鴦の衾の下に眼をば慈悲の涙にうるぼせども。焦熱大焦熱の餘はしめる事なかるべし。いたづらに歎きいたづらに悲しみて。人も迷ひ我も迷はんよりは。早く三界苦輪の里を出でゝ程なく九品蓮臺の都に詣るべし。こゝに苦惱の娑婆はたやすく離れかたく。無爲の境界は等閑にして至る事を得ず。たま〳〵本願の强緣にあへる時。いそぎはげまずしては何れの生をか期すべき。他力の稱名は不思議の一行なり。彌陀超世の本願の凡夫出離の要道なり。身を忘れて信樂し聲に任せて唱ふべしと。是にて文句の出處を辨ふべし。

鉢木

ぞと。うつろふかげは有りながら。濁りなくぞ水むすぶの。神のこゝろ汲まうよ。神の御心くまうよ。ワキ「よしや身の。かくては果てじ唯たのめ。我世の中にあらんほど。又こそ參り候はめ。暇申して出づるなり。シテ「なごりをしの御事や。初は包む我宿の。さも見苦しく候へど。しばしはとまり給へや。ワキ「とまる名殘のまゝならば。さて幾たびか雪の日の。シテ「空さへ寒き此暮に。いづくに宿を狩衣。今日ばかりとまり給へや。ワキ「名殘は宿にとまれども。暇申して。シテ「御出か。ワキ「さらばよ常世。シテ「又お入り。地「自然鎌倉に御上りあらばお尋ねれ。けうがる法師なり。披露の緣になり申さん。御沙汰すてさせ給ふなと。いひすてゝ出舟の。ともに名殘やをしむらん。〳〵。シテ「これまでなりやいつまでも。名殘は更に盡きすまじ。暇申して蟬丸。ツレ「一樹の陰の宿りとて。それだにあるにましてげに。兄の宮の御わかれ。とまるを思ひやり給へ。シテ「げに痛はしや我ながら。行くは悲む方もあり。とまるをさこそと夕雲の。立ちやすらひて

蟬丸

國栖

前シテ　老翁
ツレ　嫗
後シテ　藤王權現
ツレ　天女
子方　天武天皇
ワキ　供奉の臣
狂言　敵兵
處ハ　大和

天武天皇のまだ大海人皇子と申しけるころ。大友皇子に襲はれて吉野山に近れ入り給ひしを。山神老人夫婦と現じて救ひ奉り給ふ事を作れり。

江島

前シテ　漁翁
ツレ　漁夫
後シテ　五頭龍王
ツレ　辨財天女
ワキ　勅使
處ハ　相模

江島緣起を本として此島の成りたる物語

泣きゐたり。ツレ「なくや關路の夕烏。うかれ心は烏羽玉の。シテ「我黑髮のあかで行く。ツレ「別路とめよ逢坂の。シテ「關の杉村すぎゆけば。ツレ「人聲とほくなるまゝに。シテ「藁屋の軒に。ツレ「たゝずみて。地「互にさらばよ。常には訪はせ給へと。かすかに聲のするほど。聞きおくりかへりみおきて。泣く〳〵別れおはします〳〵。

右の如くロンギの末は同吟になりて常の如くとまるもあり。加茂その例なり。中入となりて終るあり。鉢木その例なり。キリとなりて收まるあり。蟬丸その例なり。正式なるは中入の前にありて。シテの素性を名のるといふ意なるか。又は暗に行方を告ぐるといふ意なるが最も多し。一つ例を引かば。

田村

地「げにやけしきを見るからに。たゞ人ならぬ裝の。その名いかなる人やらん。シテ「いかにとも。いさや其名も白雪の。あとを惜まば此寺に。歸る方を御覽ぜよ。地「歸るや何く蘆垣の。問近き程か遠近の。シテ「たづきも知らぬ山中に。地「おぼつかなくも思ひ給はゝ。我行く方を見よやとて。地主權現の御前より。下るかと見えし

を作れり。文句も原書のまゝに用ひたる處多し。

鱗形

前シテ　女人
後シテ　辨財天
ワキ　北條時政
ツレ　從者
處ハ　相摸

北條時政江島の神德に依りて旗の紋を得る事を作れり。出處は太平記に。むかし鎌倉草創の始め。北條の四郎時政榎の島（江島を斯くも書けり）に參籠して子孫の繁昌を祈りけり。三七日に當りける夜。赤き袴に柳裏の衣着たる女房の端嚴美麗なるが。忽然として時政が前に來て告げて曰く。汝が前生は箱根法師なり。六十六部の法華經を書寫して六十六箇國の靈地に奉納したりし善根に由つて。再び此土に生まるゝ事を得たり。されば子孫長く日本の主と爲つて榮華に誇るべし。但し其振舞違ふ處あらば七代を過すべからず。我言ふところ不信あらば國々に納めし所の靈地を見よと云ひすてゝ、歸り給ふ其姿を見れば。さしも嚴くしかりつる女房忽に臥したけ二十丈ばかりの大蛇と爲つて。海中に入りにけり。其跡を見るに大なる鱗を三つ落せり。時政所願成就しぬと喜んで則ち彼鱗を取つて旗の紋にぞ押したりける。今の三鱗形の紋これなり。其後辨財天の御示現に任せて。國々の靈地へ人を遣はして法華經奉納の處を見せけるに。俗名の時を法師の名に替へて。奉納箱の上に大法師時政と書きたるこそ不思議なりと見ゆ。

佛原

前シテ　里女
後シテ　佛御前
ワキ　旅僧
處ハ　加賀

平清盛に寵を得たる佛御前の幽靈かりにあらはれて。昔を語り法力を頼む事を作れり。祇王と比べ見るべし。

が。下りはせで坂の上の。田村堂の軒もるや。月の村戸を押し明けて。内に入らせ給ひけり。内陣に入らせ給ひけり。

中入

中入とはシテの半にて樂屋に暫く入るをいふ。其入らんとする時の謠を中入の文句といふなり。例へば。

巴

地「さるほどに。暮れてゆく日も山の端に。入合の鐘の音の。浦わの波に響きつゝ。いつしか物すごき折ふしに。我も亡者の來りたり。其名を何れとも。知らずは此里人に。問はせ給へと夕ぐれの。草のはつかになりにけり。〳〵。

正尊

地「かはらぬ契を願む中の。隔てぬ心は神ぞ知るらん。よく〳〵申せと靜に諫められ。土佐坊御前を罷り歸れば。君も御寢所に入らせ給へば。おの〳〵退出申しけり。

待謠

待謠とは中入すみて後。ワキの謠ひ出す歌の文句をいふ。後シテの出づるを待ち迎ふる心なり。例へば。

東北

ワキ歌「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。〳〵。花も妙なる法の庭。迷はぬ月の夜と共に。此御經を讀師する。〳〵。

忠度

ワキ歌「夕月はやくかげろふの。〳〵。おのが友呼ぶ村千鳥の。跡見えぬ磯山の。夜の花に旅寐して。浦風までも心して。春に聞けばや音すごき。須磨の關屋の旅寐かな。〳〵。

クドキ

クドキとは。述懷感慨などの意を。怨むが如く訴ふるが如く述ぶる一種の節なり。

俊寛

シテ「此程は三人一所にありつるだに。さも恐ろしくすさまじき。荒磯島に唯ひとり。離れて海人の捨草の。波の藻屑のたよりもなくて。有られんものかあさましや。嘆くにかひも渚の千鳥。泣くばかりなる有樣かな。

烏帽子折ッ「今は何をか包むべき。是は野間の内海にて果て給ひし。鎌田兵衛正清の妹なり。常磐腹には三男。牛若子生れさせ給ひし時。頭の殿より此御腰の物を。御守刀にとて參らさせ給ひし。其御使をば。わらは申してさぶらふなり。痛はしや世が世にてましまさば。かく憂き目をば見まじきものを。あらあさましや候。

キリ

キリとは文字の如く一番の終りの文句をいふ。例へば。

龍祇王

シテ　祇王
トモ　從者
ツレ　父
ワキ　粉河何某
處ハ　紀伊

祇王と云ふ白拍子獄中の父を尋ねて逢ひたる物語を作れり。前の佛原に關係ある祇王には非ず。白拍子には此の如き名多かりしなり。

葛城天狗

シテ　天狗
ツレ　役行者
ワキ　山伏
處ハ　大和

葛城山の大天狗を役行者の降伏する事を作れり。

和布刈

前シテ　漁翁
ツレ　海人少女
後シテ　龍神
ツレ　天女
ワキ　早鞆神職
處ハ　長門

早鞆明神にて行はれし和布刈の神事のことを作れり。諸國俚人談に。門司關早鞆明神に宮前は海なり。これに石の階あり。常に二十階ほどは水中に見えて其先は知らず。毎年十二月晦日の子過丑の刻の間に。社人宮殿の寶劔を胸に當てゝ石階をくだりて海中に入る。其時潮左右へ颯と開けり。海底の和布を一鎌刈りて歸るなり。若し誤つて二鎌刈れば潮に溺るゝの難あり此時は社頭民家の燈火。海上かゞり舟の火ことゝ〳〵く之を消すなり。その刻限の前半時ばかり。浪大きに立ちて海あらし。海底に入らんずると思ふ頃しばらく浪しづまりて。又前の如く半時が程は海あるゝなり。これを和布刈の神事と云ふ。當社は龍神の屬にして。神功皇后三韓退治の時。干珠滿珠を持ち來りて舟を守護し給ふなり。其頃皇后はらませ給

三井寺

地「かくて伴なひ立ち歸り。〳〵。親子の契つきせずも。富貴の家となりにけり。げに有難き孝行の。威德ぞ目出度かりける。〳〵。

松風

地「松に吹きくる風も狂じて。須磨の高波はげしき夜すがら。妄執の夢に見々ゆるなり。我跡とひてたびたまへ。暇申して歸る波の音の。須磨の浦かけて。吹くやうしろの山おろし。關路の鳥も聲々に。夢も路なく夜も明けて。村雨と聞きしも今朝見れば。松風ばかりや殘るらん。〳〵。

唐船

地「陸には舞樂に乘じつゝ。〳〵。名殘おしてる海づら遠く。なりゆくまゝに。かへすも追風。舟には舞の。袖の羽風も追手とやならん。帆を引きつれて舟子ども。してぞ歸りける。

詞　詞とはすべて節なき處の文句をいふ。是に名乘。問答。呼掛。カタリの四種あり。

名乘とは。シテにてもツレにてもワキにても舞臺に出でゝ。我名を名のり其素性を告ぐる文句なり。例へば。

ワキ詞「そも〳〵是は九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成とは我事なり。我いまだ都を見ず候ほどに。此度思ひ立ち都に上り候。又よき序なれば。播州高砂の浦をも一見せばやと存候。

小袖曾我十郎詞「是は曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出候間。我等も罷出候。又これなる時致は。母にて候ものゝ勘當にて候程に。申し直し連れて罷り出でばやと存候。

名乘は大かた男にて。女の時は節ある文句にしてサシなどに謠ふを常とせり。

問答は互に問答する常の詞をいふ。獨言にいふ詞も此内に入れて見るべし。例へば。

高砂

ワキ詞「里人を相待つ處に。老人夫婦來れり。いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「高砂の松とは何れの木を申し候ぞ。シテ「只今木陰を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキ「高砂住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに。何とて相生の松とは申し候ぞ。シテ「仰の

ふなれば。軍の中に降誕あらば如何ならんと煩はせ給ふに。此神和布を獻じすゝめ給ふに三年を經て征伏し給ひ。歸朝の時筑前の箱崎にて御降誕ありける。應神天皇これなり。とあり。その式と山來とを思ふべし。

土車

シテ　乳父小次郎
子方　若君
ワキ　深草小將
狂言　里人
處ハ　信濃

遁世せし君父の行方を尋ぬるたぬ。土車を挽きづゝ辛苦を嘗めし忠僕孝子の遂に尋ぬる人に廻り逢ふ事を作れり。

櫻川

シテ　狂女
子方　櫻子
ワキ　僧
ツレ　人商人
同　里人

羽衣

如く古今の序に。高砂住の江の松も。相生のやうに覺えとありさりながら。此尉は津の國住吉のもの。是なる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申さ給へ。

ワキ詞「我三保の松原にあがり。浦のけしきをながむるところに。虛空に花降り音樂聞え。靈香四方に薰ず。是れ只事と思はぬところに。是なる松に美しき衣かゝれり。取りて見れば色香たへにして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候。

呼掛

呼掛とは。遠く橋掛より舞臺なる人を呼び掛けて出で來る時の詞をいふ。例へば。

熊坂　シテ「のう〳〵あれなる御僧に申すべき事の候。
立田　シテ「のう其川な渡り給ひそ申すべき事の候。

カタリ　カタリは。一場の物語として過ぎにし事を語り聞かずる詞をいふ。但し中程より節となるもあり。例へば。

道成寺　ワキ詞「むかし此所に。まなごの莊司といふものあり。彼者一人の息女を持つ。又其頃奥より熊野へ參詣する山伏のありしが。莊司がもとを宿坊と定め。いつも彼

處ハ　常陸

人商人に奪ひ去られし子を尋ねて日向より常陸まで迷ひゆきたる物語を作れり。

飛鳥川

シテ　母
ツレ（二人）　早少女　友若
子方　京人
ワキ　大和
處ハ

別れし母の行方を尋ねて飛鳥の里にて廻り逢ふ事を作れり。

舍利

前シテ　里人
後シテ　足疾鬼
ツレ　韋馱天
ワキ　旅僧
狂言　寺僧
處ハ　京都

足疾鬼と云ふ鬼來りて泉涌寺の佛舍利を奪ひたるに。忽ち韋馱天と云ふ天神に取り返される事を作れり。是は都名所圖會所に來りぬ。莊司娘を寵愛のあまりに。あの客僧こそ汝がつまよ夫よなんどゝ戯れしを。稚心にまことゝ思ひ年月を送る。又或時彼客僧莊司がもとに來りしに。彼女夜更け人靜まつて後。客僧の閨に行き。いつまでわらはをばかくて置き給ふぞ。急ぎ迎へ給へと申しゝかば。客僧大きに驚ぎ。左あらぬ山にもてなし。夜にまぎれ忍び出で此寺に來り。平に頼むよし申しゝかば。隱すべき所なければ。撞鐘をおろし其内に此客僧をおろしおく。さて彼女は山伏を遁すまじとて追つかくる。折節日高川の水以ての外に增りしかば。川の上下をかなたこなたへ走りまはりしが。一念の毒蛇となつて。川を安々とおよぎこし此寺に來り。こゝかしこを尋ねしが。鐘のおりたるを怪しめ。龍頭をくはへ七まとひまとひ。焰を出だし尾を以てたゝけば。鐘は即ち湯となつて。つひに山伏をとりをはんぬ。なんぼう恐ろしき物語にて候ぞ。

右示したる曲節の内。

一　ワキ次第

泉涌寺の處に。舍利殿の本尊は佛牙の舍利なり。二重の金塔に安置す。そも〳〵此佛牙の由來を尋ぬるに。佛涅槃に入り給ふ御時。羅刹足疾鬼ひまを窺ひて佛牙を掠奪ひたりしを。韋駄天降伏を加へ取りとゞめ晝夜に敬ひて身を放し給はず。而して佛滅後一千六百餘年を經て。大唐の白蓮寺道宣律師。戒行薫修の威德冥感にも通じけるにや。韋駄天かたちを顯はし三歸八戒を受け得て。其報恩に此佛牙を授け給へり。それより人間に傳はり白蓮寺に納め金閣の寶函に秘し置けり。日本に渡り給ふ事は。富山中興の開基俊芿法師の末弟湛海。我師の宋國に渡りし芳跡を慕ひて白蓮寺に詣し。赤栴檀を供じて佛牙を恭禮し。信仰のあまり竊に舍利を懇望のよし述べけれども叶はずして。空しく本朝に歸りしが。猶志願やむ事なく重ねて入唐し。二階の樓門三重の塑婆を構へて船艦を滄溟に浮べ。事故なく江隱軍に至りしかば。白蓮寺の修造成就し。大衆等甚深の志を感じ。其（湛海の）德の凡人に非ざる事を知りて。酬答たゝ來賓に任すべき衆命一同なりしかば。是を以て萬里渡海の本懐は偏に佛牙の求請にあり。二度來朝の素願しかしながら舍利の利益を思ふよし具に述べければ。忽ち佛牙の附屬をゆるしけり。歡喜の涙を押さへて歸帆の纜を解き。事故なく彼御舍利を本朝に移し當時の本尊と崇め奉る。とある由來を現在の事にして作れるなり。

道明寺

前シテ　宮人
ツレ　同
後シテ　白太夫の神
ツレ　天女
ワキ　尊生
處ハ　河内

河内の道明寺に白太夫の神靈あらはれて天滿宮の昔語を爲し。舞樂の役者に當てられて舞を舞ひ。又寺の名木もくげんじゆの實を尊生に與ふる事を作れり。山處を左に示さん。

高砂　弓八幡　老松

ワキ　次第　「今を始の旅衣」云々
「御代もさかゆく男山」云々。
「げに治まれる四方の國」云々、

同　名乘　「抑是は阿蘇の宮の神主友成とは我事なり」云々。
「抑是は宇多院に仕へ奉る臣下なり」云々。
「抑是は都の西梅津の何がしとは我事なり」云々。

同　道行　「旅衣すゑはる〳〵の都路を」云々。
「四つの海波靜なる時なれや」云々。
「何事も心に叶ふ此時の」云々。

ツレ　一聲　「高砂の松の春風ふきくれて」云々。
「神まつる日も きさらぎの今日とてや」云々。
「梅の花笠はるもきて」云々。

同　サシ　「誰をかも知る人にせん高砂」云々。
「君が代は千代に八千代にさゞれ石の」云々。
「風を逐つてひぞかに開く云々。」

同　下歌　「音信は松にこの云々。」
「神と君との道の云々。」
「歩みを運ぶ宮

は當時の緣起に。元慶八年菅相丞常寺に於て五部の大乘經を書寫す。此經を納むべき地を求め給ふに。講堂の西の傍にあたりて石函を得る。則ち此經を彼函に納めて土を以て上を築く。其後かの塚より本槻樹自然に生ひ出でゝ。年々しげりを添ふ。一とせ回祿のわざはひに逢ひて二度枝葉を生じ。今に至りて盛なり。人々此實を尊みて數珠につなぐなり。と。又。相州田代寺の尊生と云へる僧。信州善光寺に參籠すること一七日。我命終の後かならず西方極樂に往生せしめ給へと。一心に祈願せしかば。或夜の夢に內陣より如來の告げ給ふと覺えて。木槻樹一百八をつらぬき。之を數を取りて。念佛百萬遍を修行せば決定して往生に生れん。其木槻樹は河州土師寺にありと。尉生夢さめて後はるゝ尋ね來りけるに。一人る老翁出で來內して木槻樹を敎ふ。此僧これを得て念珠とし。敎への如く修せしかば。臨終正念にして往生の本意を遂げたり。

とゝふ浦風の　すぐに云々。　寺の云々。

同　上歌　「ところは高砂　「松高き枝もつの云々。　ら」なる鳩の峰　「松が根の岩間をつたふ苔むしろ云々。

問答詞　ワキ「里人を相待つ所に云々。　ワキ「今日は當社の御神事にて云々。シテ「こなたの事にて候か云々。　ワキ「いかに是なる老人に云々。シテ「此方の事は當社に年久しく仕へ申す云々。

地同吟　「四海波しづかにて云々。　「桑の弓とるや遂の山幡山云々。　「守る我さへに老が身の云々。

クリ　「それ草木心なしとは申せど云々。　「そも〳〵弓箭を以て世を治めし始といつも云々。　（ナシ）　ば云々。

かの翁は白太夫の神の化現にてありしとなり。とあり。

湛海

シテ　長谷部湛海
ワキ　鬼一法眼
トモ　從者
子方　沙那王
處ハ　京都

鬼一法眼に賂の湛海をして沙那王を討たしめんと謀りしに。事成らずして返り討ちにせらるゝ事を作れり。

住吉詣

シテ　明石上
ツレ女　侍女
ツレ男　光源氏
同　惟光（家臣）
子方　童隨身
ワキ　住吉神主
處ハ　攝津

源氏ものゝ一つにて。光源氏住吉參詣のをりしも明石上は播磨より船にて參詣し

サシ　「然れども此松は云々。　「然るに神功皇后云々。　「まづ社壇の躰を拜み來れば云々。

クセ　「然るに長能が言葉にも云々　「上雲上の月卿より云々。　「げにや心なき云々。

ロンギ　地「げに名を得たる松が枝の云々。シテ「今は何をか包むべき云々。　地「げにや誓も影高き云々。シテ「有難き千代の御壁を松風の云々。　（ナシ）

中入　（ロンギの留め）　（ロンギの留め）　（クセの留めの文句）

待謡　ワキ「高砂や此の文句。）　ワキ「都に歸り浦舟に帆を上げて云々。　ワキ「うれしきかなやいざゝ神勅を云々。　ならば云々。

後シテ　「我見ても久しくなりぬ住吉の云々。　「もとよりも人の國より我國云々。　「いかに紅梅殿云々。

、

思はず逢ひ奉れる事を作れり。此明石上と云ふは。光源氏左遷の如き身の上にて須磨の浦に漂泊し居られたる頃。寵愛を受けて姫君をさへ生みたる明石入道の娘なり。源氏は罪解けて京都に歸り再び榮花の身と爲りて今日の參詣ありたるに明石上は獨り播磨に殘されて姫君を安產せしかば。是も御禮まゐりに思ひ立ちし時なりと知るべし。

谷行

前シテ　母
子方　松若
後シテ　鬼神
ワキ（先達）　帥阿闍梨
ツレ（小先達一同）同行山伏　前ハ京都　後ハ大阪
處ハ　帥阿闍梨の弟子に松若と云ふ少年あり。嶽入に隨行せん事を乞ひて最愛の母に別れ。山中にて病起りし爲め谷行と云ふ殘酷なる目に逢ひたるが行力の功德によりて再び生きかへり物語を作れり。

キリ　地「さすかひな　地「月の桂の男　地「齡を授くるには云々。　山云々。　此君の云々。

其九　强吟弱吟

謠の吟聲にツヨキとヨワキとの二種あり。ツヨキとは。吟聲にゆるみなく强く雄々しく。從つて上り下りの節も甚だ著るしからぬやうに謠ふ所をいひ。ヨワキとは。吟聲やはらかに優美にして。上り下りの節も面白く花々と謠ふ所をいふ。ツヨキ所をば强吟とも剛吟とも呼び。ヨワキ所をば弱吟とも柔吟とも和吟とも呼べり。謠本に「弓」としるせるは强の略字。「禾」とあるは和の略字なりと知るべし。

但し或る流儀にては。强と弱との間に謠ふを和吟といふ事もあり。强吟は。概して神聖森嚴なるもの。祝意を表するもの。勇武をあらはすもの。極めて淒涼なるもの。などに用ひられ。弱吟は。優美花麗なるもの。情緒纏綿たるもの。悲哀なるもの。などに主として用ひらるゝなり。されば一番のこらず强吟もしくは弱吟の曲もあり。半は强吟にして半は弱吟といふ如きもあり。又は或る一句二句のみ他吟を交へて變化せしむるものもあり。今左に之を示さん。

全部强吟のもの。（例へば）

龍虎　樵夫
前シテ　同
ツレ　虎
後シテ　龍
ツレ　旅僧
ワキ　唐土
處ハ　入唐の僧龍虎の戰ふ樣を眼前に見たる事を作れり。

寐覺

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　三返翁
ツレ（謠なし）　天女
同（同）　龍神
ワキ　勅使
處ハ　信濃
信州寐覺の床の山來を述べ。三返の翁あらはれて勅命長久の神樂を勅使に奉る事を作れり。三返の翁は三百年を經たると云ふ浦島子の事なり。

高砂　難波　老松　白樂天
養老　志賀　氷室　白髭
弓八幡　江島　鶴龜　淡路
放生川　岩船　金札
前は强く後は弱きもの。（例へば）
田村　兼平　瀨政　實盛
朝長　八島　通盛　箙
熊坂　舟辨慶　烏帽子折　知章
紅葉狩　黑塚
或る部分は强く或る部分は弱きもの。（例へば）
鵜飼　三井寺　天鼓　融
清經　通小町　竹生島　阿漕
禰　大原御幸　蟻通　熊野
藤戸　景清　加茂　俊寛
西行櫻　葛城　當麻　海士
鞍馬天狗　咸陽宮　龍田　夜討曾我
角田川　船橋　源氏供養　花筐
櫻川　山姥　善界　右近

空蟬

前シテ　里女
後シテ　空蟬
ワキ　旅僧
處ハ　京都

源氏ものゝ一つにて。空蟬の幽靈旅僧に逢ひ。法華經の功德を受くる事を作れり。空蟬と云ふは。中川なる紀伊守の家にて光源氏の逢ひ給ひしより。常に心を懸けられたる女なり。

六浦

前シテ　里女
後シテ　楓の精
ワキ　旅僧
處ハ　武藏

六浦の稱名寺に青葉の楓あり。此木爲相の詠歌に感じて。秋の紅葉をといめたる山來の名木なるが。法華經の功德により成佛する事を作れり。

水無月祓

シテ　狂女

女郎花　三輪　安宅
盛久　邯鄲　殺生石
鉢木　羽衣　道成寺
敦盛　葵上　西王母
巴　嵐山　經政
鐘巻　項羽　正尊
羅生門　小督　花月
春榮　土蜘蛛　野守
生田敦盛　草子洗　大佛供養
俊成忠度　七騎落　雲雀山
寶君　飛雲　舍利
全部弱吟のもの。(例へば)　松山鏡　小鍛冶
江口　千手　井筒　松山上　大江山
玉葛　采女　楊貴妃　紅葉　放下僧
定家　夕顏　杜若　三笑
佛原　野宮　松風
藤　六浦　百萬
胡蝶

右の内或る部分強くして或る部分弱きものゝ中には。強吟の中に弱吟を交へて變化をあらはしたるもあり。また弱吟の中に強吟を交へて變化を見せたるもあり。よく〳〵謠ひ味ひ聞き味ひて。その如何に作曲者の心をこらしたるかを思ふべし。

其十　緩急

一語の内にも一句の内にも一章一段の内にも。靜めて謠ふ處と進めて謠ふ處とあり。これを緩急といふ。

花筐

李夫人の面影を。しばらくこゝに招くべしとて。九華帳の内にして。反魂香を焚き給ふ。夜ふけ人しづまり。(此句より靜まる)月秋なるに。それかと思ふ面影の。あるかなきかにかげろへば。(又進む)

俊寛

もとの渚にひれふして。松浦さよひめも。我身にはよもまさじと。嘆も惜しまず泣きゐたり。(此句靜まる)

鞍馬天狗

月は鞍馬の僧正が。(此句緩)谷に滿ち〳〵峰を動かし。(是より急に進む)嵐こがらし瀧の音。天狗だふしはおびたゝしや。

熊野

牛飼車よせよとて。是も思の家の内。はや御山とすゝむれど。心はさきにゆきかぬる。足弱車の。(此句より

ワキ　男
狂言　里人
處ハ　京都

夫の行方を尋ねて狂ひ出でたる女。獨茂の名越祓の日めぐりあひたる物語を作れり。

昭君

前シテ　白桃
ツレ　王母
後シテ　單于幽靈
ツレ　昭君幽靈
ワキ　里人
處ハ　唐土

漢の勅命に依り獨り胡國に遣はされて。苦痛を受けたる王昭君の物語を作れり。

大社

前シテ　宮人
ツレ　同
後シテ　杵築大神
ツレ　天女
同　龍神

ワキ　臣下
處ハ　出雲
世間に神無月と稱ふる十月を。出雲にては神々の集り給ふ月とて神有月と稱へ。嚴重なる神事あり。此時參り合ひて奇特を目擊する事を作れり。

淡路

前シテ　老翁
ツレ　勇
後シテ　伊非諾尊
ワキ　臣下
處ハ　淡路
伊非諾伊非冊尊の神德を述ぶるを主とし。倒の當時神道家に行はれし俗說を混合して作れり。

雲雀山

シテ（女）　侍從
子方　中將姫
男　從者
ワキ　橫佩右大臣
トモ（一同）　從者

靜まる）力なき花見なりけり。

張良

張良さわがず劍を拔き持ち。蛇躰にかゝれば。大蛇は劍の光に恐れ。持ちたる沓をさしいだせば。沓をおつとり劍を納め。又川岸にえいやとあがり。さて彼沓を取り出だし。石公にはかせ奉れば。（この「奉れば」の文字あたりより靜まる）石公馬より靜におりたち。〳〵。さるにても汝。善哉々々と。がの一卷を取り出だし。張良にあたへ給ひしかば。すなはち披きこと〳〵く拜見し。秘曲口傳を殘さず傳へ。（以上すべて緩）また彼大蛇は觀音の再擬（此句より急に進む）汝が心を見んためなれば。今より後は守護神となるべしと。大蛇は雲井によぢのぼれば。

これにて其おほよそを知るべし。但し是は意味の變化によりて緩急を生ずる例なるが。曲節の變化上よりも每句每章に多少の緩急を要すべし。たとへば。

田村　シテ「又檀那を待てとありしは。是れ坂の上の田村丸。

以上靜に。

地「今もその。

處ハ　大和
中將姫繼母の讒にかゝりて雲雀山に捨てられしを。侍從と云ふ乳母もりたてゝ庵を作り之に住ませ置き。昼は木草の花を里に持ち出でゝ賣りつゝ忠勤を盡したるが。遂に御當ゆるされて家に歸る事を作れり。

戀重荷

前シテ　山科莊司
後シテ　同　幽靈
ツレ　女御
ワキ　官人
狂言　下人
處ハ　京都
宮女を戀慕せし賤吏の。其れが爲め苦役を受けて遂に空しくなる事を作れり。此一曲は忝くも後花園天皇の御作なるを。觀世太夫第二世の結崎世阿彌元淸に賜はりて一番の能とせしめ給ひしよし。同家の家傳にあり。

花軍

さらりと謠ひ出す。
名になながれたる淸水の。
淸水のと靜まる。
〳〵。
又さらりとなる。
おふぐもおろかなるべしや。
靜まりて止まる。

羽衣

地「あづまあそびの數々に。
さらりと出て「かず〳〵」と靜まる。
〳〵。
返しより又さらりとなる。
足高山や富士の高嶺。
是より少し靜まる心持。
うせにけり。
靜まりて止まる。

なほ委しくいへば句每に緩急あり字每に緩急あれど。さまでは筆の皆き取らるゝ限にあらず。つまるところ緩急なきは。死したる謠といふべきなり。

前シテ　里人（女郎花の精）
後シテ　白菊の精
ツレ（一同）　草花の精
ワキ　都人
ツレ　同行
處ハ　京都
女郎花の精あらはれて。白菊ひとり寵を專にする恨を述べ。同心の花をかたらひて菊を征伐せしむる事を作れり。作者は何か當時を諷諫する心にても作りしならん。

水無瀬
シテ　亡母
ツレ　姉
子方　弟
ワキ　父
處ハ　摂津
出家せし父わが子の家に一泊して亡母の後世を吊いひしか。親子の名乗をせざりしとて。亡母の靈あらはれて之を引き合はする事を作れり。爲世は有名の歌人定家卿の曾孫にて。嘉歴四年に剃髪し法名を明釋と曰ひし人の事なるべし。

吉野天人
前シテ　里女
後シテ　天人
ワキ　都人
處ハ　大和
吉野の花見に行きて天人の舞樂を見る事を作れり。是は天武天皇の吉野におはしける時。天人降り來て舞ひ遊びしと云ふ古事に依りて。勝手の社の上に袖振山と云ふ山の名も殘り。朝廷にて十一月の御儀式と爲りたる五節の舞姫も治まりたれば。それらを取り合せたる作と知るべし。

錦戸
シテ　泉三郎
ツレ　妻
ワキ　錦戸泰衡
處ハ　陸奥
藤原泰衡主君義經に背きて頼朝に附かんとせしを。弟の三郎同心せざりしかば。

其十一　位

一番の謠の態度を緩急の上にあらはすを位といふ。されば老翁老女貴人神佛などのものは大方位靜に。貴女神女などは靜なるが上にしとやかに。鬼畜軍事祝言少男少女などのものは位すゝみて勇ましくあるべきなり。二三の例をあぐれば。

靜なるもの。
老松　白樂天　雨月　蟻通
卒都婆小町　鶏鶏小町　關寺小町　檜垣
姥捨　砧　遊行柳　定家
當麻　景清　大原御幸　實盛
頼政
靜にてしとやかなるもの。
江口　楊貴妃　井筒　夕顔
さらりとしたるもの。
田村　敦盛　巴　舍利
花月　猩々
すべて其謠其能の位を得るといふ事は。老練の上ならでは容易の業にあらず。かの三老女と稱へて斯道の秘事とする曲の如きも。別に曲節ふしはかせのむづかしきが爲めにあらず。たゞ此位を得ると得ぬとによりて巧拙あるを以ても。位の貴重すべきものなるを知るべし。

其十二　調子

謠の調子は上中下の三音を以て本とす。されど上音にも上中下あり。中音にも上中下あり。下音にも上中下あり。老人もの貴人ものなどには總べて抑へたる低き調子を用ひ。若き男女などのものには多く張り上げたる高き調子を用ふ。位の靜なるものは概して抑へたる調子なるを常とするなり。たとへば。

田村（前は童子。後は勇將）　斑女（狂女）
千手（若き女）　小袖曽我（五郎十郎）
船辨慶（前は靜。後は知盛）　羽衣（若き天女）
などの類は低く沈みたる調子を用ひず。
卒都婆小町（老女）　實盛（老將）
蟻通（神躰）　野宮（六條御息所）
木賊（老翁）　芭蕉（草の精）

兄として討手に向ひ。途に弟を滅ぼす事を作れり。

野守

前シテ　野守翁
後シテ　鬼神
ワキ　山伏
處ハ　大和

春日野の野守鏡の古事を古歌と俗説とに依りて作れり。

蟻通

シテ　蟻通明神
ワキ　紀貫之
處ハ　和泉

紀貫之雨中に蟻通明神を過ぎて神怒に觸れ。歌をよみてこれをなごめ奉る事を作れり。由處は貫之集に。紀の國に下りてかへりのぼりし道にて。俄に馬の死ぬべくわつらふところに。道ゆく人に立ちどまりて云はく。これはこゝにいますがる神のし給ふならん。年頃社もなくしるしは見えねど。うたてある神なり。さま〳〵などの類には高く張りたる調子を嫌ふなり。是等にて其一斑を窺ふべし。

或る人曰く。俊寛および大原御幸の建禮門院は老人ならざるに。何とて沈みたる低音の調子にて謠ふやらんと。答へて曰く。俊寛は年いまだ老いたるにはあらざれども。愁嘆もて滿たされたる心をあらはさんが爲め。また建禮門院も悲哀に沈み給へるが上に高貴の御身におはしますが爲め。抑へたる調子にて謠ふなりと。すべて此心もて味はゝ思ひ半に過ぎん。

其十三　讀方

謠の文句に一種一定の讀方ありとは。少し抑道に入りたる人の必ず知るところならん。もとより其讀方は古法のまゝ若しくは當時の俗語を傳へたるもあり。又は歌ひもの故音調を優ならしめんとて殊更にしたるもあれど。今は一括して是をこゝに紹介すべし。

かゝる時節をうかゝひて（舟辨慶）
今日は潯陽の江に出でゝ（猩々）
五逆の達多は天王記別を蒙り（海人）
たま〳〵佛意にあひながら（源氏供養）

かゝるには命をなん申すといふに。幣帛も無ければ何わざもせで手洗ひて。神おはしげもなしや。そも〳〵何の神とか聞えんと問へば。蟻通の神といふを聞きて。よみて奉りける。馬の心地やみにけりと詞書して。かきくもりあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは。とあり。

大佛供養

シテ　悪七兵衛景清
ツレ　同母
同　源頼朝
同　從者
ワキ　同
處ハ　大和

前段は景清久しぶりにて母に對面する事を作れり。後段は大佛供養の庭にて頼朝をねらひ討たんとせしに。事あらはれたれば身を隠して立ちのく事を作れり。

女郎花

前シテ　老翁

の類は。「ヲセット」「コンニッタ」「テンノウキベット」「ブッチ」と讀む。

嗔恚のほむらは身を焦す（葵上）
さすが恩愛の故郷の方を戀しき（海人）
かく尊詠の偽りなくは（舟辨慶）
樽のもたせて參りつゝ（千手）
然るに勾踐は（舟辨慶）

の類は「シンニ」「オンナイノ」「ソンチイ」「ソンノ」「コウセンナ」と讀む。

渴仰　末代　二月　八難　密嚴

の類の「カッ」「マッ」「ゲッ」「ハッ」「ミッ」などいふッの字は。口の内に含みてはつきりと發音せず。但し是は字音の詞に限りたることにて。固有の國語なる「松」「辰」「初」「打つ」「立つ」などの「つ」には非ず

滿願眞如の影となり（羽衣）
千斷して血狼籍たり（歌占）

の類は「マングッツ」「セッダン」と含みて讀む。滿と願と千と斷とン音の二つづゝ重なるを避けんとてなるべし。余が謠曲通解には千斷を獨斷と書きたりしかど。千斷の方まされるを認めたればこゝにはしか云ふ。前説と異なるを怪しむ勿れ。

後シテ　小野頼風
ツレ　同妻
ワキ　九州の僧
處ハ　山城

戀の遺恨にて身を投げたる女の　より女郎花の生ひ出でたる物語を作れり。出處は藻　草に。平城天皇の御時小野頼風と云ふ人。男山に住みけり。京の女と契りし後。彼女八幡へ尋ね行きて頼風が事を問ふ。家なるもの答へて曰く。此程はじめたる女房ましますが其所へ行き給ふと答ふ。此女うらめしく思ひて。八幡の川の端に山吹重ねの衣ぬぎすて身を投げ死せり。其衣朽ちて女郎花生ひ出でたるなり。また改暦雜事記に。大門元年小野頼風妻化女郎花。など見えたり。

前シテ　里女
後シテ　定家　式子内親王
ワキ　旅僧
處ハ　京都

雲もかげろふ夕づく日(加茂)
そのたけ千尋の大蛇となつて(春日龍神)
非想非々想天までくまなく(野守)
經めぐりめぐりて住吉の松の風(岩舟)

の類は「ユフヅクイ」「チイロノ」「ヒイサウ」「エメグリ」と讀む。

母

は何くになりても「ハワ」と讀む。

憚り

を「ハワカリ」と讀む。

あやふく

は「アヨオク」の如く讀む。

御字

は「ギヨヂ」の如く讀む。

いかに鬼神もたしかに聞け(田村)
いかなる天魔鬼神なりとも(熊坂)

の類の鬼神は「キシン」と濁りて讀み。

天地を動かし鬼神を感ぜしむることわざ(東北)

鬼神も感をなすなるも人のおはれなるものを(俊寛)

定家卿と式子内親王との物語を作れり。出處は不たしかなる古人も既に云へり。

鍾馗

シテ　鍾馗
ワキ　旅人
處ハ　唐土

鍾馗大臣の靈あらはれて國土を守らんとの誓を爲す事を作れり。

繪馬

前シテ　老翁
ツレ　老媼
後シテ　天照天神
ワキ　臣下

伊勢の齋宮繪馬の神事を作れるなり。昔は齋宮の森に小舍ありて十二月三十日の夜に繪馬をかしる例なりしが。其起りは。又その古に齋宮として大神宮に奉仕の皇女住み給ひし時。十二月晦日こゝにて大祓あり。其祓の料に馬を牽き來る事なりしを。其儀式すたれて後。繪にかける馬を奉りて舊式を存せし意味ならんと云ふ。

の類のは「キシン」と清みて讀む。惡魔の類の荒ぶる神の意なるは濁音。正しき神明の意の時は清音と知るべし。

さゝなみ

是に清濁の二つあり。近江の地名の時は清音を用ひ。小波をいふ時は濁音なりと知るべし。乘平に。

さてまた籠はさゝ波や。(地名)志賀辛崎の一つ松。七社の神輿の。御幸の梢なるべし。さゝ波の(小波)みなれ棹。こがれゆくほどに。遠かりし向ひの浦波の。粟津の森は近くなりて。跡は遠きさゝ波の。(地名)昔ながらの山櫻は青葉にて。面影も夏山の。うつりゆくや青海の。柴舟のしば〳〵も。暇ぞをしきさゝなみの。(小波)よせよ〳〵磯ぎはの。粟津に早く着きにけり。

など打ち交へて用ひたるも見ゆ。

さても是より東に當つて國あり。名を日本と名づく。いそぎ彼土に渡り。日本の智慧をはかれとの宣旨に任せ。只今海路に赴き候。云々。是ははや日本の地に着きて候。嘗く此所に碇をおろし。日本のやうを詠めばやと存候。云々。われ萬里の波濤を凌ぎ。日本の地にも着きぬ。是に小船一艘うかべり。是れは漁

來年の吉凶を占ふさまは文中に見ゆ。

泰山府君

前シテ　天人
後シテ　泰山府君
ワキ　櫻町中納言
處ハ　京都

櫻町中納言は泰山府君の祭を行ひて花の命を延べん事を祈る所に。天人くだり來て一枝手折りかへりしが。かの神あらはれて。其後は之を防ぎ。遂に三七日の花盛を保護せし事を作れり。出處は源平盛衰記に。そも〳〵此成範卿とは故少納言入道信西三男なり。櫻町の中納言といふ事は。優に情ふかき人にて。吉野山を思ひ出だして櫻を愛し給ひけり。室の八島より歸りのぼりて後。町の四方に吉野の櫻を移し植ゑ。其中に家を建てゝ住み給ひければ。見る人この町をば。ひ口町の櫻町と申しけり。又は此中納言櫻の名殘を惜しみて立ちゆく春を悲しみ。又來る春を待ちわび給ひしかば。異名に櫻町中納言とも云へり。殊に執し思はれける櫻あり。七日に咲き散る事をなげきて。春毎に花の命を惜しみて。泰山府君を祭られけるうへ。天照天神に祈り申させ給ひければ。三七日の齡を延びたりけり。されば。かくぞ思ひつゞけゝる。千早ぶるあら人神の神たれば花も齡は延びにけるかな。と。人の祈り誠ありければ。神の靈驗あらたにして。七日中に咲きちる花なれども。三七日まで殘りあり。君も御感ありて花の本はに此人をぞすべきとて。勅書に櫻町の中納言とぞ仰せける。とあり。

翁なり。いかにあれなるは日本のものか。（白樂天）

右の日本は「ニッポン」と讀む。然れども其答なる次の文句に。

さん候これは日本の漁翁にて候。御身は唐の白樂天にてましますな。

とあるをば「ニホン」と讀む。是はワキの詞を強く明かせんために「ニッポン」とし。シテの詞を穩和ならしめんとて「ニホン」と區別せしなり。

ワキ詞「筑紫より淡津の三郎が參りて候それ〳〵御申候へ。

ツレ女「何淡津の三郎と申すか。人までもあるまじとなたへ來り候へ。（柏崎）

是は男の詞の時「サブラウ」にして女の詞の時「サムラウ」なり。音調に注意の深きを見るべし。

調べ　調ぶ
浮ば　浮び　浮ぶ　浮べ
冠り

などは「シラメ」「シラム」「ウカマ」「ウカミ」「ウカム」「ウカメ」「カムリ」と讀む。

縹渺悠揚としては又（花筐）

半部

前シテ　里女
後シテ　花の精
ワキ　僧
處ハ　京都

源氏物語夕顔の卷に。光源氏六條邊の忍あるきの事あり。其時五條にて夕顔の咲きたる宿を見つけて其の花折らせに御供

越鳥南枝に巣をかけ（蟻地）
俊乘坊重源諸國を勸進す（安宅）

の縹渺は「ヒョウビョウ」と讀まずして。（ウビヨウと讀み。越鳥は「エッチョウ」にあらずして「エッテウ」と讀み。重源は流儀によりては「チョウゲン」にあらずして「テウゲン」と讀む。是等の讀方はちと拘はり過きたる心地せらるゝなり。

おろかの仰せ候ふや（高砂）
あれこそ音羽山候ふよ（融）
あらあさましや候（角田川）
さてかのあらましは候（夜討曾我）

かくの如く「候」を「さうらふ」と濁りて讀む處あり。文法上直に續かざる文句を「候」にて受くる時に限るなり。右の例にていはゞ「おろかの仰にて候ふや」「音羽山にて候ふよ」「あらあさましの次第にて候」「さてかのあらましは如如にて候ふぞ」などいふべきを略したればなり。

其十四　主眼の文字

謡には處々に主眼の文字あり。たとへば。

の。身をやられたれば宿の女。心わてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕顔。と扇にかきて參らせたり。源氏より其返歌に。よりてこそそれかとも見め黄昏にほの〳〵見つる花の夕顔。と書き贈られしを始めにて。彼家の女と契り深き中となり給へり。これを花の歌をよみたる緣によりて夕顔の上を名づく。此物語を本として。其後立花供養の時に花の精あらはれ出で丶昔を語る事を作れり。第四卷の夕顔は彼女の靈なれば比べ見て互に味ふべし。

シテ　櫻の精
ワキ　上畫墨雄
處ハ　山城

墨染櫻

かむつけの墨雄と云ふ人。出家して後に仁明天皇の御陵に詣て丶歌よむとを作れり。古今集にては堀川太政大臣の墓にての事としたれど。遍昭集などに依り天皇諒闇の御時の事として。此謠は作れるなるべし。

飛雲

前シテ　樵夫
後シテ　天狗
ワキ　山伏
ツレ　同
處ハ　信濃

山伏天狗にあひて所り伏する事を作れり。

伏見

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　かさはへの神
ワキ　藤原俊家
處ハ　京都

伏見の翁草と伏見の神徳との事を作れり。俊家は音樂の達人なれば相手に出だせるなるべし。

雪

シテ　雪の精
ワキ　旅僧

その鵜つかひの亡者にて候(鵜飼)

墓に數ある沓の音(遊行柳)

胸のあたりを刺し通し刺し通さるれば(藤戸)

僧都とも俊寛とも書ける文字は更になし(俊寛)

松風村雨と召されしより(松風)

さすが恩愛のふるさとの方ぞ戀しき(海人)

われこそ式子内親王(定家)

互に手に手を取りかはせば又きそ〳〵となりゆけば(角田川)

の類かぞへもつくされず。是等は丁寧に其心して謠ふべきなり。

其十五　文句の輕重

文句に輕く謠ふべきところと重く謠ふべきところあり。たゝとば。

あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を汲ませ。(以上は輕く)

こゝにて之を燒かせつゝ。(これより重し)(融)

それは難波江(輕し)これまた。角田川の東まで。(重し)(角田川)

あれなる里をばあまの丶里と申して。かの海士人の住み給ひし在所にて候。(以上輕し)又是なる島は。(重し)(海人)

又これを遠近の謠方といふ。心中にて其輕重を分くべしと古人も教へたり。

拍子

其一　八拍子

謠の字數は七五の調を本とす。

あづまあそびの(七)かず〳〵に(五)

その名もつきの(七)いろびとは(五)

さんごやちうの(七)そらにまた(五)(羽衣)

げにやけしきを(七)みるからに(五)

たゞびとならぬ(七)よそほひの(五)

その名いかなる(七)ひとやらん(五)(田村)

山よりいづる(七)きたしぐれ(五)

ゆく〳〵やさだめ(七)なかるらん(五)(定家)

之を雨垂拍子八つづゝ打ちたる拍子に合はせて謠ふを本の拍子とも本地ともいふ。左の如し。

あアづゥまアあアそゥびイのオかアずゥかアずうにイ

げにやけしきを見るからにたゞびとならぬよそほひの

處ハ　掘淮
雪の精まても法華經の功力を仰がんとてあらはれ出でたる事を作れり。
善知鳥

シテ　獵師幽靈
ツレ　妻
子方　幼兒
ワキ　旅僧
處ハ　前は越中　後は陸奥
卒都の濱の獵師。生前に殺生せし報いにて冥途の苦痛を受くる樣を作れるなり。
愛宕空也

シテ　龍神
ワキ　空也上人
處ハ　山城
空也上人愛宕山に登りて經文讀誦の折から。龍神來りて舍利を請ひ。其報恩に山上に水を出だして上人に奉づる事を作れり。
九世戸

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　龍神
ツレ　天女
ワキ　臣下
處ハ　丹後
久世戸文珠の緣起を作れり。智恩寺と云寺にあり。
松尾

前シテ　老翁
ツレ　男
後シテ　松尾明神
ワキ　臣下
處ハ　山城
松尾明神の神徳を述べたる作なり。すべて佛法づくめにしたるは當時の作なれば止むを得ずと知るべし。
落葉

前シテ　里女
後シテ　雲井雁
ワキ　旅僧
處ハ　坡山

然れども間すでに八拍子に盛られたる以上は。字數七五ならでも或は延べ或は縮め或は間を假きて謠ふなり。故に謠の文句は常に長短句を多く用ひたり。

みづにちかきろうたいはア（六五の句）
ものゝあやめも見ぬあたりのオ（七六の句）
地をはしるけだものオ（五四の句）
しかれども世のなかのオ（五五の句）
ところはやまかげのオ（四五の句）
されどもとのひとオ（四四の句）
われもそのかみはア（三五の句）

これらを始として種々の變化あり。謠本の傍にトルと記し。片地（一名は一地）と記し。ヤと記し。ヤアと記し。ヤヲと記し。ヤヲハと記し。チクリと記したるは。皆その間拍子の取方を示したるなり。今これを一々に說明せんは容易の事にあらざれば略しぬ。この八拍子を標準にして。なほ面白く之を聞かせん事を工夫し。おの〳〵其手を分業して定めたるものを大鼓小鼓太鼓の三拍子とす。

其二　大皷

大皷は左の手に持ち腰にかまへて。右の手を大きく廣げて打つなりその起原は猿樂傳記に曰く。大皷は大藏流。威德流。三郎右衛門流市郎兵衛流品々あり。羅山文集に云ふ。大藏正豊子正幸に及び。大皷の藝を以て世に鳴る。去るによつて紫の調を正重に賜ふ。誠に是れ家の榮。何を以て是に過さんやと云々。

高安三太郎大皷の家は。高安嘉閑脇師となるを以て。槌頭道善以來の大皷の家を弟三右衛門に渡すを以て相續す。其子三太郎。其子三右衛門といふ。其の嫡子三太郎家を繼ぎし後。御近習に召し出だされ。横田小右衛門と改號す。故に平三郎を以て家を立つる。是に子なし。兄の方より下知して。弟子槌三郎藥宜しき故家督す。當三太郎也。先祖道善が弟に。大藏道寛といふ大皷の上手有り。信玄抱へられ甲州に住す。鉦を立て往來す。

葛野が大皷の家は。先祖を葛野信助と云ふ佛師なり。田中と云ふ者の皷を傳へり。素人にて家を立つる。其子九郎兵衛は。大藏宗全に便り修行し。上手となり。其頃躍の囃子に頭を取て。雅九郎兵衛と世に呼ぶ。渠紀州の御家へ御附被成。其子九郎兵衛も。上手にて江戸へ召され。觀世座仰せ付けらる。後入道して田光と號す。其嫡子何某家藥上手なれども。公儀を勤むる事を嫌ひ。藝を止めて京都へ引

源氏ものゝ一つにて。雲井雁の嫉妬心なほ小野の落葉宮の許に殘りし事を作れり。雲井雁は光源氏の子息夕霧大將の北方にて。幼少の時より互に心を盡して契りかはしたる中なりしが。こゝに夕霧の從弟なる柏木右衛門督の北方に落葉宮と云ふありて。夫柏木の失せたる後。つひに夕霧と忍び逢ふ中と爲れり。初めは雲井雁の恨みも强かりしが。後々は心とけて雁は三條に住み宮は六條に住み。夕霧は兩方に十五日づゝ通ふ事に約束成れり。然れども死後なほ此執心のために浮かばれぬを嘆きて。僧の功力を賴みに出でたるさまなり。

藍染川

前シテ　京女
子方　同人子
後シテ　天滿天神
ワキ　宰府神主
ツレ　左近尉
トモ　神主從者

込み。故に次男市郎兵衛家を繼ぐ。渠に子なし。大阪の部屋といふ者の子器用なれば。養子として庄九郎と名乘り勤めしむる處に。公儀を嫌ひ。家を捨てゝ上方へ引退く故。土岐伊變守殿に近習奉公したる磯貝庄介は。弟子の內にて達者なれば。重ねての養子として是に繼がしむ。是れ當時の九郎兵衛也。祖父田光には。本阿彌家の者に山緒あるを以て。是を子に定め。別に家を立て次家とす。是れ葛野九郎兵衛と呼びたり。是も皷よく男もよし。常憲公の御小納戸に召出され。六百石まで取上げ。田中左平太と改號す。其子家督し。田中半右衛門と云。小普請組に入るなり。九郎兵衛御旗本へ召出だされ。則ち惡者の家督は幼少より召仕ひ。惡を指南したる若盡者器用なれば名跡に立ちて葛野忠七と名乘り。覲世座に入し。其間もなく。是も御前へ召出だされ。安田忠右衛門と號し勤仕す。

大皷の大藏が家は。金春及達が弟大藏源右衛門始也。後入道と號す南部猿樂にて其子道智尤上手也。其の子平藏續ぎて上手也。早世す故に平藏が姉の子を以て家を立て。源右衛門と號す。是を大藏宗悅取立てたり。源右衛門の子源右衛門皷よし。然るに譯有りて。弟子を害し自害せしに付き其家斷絕す。故に家傳の一卷は。公儀より御下知にて金春三郎右衛門。高安三太郎方へ渡し。此兩家大藏は弟子

狂言　神主本妻
處ハ　筑前

太宰府の神主と契りかはして子まで設けたる女。はるゝ〳〵京都より筑前まで尋ね下りたるに。妻の奸策にて遂に逢はせざれば。思ひあまりて身を投げたり。こゝに始めて其下りし事が神主に知られしがば。所禱して之を蘇生せしめし事を作れり。

松山天狗

前シテ　里人
後シテ　崇德院
ツレ　相摸坊
ワキ　西行上人
處ハ　讃岐

西行上人讃岐の松山にて崇德院の御靈にまみえ奉りし事を作れり。上人の作なる撰集抄に。御陵參拜せし物語の出でたるに基づきて。立てかる趣向なるべし。

鵜祭

前シテ　里女

筋也。道智が弟道意。其頃小皷の上手也。宮增が弟子となる事は。父入道同意せず。美濃權頭が直弟とす。道意は道智と二十歲計の弟也。上手なれば弟子多し。京東洞院二本木に住す。（一書に云。大藏道智は本より猿樂の家にて南都に居り。道智は大皷の上手にて。道意は小皷の上手也。拍子かけ聲鳴音殘る所なく。古今の上手と皆人いへり。道智弟にて年二十歲ばかり下なれば。道意に皷を習ひたる者今も多し。）

大藏六藏が家は。元伊勢の津の者也。道智參宮の序。六藏が大皷を聞て。能皷に可成と伴ひ來り。召仕の如くにして置き。業を敎ふる器用にして。他人の傳授事を聞き取り打つを以て。行末平藏が爲にいかゞあらんと。小皷にかへさせたり。後宗全と號す。其子長右衛門。其子も長右衛門といひ。後喜右衛門と改め。其子六藏長右衛門と改。其子六藏也。

今日東京に殘り居る大皷打は。葛野流にて津村又喜。植田源三。高安流にて高安龜叟あるのみ。石井流の家元石井一齋は名人なりしが昨年沒し。その弟子家小杉本祐も今は世に無ければ。同流は絕えたり。津村又喜の子又太郎は希望ある青年なりしが早世せしこそ遺憾なれ。

ツレ　同
後シテ　氣多明神
ワキ　臣下
處ハ　能登
能州氣多明神の社例なりし鵜祭の事を作れり。

源太夫

前シテ　老翁
ツレ　老嫗
後シテ　源太夫神
ツレ　立花姫
ワキ　勅使
處ハ　尾張
熱田源太夫神社の由來を作れり。

雲林院

前シテ　老翁
後シテ　在原業平
ワキ　公光
處ハ　京都
公光と云ふもの伊勢物語を尋び讀みたるが爲め。業平の靈あらはれて其物語の昔を語る事を作れり。當時は學問上にも秘事傳授など云ひて勿躰つけし事これにても見るべし。

綾皷

前シテ　御庭掃の老人
後シテ　同　幽靈
ツレ　女御
ワキ　臣下
處ハ　筑前
御庭掃の老人。女御に思を懸けたれども成らぬを嘆きて。遂に身を投げ。幽靈となりて女御を恨みに出でたる事を作れり。

輪藏

シテ　傅大士
ツレ　火天
ワキ　太宰府の僧
處ハ　京都
北野天滿宮なる輪藏の奇特を作れり。

代主

前シテ　宮人

其三　小皷

小皷は右の肩に上げ。左の手にて調べ緒を持ち。しめゆるめしつゝ右の手にて打つなり。

起原は猿樂傳記に曰く。小皷の傳來は其始美濃權守といふ。是は南都の樂人にて拍子堪能の者也。猿樂藝世に起り。その謠物に章を附け舞ふ時は扇伸の長短の程を決する爲に。皷を以て是をはやす。夫よりして笛太皷をも取り揃へたり。權守微細ならざるものなれば。その細なる事を工夫し。小皷を作りて打ち初め。その深味を極む。是よりして囃子方の内にては。小皷を表に立てたり。之を宮增彌左衛門傳へ。その弟彌七郎共に傳授す。宮增は元來武士なり。その父老衰に及ぶを以て。戰國の仕を止めて。南都西の京に居住す。兄宮增彌左衛門その業堪能にして。其弟子多しといへども。其中にも幸四郎次郎秀方にして其傳を繼ぎたり。弟彌七郎も兄に劣らず。藝をば觀世小次郎が子分の亦次郎繼ぎたり。

桑流の事。先祖四郎次郎は元春日の社人。宮增が正流を以て繼ぎ。律義なる處を以て流義とす。永祿の頃なり。元は山州宇治に住居す（是れ二代目四郎次郎忠能なり。天正七卯年死）その嫡月軒。小左衛門が次男久次郎より。清次郎が別れたり。月山小左衛門が嫡子五郎次郎家を繼ぎて早世し。其子幼年なる故。弟の小左衛門に家を渡す故。家業を勉めて又後見の幼子を以て家を立てしむ。是を幸清次郎といふ。病身の由申立て。小左衛門が子清六に家を渡し隱居す。清六後小左衛門と改號す。是に子なし。一族の内より養子して家を繼がしむ。是を四郎次郎といふ。清六と改めしが早世す。其子。五郎次郎幼年なれば。弟子として一族たる幸清次郎に看防させ。公儀を勤めしむ。かれ津輕家より扶持を賜はる。五郎次郎成長に及ぶを以て。看防を遁れて後病死す。その子の清九郎は有馬家へ抱へられ。五郎次郎若强なれば。弟子の内にて清水伊左衛門藝の指南す。此伊左衛門甲府の御役者齋藤庄介が跡にして。幸流の弟子なり。かれ學文を學び。後入道して瀟水と號し。世に和學の名を取る。其實子は沒落す。幸清次郎は庶子家にて弟子同前なり。二條　御城にて上洛の時。御能式三番に新九郎中皷にて。脇皷兩人の内一人清次郎相勤むる。是を新九郎方にて賤しむといへども。謬ある事なり。是に子なく。松井喜左衛門が次男を養子として清次郎と名乘らしむ。男よく御大老堀田筑前守の贔負にて仰立てられ。御加增まで賜はり。世に鳴るを以て。斷りなく傳授の事共を我儘にす。故に清五郎と清六

ツレ　同
後シテ　事代主神
ワキ　賀茂神職
處ハ　大和
葛城明神の神德を作れり。

盛久
シテ　主馬盛人
ワキ　土屋三郎
ツレ　太刀取
處ハ　鎌倉
平家の侍主馬の盛久囚はれて鎌倉に下りしが。日頃信仰せし觀音の利益によりて放免せらるゝ事を作れり。出處は長門本平家物語に在り。

梅
前シテ　里女
後シテ　梅の精
ワキ　藤原何某
處ハ　摂津
梅の精あらはれ出でゝ古歌と古事とを語ることを作れり。此一番は第十五代の觀世太夫が作にて。明和二年に書きたる改正謠本の序にも。先祖みづから能を作れる例に習ひ梅の能を作り加へ。すべて二百有十番とす。と云へり。此明和年代の學風は國學復古萬葉歌風再興と云ふ。流行の折柄なれば。梅の一番は言語と云ひ趣向と云ひ。如何にもかたくるしくして謠曲らしくなきは一讀する人の知るところならん。謠曲は足利時代の言語趣向なるが面白くして。後世の作の到底及ぶべき處ならぬは之れを讀みても思ひ知るべし。

草薙
前シテ　花賣男
ツレ　花賣女
ワキ　悪心信都
處ハ　尾張
日本武尊立花姫の幽靈あらはれて神劍經文の威德を語り給ふ事を作れり。

逆矛
前シテ　老翁

不通なりしが。病歿にて早世す。其子幼稚なれども松井が方にて生育し。弟子の内より。三宅助左郎門後見の處に渠病死す。又森市十郎後見と成。幸市郎右衛門と號し。公儀を勤めし處に。本家の弟子と可成と崇仰。後見を退きたり。此時先年の御加增は減し。彼幼子成長して。清次郎と名乘り。公儀を勤めて當時の上手也。單月小左衛門が次男小兵衛には。陸奥守殿に仕ふ。其嫡子五郎兵衛續て其座を勤む。藝は不堪。渠死して其子彦三郎續きて其座を勤む。新九郎家も宮增より出でたり。觀世太夫先祖宗雪が大叔父に。觀世小次郎といへる者あり。其時代迄は。脇師と定めたる者なく。太夫の方一族門弟の中より。其太夫の勤むる能の脇師に出て。相勤めしむるを以て。觀世が能なれば。働き事に限らず。毎度其脇を勤む。是今世よりみれば。脇師と立てたるにはあらず共。上手成る脇也。其嫡子を彌次郎といひて脇を勤む。父に劣らぬ上手なりしが。男色の事にて他所より歸宅の刻。家僕に殺されたり。次男に了寶といふて。成長せし者小鼓を嗜みて。宮增彌七が弟子と成り。其小鼓の家を立て。觀世又次郎と名乘る。拍子利の上手也。其子孫新九郎也。其頃桑垣元二とて。名高き小鼓打あり。是も宮增が弟子又次郎より先輩也。常憲公の御代初の上手也。渠御旨に遊ひ。年を越えて鎌倉に整居す。其後めしかへされ。實生座に被仰付。實生新九郎と名乘りたり。其嫡子新十郎。父に劣らぬ整なりしが。僧みを請け。次男權九郎を以て家督とせんとす。傳授等は教へず。斯る事故極傳は權九郎に許さんと。新十郎が留守を伺ふと覺えて。新十郎他出と披露し。閑所に隱れて居しを留守と心得。傳授の事共權九郎に傳へしを。不殘聞取たり。其後父夜行に出で。夜更けて聞取りたる事とも。皷にのせて發古し。弱法師の一曲を打つて試むる折から。父歸宅し外に彳み是を聞屆。翌日に及び糺明せしかば。包まず忍び聞き取りたる由申す故。家業志深きものなりとて。父も思ひ付きしが。早世故家督は權九郎繼ぎて。後新九郎と改號す。三男を實生彌三郎といふ。觀世流の大皷の家を新に執り立てたり。弟子にて指田市兵衛大皷なれば。其與力をせしむ。彌三郎死後子彦三跡を繼ぎて。實生座たり。扨新九郎後年願ひを立て。家の義は觀世派と申候間。本名に復し度旨。尤御免有りて。觀世新九郎を名乘りたり。此人中風にて其子權九郎當時新九郎也。（一書に曰。元二といふ皷は名高し。觀世又次郎より先輩也。道成寺など有る時は。又次郎より桑垣打つたる事多し。桑垣は宮增弟子にて男色也。皷は勝れざれども。物を知りたる事たぐひなし。小次郎は信長公の時分。殊

ツレ　男
後シテ　瀧祭の神
ワキ　臣下
處ハ　大和

瀧田明神の御山なる天逆矛の謂はれを作れるなり。第六卷の瀧田と合せ見るべし。

切兼曾我

シテ　曾我祐信
ツレ　同從者
同　兄弟の母
子方　一萬箱王兄弟
ワキ　梶原景季
トモ　從者
ツレ（一同）　同
同　太刀取
同　畠山使者
處ハ　相摸

曾我兄弟の幼少なりし頃父の科によりて刑せられんとして不意に助かりたる物語を作れり。

采女

前シテ　里女
後シテ　采女
ワキ　旅僧
處ハ　大和

采女の猿澤池に入水せし物語を作れり。出處は大和物語に。昔奈良の帝に仕うまつる采女ありけり。顏かたちいみじう清らにて。人々呼ばひ殿上人なども呼ばひけれども逢はざりけり。其逢はぬ心は。帝を限りなくめでたきものになん思ひ奉りける。帝召してけり。さて後又も召さゝりければ限なく愛しと思ひけり。心にかゝりて覺え給ひつゝ。戀しくわびしく覺え給ひけり。帝は召しゝかども思さず。さすがに常には見え奉る。なほ世に經まじき心地しければ。夜ひそかに出でゝ猿澤の池に身を投げてけり。かく投げつとも帝は得知ろしめさゝりけるを。事のついでありて人の奏しければ聞しめしてけり。いといとうあはれがり給うて人々に歌よませ給ふ。柿本人丸。吾妹子が寐ぐの外上手也と云々。）

今日東京にては大倉流に大倉六藏同利三郎あり。幸流に三須錦吾同平司山崎一道あるのみ。觀世流は先年觀世新九郎沒して跡を繼ぐものなし。

其四　太鼓

太鼓は壁に掛けて下に置き兩撥にて打つなり。

猿樂傳記に曰く。觀世左吉が太鼓の家は。似我傳流也。左吉が先祖觀世與左衛門上手にして弟子共に教ゆるには。己が太鼓を我に似よ〳〵といふなり。依之似我與左衛門と人呼ふ。其子孫左吉と號す。（私に曰。此家に片撥といふ事あり。是は先祖名人にて。四座のこらず集めて片撥にも及ばずといふ事なりと云。）

金春惣右衛門彦九郎と號して。天和の頃彦九郎早世。弟子の內より森孫兵衛家を繼きて。彦九郎　成りしが。間もなく御近習に被召出。に付。先惣右衛門が弟子。植村三郎左衛門家を預る。金春の名字を繼ぐ。是は死したる彦九郎が幼子萬之助が看防也。三郎左衛門功者にして。家傳を預り置きし者なれば。世に奔走す。實生座に被仰付て。是より實生と稱して。養子三郎次郎をも。藝能を以て御近習に被召出。伴三郎次郎と名乘らしむ。渠は小田原町の看屋の子也其後三郎左衛門には。生類の御法度を背き。魚釣りたる御科にて牢舍し。牢內にて病死す。養子十三郎御改易也。文昭公の御代に成。十三郎被召歸再度實生座に入りて。享保の晩年に相果てたり。三郎左衛門には幸流の小鼓。植村道齊が子にして。先藤左衛門父の跡を相繼ぐ。小鼓也次男は植村十郎右衛門。太鼓の業よく成る。渠が養子平八。甲府の御附被仰付。小川長十郎と號す。後河野信濃守といふ。三男此三郎左衛門太鼓四男植村十郎左衛門謠の職分を立てたり。彦九郎が子萬之丞元服して。金春彦九郎と名乘り。父が家を立てたり。然るに渠も御近習被召出川井與左衛門と改號す。故に猿樂の家は。三郎左衛門が弟子。中西新次郎が弟。新六を繼がしめ金春惣右衛門と名乘らしむ。藝達者なりしが早世して。實兄新六郎を願ひ家を立てたり。是當時の金春惣右衛門也。彼川井與左衛門。享保の中年。御願を立て。猿樂の列へ立ち返り。金春彦九郎の名に戻る被召出たる時の百五十石は。其儘被下置に付刀は指したり。かくして後彦九郎病死。其御切米上り斷絕して。惣右衛門彼家を持ちたり。